

# 教会学校教案誌

2009.1.2.3月号



No.32

日本キリスト改革派教会  
中部中会日曜学校委員会

# 2009年1～3月カリキュラム (第32号)

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第1年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
1月4日 新年	恵みのみ	問28	ウ大58、ハイデ60, 61
		マタイ9:1-8	マタイ9:2 後半
神の救いはただ恵みとして与えられる。救いを与えるお方の前にひれ伏そう			
11日	選びと有効召命	問29	ウ小29-32、ウ大59、ハイデ21
		マタイ9:9-13	マタイ9:13 後半
主なる神は罪人を愛して選び出しておられる。神の選びの恵みを喜ぼう			
18日	キリストとの結合	問30	ウ小29, 30、ハイデ53, 65
		ヨハネ15:1-10	ヨハネ15:5 前半
聖霊によりキリストと結びあわせられている。キリストとの絆のうちに歩もう			
25日	罪の赦しと義認	問31	ウ小33、ハイデ56
		ヨハネ8:1-11	ヨハネ8:11 後半
神の御前に打ち砕かれ、罪を赦されて生きる幸いを知ろう			
2月1日	神の子とされる幸い	問31	ウ小34、ハイデ59
		ガラテヤ4:1-7	ガラテヤ4:6
罪赦されて、神の子とされている。聖霊を注がれて、「アッバ、父よ」と呼ぼう			
8日 (信教の自由)	聖化の恵み	問32, 33	ウ小35, 36
		ガラテヤ2:19-21	ヨハネ1:7
キリストがわたしたちのうちに生きておられ、聖とされていることを喜ぼう			
15日 レント	愛の歩み	問32, 33	ウ小35, 36、ハイデ60, 61
		コロサイ3:12-17	ヨハネ2:6
神の完全な愛で愛されて、わたしたちも喜びをもって愛に生きていこう			
22日 レント	主イエスと共に歩む	問34	ウ小30、ウ大54, 82, 83
		マタイ28:16-20	詩編119:9
信仰者の歩みは孤独ではない。主イエスと共に歩み、神の民と共に歩もう			
3月1日 レント	聖徒の交わり	問34	ウ小88、ウ大63, 82, 83
		コリント12:12-26	詩編89:16
信仰者は神の民の交わりに生かされる。聖徒の交わりに生きる信仰を養おう			
8日 レント	再臨の約束	問35	ウ小28、ウ大56、ハイデ52
		テサロニケ1:5:1-5	テサロニケ1:5:4 後半
主イエス・キリストは再び来られる。そのことを知る幸いを感謝しよう			
15日 レント	再臨に備える	問35	ウ小36、ウ大79-83、ハイデ52
		テサロニケ1:5:6-11	テサロニケ1:5:8
主の再臨を待ち望み、身を慎んで、光の子として歩もう			
22日 レント	死のときの祝福	問36	ウ小37、ハイデ1
		ルカ23:39-43	ルカ23:43
主イエスに結ばれて、恐れから解放されて死ぬことの幸いを知ろう			
29日 レント	復活のときの祝福	問36	ウ小38、ハイデ57, 58
		黙示録7:9-17	コリント15:55
主イエスに完全に一つにされ、涙をぬぐわれる復活の幸いを待ち望もう			

も く じ

2008年10・11・12月カリキュラム

まえがき	牧野信成	4
巻頭説教	長谷川潤	5
日曜学校・教会学校訪問		
“Summer Days 2008の報告”	吉岡契典	8
自由募金のお願い		12

聖書研究・説教展開例・分級展開例

1月 4日	14
1月11日	22
1月18日	30
1月25日	38
2月 1日	46
2月 8日	54
2月15日	62
2月22日	70
3月 1日	78
3月 8日	86
3月15日	94
3月22日	102
3月29日	110
小学科上級の答えの参考	118

2009年4・5・6月カリキュラム

2009年度年間カリキュラム	120
副読本のご案内	122
『いのちのパン』（「子どもカテキズム」による聖書日課）のご案内	123
執筆者よりひとこと・あとがき	124

---

# まえがき

牧野信成（神戸改革派神学校専任教授）

---

子育てで私が関心を払ってきたことの第一は、ことばがきちんと届くように話しかけることでした。我が家には小学校3年生を初めとする3人の子どもたちがありますが、最初の子が生まれる前から心にそう決めていました。たいした決心ではありませんけれども、教会の取り組みで注意してきたことの延長で自然とそう考えました。ことばをまだ知らない幼子にも、きちんと声が届くように話しかけ、その届き具合を見定める——口から発することばは身体の器官である、と竹内敏晴さんの一連の著作から教えられたことの実践です。本来、日常の会話で成り立っているはずの声の交換を少しばかり丁寧と言い直したただけのように思われるかもしれませんが、案外、自分のことばは相手には届いておらず、宙に舞い、地に落ちこぼれているものです。

そうして書物の後ろ盾を得ながら、ある種の実験を試みたことになりましたが、子どもに対することばの接し方の吟味は、それが子どもたちの、ことばに対する注意力を養うことになるだろうと考えてのことです。ことばが確かに届くときにはそれなりの手ごたえがあります。一回一回に全神経を集中していますと疲れてしまって続かなくなりますが、いつも丁寧に心掛けていれば、子どもたちもきちんと応答してくれます。押し付けがましく型にはめ込むのではなく、ことばを介しての自然な対応が生まれるのを感じとりながら、ゆっくりと待ちます。

ことばのやり取りに関してのこうした感覚は、教会のあらゆる場面でも多くのことを教えてくれるように思います。礼拝での司式者の言葉遣いと説教者の語り口、会衆の賛美や祈りから新来会者への接し方など、奉仕者が今どのような姿勢で語りかける対象と向かっているか

が、そのことばの発し方で分かります。教会学校では教師たちの子どもに対する話し方から、教会に集まった一人ひとりの子どもたちがそこで本当に相手にされているかどうか、子どもたちから問われているように思います。先生は大きな声で快活に呼びかけているけれども、プログラムを間違えないように心配しているのか、子どもたちが騒ぎ出さないように声量で威圧しているのか、ともかくことばが大水のように流れているのですが、群れている一人ひとりには呼びかけられていない、という光景が時々みられます。不慣れなせいで口が開かない段階から、大胆に滑らかに話すことの出来る段階を経て、確かにことばの交感成り立つ状態へ進みたい。その最後の段階に至ってようやく、子どもたちは耳をすます術を覚えて、そこに自分の居場所を見出して安心します。

相手が聞いていようといまいと喋り続けて、聞く者をうんざりさせてしまうのは、ことばの交感を失ったディスコミュニケーション時代の特徴なのでしょう。その中でむしろ、一語でもいいから確実に届けたい。届いた言葉は必ず相手に作用します。子どもたちの多くの場合、返事は目の動きだけかも知れません。しかし、それは分かってくれたことのにしに違いありません。そのしるしを求めて語りかけるだけの心の余裕と注意深さを保ちたいのです。

「信仰は聞くことによる」（ローマ10:17）のですから、子どもたちが聞けないのは信仰の継承において深刻です。しかし、それは大人も相手によく耳を傾けることをしないからで、語る時も本当に聞かれて理解されることを期待していないからではないか。教会学校も伝道も、この辺りから吟味してはどうかと思っています。

# 「イエス様のまなざしをもって ～教会学校教師の視点」

—マタイによる福音書9章35～38節による説教—

長谷川 潤（四日市教会牧師）

イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた。また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。そこで、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるよう、収穫の主に願いなさい。」（マタイによる福音書9章35～38節）

いじめが社会問題となって久しいのですが、私たちが日曜学校などでふだん関わっている子どもたちが本当に生きにくい時代となっています。いじめによる自殺が相次いで報道されていますが、そんな中で、昨年2007年にある新聞のトップで、“いじめと生きる”と題する記事が連載されました。年頭の一週間は、40年近く人気の衰えを知らない、マンガの“ドラえもん”から、いじめを考える記事が連載されました。それをこの誌上で詳しく紹介することはできませんが、結局こういうことです。“ドラえもん”の全てがそうではないのですが、その多くはいじめが筋立ての基本になっているのです。それで、いじめの基本構造として、加害者がいて、被害者がいて、そして、はやしたる観客と、知らぬふりをする傍観者がいるわけですが、この基本構造がピッタリと“ドラえもん”に当てはまる。つまり、加害者はジャイアン、被害者がのび太、そして、観客がスネ夫で、傍観者がしずかちゃん、ということになります。私は、“ドラえもん”をそんなによく見ていないのですが、それでも、たまに子どもと一緒に見ても、そんな見方をしたことはありませんでした。私の子どもの頃も、ジャイアンのようなガキ大将的な人間がいて、弱者は、そのガキ

大将に自然となびいて行ったものです。ですから、作者の藤子さんがおっしゃったように、“ありふれた町のありふれた日常”を描いているな、ぐらいにしかなりませんでした。今日、いじめが深刻化している中で、“ドラえもん”を見るならば、確かにいじめが筋立ての基本になっているとすることができるのでしょうか。

ところで、今回、読者の皆さんとご一緒に心に留めたいと願いましたのは、イエス様が、飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれている群衆を御覧になって、深く憐れまれたということです。そこで、まず、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果てている、という表現があります。この“弱り果てている”と日本語に訳されている元々の言葉は、“皮をはがされ、ずたずたに切られている”というひどい状態を表す言葉です。翻訳の中には、“虐待されている”と訳している場合もあります。また、群衆が打ちひしがれている、という表現があります。この“打ちひしがれている”とは、国語辞書によりますと、強いショックを与えられ、生きる意欲を失っていることですが、“打ちひしがれている”と日本語に訳される元々の言葉は、ある状態に“投げ出されている”という意味があります。それで、人々のことが、飼い主

のいない羊に譬えられているのですが、飼い主のいない羊のように弱り果てている、つまり、飼い主がいないために、あちこち山や谷に迷い込んで、岩に当たって皮がはがれたり、木の枝で傷つき弱り果てている、そんな羊に人々のことが譬えられているのです。或いは、たとえ飼い主がいたとしても悪い飼い主のために虐待されて弱り果てている、そんな羊に譬えられている。さらには飼い主のいない羊のように打ちひしがれている、つまり、飼い主がいないために、飢え渇きの状態へと放り出されて、生きる気力を失って横たわっている、そんな羊に人々が譬えられているのです。こんな風にイエス様はこの当時の人々の有様を御覧になったわけですが、恐らく、イエス様は、今日の人々、特に今日の子どもたちの有様も、同じように御覧になられることでしょう。

今日、子どもたちの多くも、大人によって窒息しそうな状態へと放り出され、弱り果てているのです。特に心が窒息しそうな状態へと追い立てられている。いじめに走る原因はいろいろあるかと思いますが、そんな心の窒息状態、精神的な閉塞状態に何とか穴をこじ開けて、生き延びようとして、ある子どもは、弱者へのいじめに走るのではないかと思います。ジャイアンは言います。“何だか、むしゃくしゃするぞ。だれでもいいからいじめるあい手がほしいぞ！”。ジャイアンの心を窒息させていたのは、いったい、何なのでしょう。“ドラえもん”をいつも見てないので、よく分かりませんが、ジャイアンをのび太いじめへと走らせている何らかの原因、ジャイアンの心を窒息させる原因が必ずあるはずです。

さて、イエス様は、人々の有様を飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれている状態と見なされました。そして、人々を深く憐れまれたのです。イエス様は、今の子どもたちの有様も御覧になって、同じように子どもたちを深く憐れまれると思います。それで、このイ

エス様が深く憐れまれたという場合の“憐れむ”という言葉には少々説明が必要かも知れません。国語辞書によりますと、“憐れむ”というのは、“かわいそうに思う、同情に値すると思う”といった程度の意味です。また、上に立ちながら、弱り果て、打ちひしがれ、横たわっている者に同情するといったニュアンスがあります。“憐れみをたれる”と言われたりします。上から下への方向です。逆に弱り果てている者が、“憐れみを乞う”と言われたりします。これは、下から上への方向です。このようにどうしても日本語ですと、憐れむ者と憐れまれる者との上下関係が出てしまいます。しかし、イエス様の場合は、そうではありません。ここをこんな風に翻訳している聖書もあります。“腸(はらわた＝内臓)がちぎれる想いに駆られた”。イエス様は、心が窒息しそうな状態の子どもたちに同情するとか、かわいそうに思うといった程度ではないのです。子どもたちを御覧になって、内臓がちぎれる想いをなされるのです。“断腸の想い”といった表現がありますが、昔、内臓が感情の座であると見なされていたからです。イエス様は、子どもたちの有様を御覧になると、心が痛んで痛んで仕方がないのです。それは、イエス様は、上から見下ろして子どもを御覧になっていらっしゃるのではなく、子どもたちの傍らで、子どもと同じ目線で、御覧になれるからです。そして、子どもたちの痛みを御自分の痛みとなされるからです。

私は、今現在、四日市教会に併設されているまきば幼稚園に宗教主事として関わらせていただいています。それで、幼児教育の端っこに関わっている関係で、幼児教育に関する文章などをできるだけ読むようにしているのですが、これもやはり新聞ですが、ある日の夕刊に、ある保育士の方へのインタビュー記事が載っていました。その中で、信じられない現実が紹介されていました。最近、母親と幼児との関係で、早く職場復帰したいからとか、母よりも女性でい

たいからとか、生活が苦しいからとか、理由はいろいろですが、幼児を勝手に“一人前”と見なす、自分本位の考え方が増えているとのこと。それで、ある家庭では、台所のテーブルの上に電子レンジが一台置いてあって、インスタント食品が二、三十種類並んでいるそうです。自分たちがインスタント食品で大丈夫だから、我が子も大丈夫といった考え方です。これはほんの一例ですが、親の自分本位のいろんな考え方が、知らず知らずの内に子どもたちの身体だけでなく、心にもプレッシャーを与えて、窒息させようとしているのだと思います。

私たちの周りにはこのようなひどいケースはないかも知れませんが、子どもたちも、家庭を基本として、いろんな人間関係の中で毎日生活している限り、自分も、また、周りも気づかない内に心が窒息しそうな状態へと追い込まれることがあるかと思えます。そんな時、子どもを上から見下ろしていたのでは、子どものSOSは全く分かりません。やはり、イエス様のように子どもの傍らに立って、子どもの目線で、接しないことには難しいでしょう。しかし、日曜学校で託されている子ども一人一人を本当に理解するということはとても難しいことです。“理解する”は、英語で、“understand”ですが、“under”＝下に、“stand”＝立つ、つまり、子どもたちの下に立つことをしなければ、本当に理解することはできないのです。傍らに立っただけでは、本当に理解したことにはならない。それならば、深く憐れむこともできないということです。私たちには全く不可能のように思えます。かつての総理大臣が、“子どもたちのサインを見逃さないよう、できるだけ早く対応することが大切だ”と言ったそうですが、言うは易く、実際にサインを発見するのは難しいことではないでしょうか。

ところが、私たちには不可能なことが可能と

なる。それが、日曜学校の働きのすばらしい点ではないかと思っています。それなら、不可能なことが可能となるとは、どういうことなのでしょう。つまり、それは、聖書に教えられている目に見えない現実を信じることです。私たちのただ中に、そして、子どもたち一人一人の傍らに、目には見えませんが、イエス様がいらっしゃって、働いていらっしゃるといふ、目に見えない現実を信じることにあります。そして、そのイエス様が子どもたち一人一人をよく理解してくださって、深く憐れんでくださることを信じることです。イエス様は、いと高き神様の独り子でいらっしゃいますが、いと高き天から救いの御業を行われるのではありません。私たち人間の傍らに人となってお出でくださって、ついには十字架で死なれて陰府にまで降って行かれたのです。いわば、私たちの下に立ってくださったのです。そして、十字架の死から復活なさることで、私たちを下から天国へと救い上げてくださって、今は、目には見えませんが、私たちの傍らにいてくださる。そういうイエス様が子どもたちの傍らにもいらっしゃって、深く憐れんでくださり、一人一人の心が窒息しないように助けてくださると信じるのです。そのことを信じながら、私たちは、イエス様が子どもたち一人一人を育ててくださる御業のお手伝いをさせていただくわけです。そのためにも、聖書のイエス様に学びながら、イエス様の眼差しを自分の眼差しとすることができるようにと祈りつつ、子どもたちと関わって行く、それが、日曜学校教師の働きなのではないかと思えます。私たちのただ中に、イエス様が共にいらっしゃって、深い憐れみをもって子どもたち一人一人にふさわしい助けの御手を差し伸べてくださると信じながら、子どもたちの目線で面と向かうことができると願います。

(『教会学校教案誌』編集部委員)

## “Summer Days 2008”の報告

吉岡契典（仙台カナン教会牧師）

2008年8月11日(月)～14日(木)に、岐阜県恵那市の「雀のお宿キリスト教会館」にて、“Summer Days 2008”が、東北中会・中部中会の共催によって行なわれました。これは、日本キリスト改革派教会で初めてとなる、全国規模の高校生キャンプです。

このキャンプのねらいとするところは、各個教会でも学校生活においても、どうしても同年代のクリスチャンの仲間が少なく、その意味で少数派に留まってしまう高校生たちに、同世代の仲間との出会いの場を提供すること、そして高校生という、中学生とも大学生ともまた違うその世代に合わせたキャンプを行い、神様との出会いの場を良いかたちで提供することです。

そしてキャンプ企画者には、このキャンプを通して高校生たちが、クリスチャンとして生きることへの肯定感と自信を持つに至って欲しいという願いがありました。

初の試みでしたので、参加者が集められるかどうか心配されましたが、結果的には四国中会以外の全中会から、37名の参加者（キャンパー）が与えられ、スタッフも合わせて60人超という、大変充実した体制でキャンプを行なうことが出来ました。中会ごとのキャンパーの内訳は、東北中会から10名、中部中会から13名、東関東中会から7名、東部中会から1名、西部中会から6名でした。遠くは九州からの参加者も与えられました。



二日目、ハイキング時に



キャンプの会場となった「雀のお宿」は、日本キリスト改革派教会が所有している施設です。自然に恵まれた広大な施設なのですが、老朽化などの問題もあるため、再活用が大会的に検討されている施設です。そこでその雀のお宿を再活用して、そこを若い世代の「信仰の故郷」としたいという願いも、このキャンプの構想には含まれています。

キャンプの内容としては、高校生世代が親しみ易く、体を動かし、それに伴って心も動かしながら、緊張から解き放たれ、開放感を持って過ごすことのできるようなプログラムが検討されました。

その結果、そこには何らかの学習のために集う集まりとはまた違ったかたちで、参加者相互の人格的な触れ合いにそれぞれの目が向き、時を追うに従って、人との、友との、自分との、そして何より神様との深い出会いへと、スタッフも含めて、皆の集中が次第に高まっていくような、そんな感覚を覚えたキャンプでした。三泊四日という長いキャンプ期間の設定も、一泊毎に驚くほど変化し、より深まっていく高校生同士の交わりと、より長い時間を共有することによって強められる高校生たちの霊的な成長を鑑みて設定されました。

毎晩、夜には集会がもたれ、フルバンドの賛美チームが、子どもたちに賛美の力強さと喜びを全身で証していました。また、高校生ともなるとそこから足が遠のきがちになる、野外や自然の中で行なわれる数々の企画や、高校生たちと常に一緒に過ごすカウンセラースタッフたちのきめ細かい連携や、高校生同士が一对一で個

別的に行う対話の重視など、良い意味で既存の修養会のかたちにとらわれないプログラムによってキャンプが進行されました。

キャンプの初日に、大変な緊張の面持ちで全国各地から集められた高校生たちは、キャンプ最終日に行われた証し会では、初日とは全く別の解放された表情で、それぞれ喜びの涙を滲ませながら、キャンプで与えられた恵みを自分の言葉にして語ってくれました。そのような子どもたちの美しい表情と信仰を目の当たりにすることができ、私は心から、自分がその場に居ることのできる幸せを感じました。

私はこのキャンプに、改革派教会がモットーとしている、教育的伝道のひとつの端緒が現れているように思いました。20年、30年、その後の改革派教会を思い描く時に、今のこの様な取り組みこそが、将来の改革派教会の機軸を支えする大きな一歩となるのではないかと思います。

大会はこの高校生キャンプの来年の実施を、全会一致で承認しました。来年度は、二中会合同というかたちではなく、正式に大会による全国キャンプとして行なうこととなります。まだまだ伸びしろのある、成長と発展の可能性を秘めたキャンプであると思われますし、キャンプを準備し提供する側の私たち大人をさえも、高校生たちの澄んだ眼差しやその言葉が、大きく励まし、更なる献身へと勢いづかせてくれるような、素晴らしいキャンプです。どうか今後とも、この働きのためにお祈りください。

(東北中会教育委員会委員)



一日目、美味しい食事の時間タイム



二日目、ハイキングに行きました



三日目、お宿にて



三日目、みんなでスポーツ



三日目、部屋ごとの出し物



四日目、大掃除もしました！



四日目、バンドもありました



四日目、感動のフィナーレ

	11日(月)	12日(火)		13日(水)	14日(木)			
		起床	7:00	起床	起床	7:00		
		ラジオ体操 朝のショートメッセージ 朝の祈り会	:30	ラジオ体操 朝のショートメッセージ 朝の祈り会	ラジオ体操 朝のショートメッセージ 朝の祈り会	:30		
		朝食	8:00	朝食	朝食	8:00		
		片付け	:30	片付け	片付け	:30		
		ハイキング (途中で昼食)	9:00	スポーツ	掃除 カウンセラー ミーティング	9:00		
			:30			:30	:30	
			10:00			証し準備	証し準備	10:00
			:30					:30
11:00	(スタッフ集合) スタッフミーティング		11:00			11:00		
	昼食		:30		証し会	:30		
	全体祈禱会		12:00	昼食		12:00		
	分野別スタッフミーティング		:30	出し物準備	昼食 (普通の時間にもどす)→	:30		
	(12:31 送迎)		13:00		解散	13:00		
	受付	お風呂・自由	:30	出し物発表会		:30		
	オープニングセレモニー 部屋別自己紹介 オリエンテーション				14:00		14:00	
			バンド練習		:30		:30	
			カウンセラー ミーティング		:30		:30	
17:00	←(サマータイムに変更) ウェルカムパーティー		15:00	お風呂・自由		15:00		
			:30	バンド練習		:30		
			16:00	カウンセラー ミーティング		16:00		
		夕食	:30			:30		
	入浴・自由		17:00	夕食		17:00		
	夕食	夕べの集い	:30	自由		:30		
			18:00	キャンプファイヤー		18:00		
	夕べの集い	語り合い	:30	語り合い		:30		
		部屋別ディボーション	19:00	部屋別ディボーション		19:00		
	語り合い		:30	就寝		:30		
	部屋別ディボーション	就寝	20:00			20:00		
			:30			:30		
	就寝		21:00			21:00		
			:30			:30		
			22:00			22:00		
			:30			:30		
			23:00			23:00		
			:30			:30		
			0:00			0:00		

## 『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会日曜学校委員会（2007年4月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに満7年となり、第32号まで発行して参りました。中部中会では7割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ60教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしく願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額	30万円
送金先	郵便振替 伊藤治郎
	00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

---

マルコによる福音書2章1～12節とルカによる福音書5章17～26節にも並行記事がある。比較すると、マタイの記事が一番短い。マタイの最も重要な省略は、屋根を通して病人をイエス様の前に降ろす印象的な場面が全部カットされていることである。その意図は、イエス様の赦しに、より大きな強調を置くためであった。これこそ、マタイの重要な関心事である。

「子よ、元気を出しなさい」。イエス様は中風の人の信仰を彼らの行動から見て取られ、悲惨な状態の中風の人に、まず親しみのこもった励ましの御言葉を御自分からかけられた。

「あなたの罪は赦される」。このイエス様の宣言が中風の人と何の関係があるのかと、不思議に感じる。しかし当時のユダヤ人の文化では、病の原因は罪だと一般に考えられていた（参照、ヨハネ9:2）。「あなたの罪は赦される」という御言葉の時刻は、赦しは未来に起こるのではなく、今、その賜物が授けられることを示す。イエス様が赦しを宣言された瞬間にこの中風の人の罪は全て過ぎ去り、帳消しにされたのである。因果応報的な見方をする環境下にあった中風の人にとって、イエス様の赦しの保証は、「子よ、元気を出しなさい」という励ましを、まさに彼の生の現実としただろう。

イエス様の罪の赦しの宣言は、律法学者の内心の非難を呼び起こした。「この男」という言葉には侮蔑のニュアンスが込められている。「神を冒瀆している」は、イエス様への最も真剣な内面の告発を表現している。律法学者の目には、イエス様は他のガリラヤ人と何ら異なることのない、通常の人間的限界を持つ者に過ぎなかった。その人間が神様の終末的祝福である罪の赦しを宣言することは、神様だけが行使出来る特権を不当に強奪

する冒瀆以外の何ものでもなかったのである。

イエス様は「なぜ、心の中で悪いことを考えているのか」と律法学者の内心の思いを酷評し、二者択一の質問を問われた。『『あなたの罪は赦される』』と言うのと、『起きて歩け』』と言うのと、どちらが易しいか。明らかな答えは、言うだけならば、「罪は赦される」と言う方が易しいである。何故なら、傍で見ている者達には、罪の赦しが本当になされたか、否かを視覚的に確認することは出来ないからである。しかし『『起きて歩け』』の方は、結果が伴わなければ一目瞭然であり、恥と嘲りに身をさらすこととなる。

既に中風の人に赦しを宣言しておられたイエス様は、中風の人の癒しをなさった。これによって律法学者の考えは裏切られ、イエス様の主張の正しさが示された。『『起きて歩け』』の方に効果があったならば、『『あなたの罪は赦される』』の方も、単にイエス様がそのふりをしていただけではなかったのだと納得させられるからである。中風の人の癒しの奇跡は、人の子イエス様が神様の終末の大権をこの地上にもたらす権威を持っていることを鮮やかに証明したのである。

見ていた群衆は、神様の現臨に直面したかのような反応をし、神様に栄光を帰した。神様が罪の赦しを天にとどめおかず、イエス様において、イエス様を通して、この地上でお与えになるのをよしとされたことを目の当たりに示されたからである。イエス様を信じる者達には、既にこの地上での歩みにおいて、罪の赦しの恵みが現実に保証されている。これによって、「子よ、元気を出しなさい」というイエス様の励ましの御言葉が私達自身においても現実となる。生きる勇気と力を与えられるのである。（岡本 告）

## 子どもカテキズム

問28 主イエス・キリストの救いは、どのようにして私たちのものとなるのですか。

答 私たちが持っている正しさやかしこさ、そのほか、どんな良いものでも、  
自分の力で救いを手に入れることはできません。  
救いは、ただ神さまの恵みとして与えられるのです。

この問28から「五 聖霊なる神さま」という大きな括りに入るわけであるが、カテキズムでは、聖霊なる神さまがどんなお方であるかとか、何をされる方なのか、ということには直接的には触れていない。それよりも、「恵み」とか「救い」ということに触れている。それは、まさに聖霊なる神さまが、恵みによる救いの中でこそ豊かに働かれるお方だからである。ちょうど風について定義するのは難しいけれども、どんな小さな子どもでも風が吹いていることが分かるというのと、よく似ている。

問答で語られている言葉は、子どもたちにはピンと来ない(あるいは、右から左へ通り抜けていってしまう)かもしれないが、彼らの実生活の中で考えると、その言わんとする事柄の本質が見えてくると思う。周りの親や先生や大人たちが(それが教会の大人たちであっても)自分たちを評価してくれるのは、ほとんどの場合、何か良いことをした時や、何かの能力に秀でている(あるいは秀でるようになった)時であって、そうでない時には、自分を肯定してくれる言葉や態度にお目にかかることは減多にないのである。だから、何もできないつまらない自分であっても、また、何か悪いことを言ったりやったりしてしまう自分であっても、この自分という存在そのものがいつだって受け入れられ、認められていること、それが子どもたちにとっての「救い」であるとも言えよう。イエス様は、周りの大人たちや友達とは違う。ど

んな時でも、どれほど惨めな自分であっても、僕のこと・私のことを愛してくれる。それこそが、子どもたちにとっての恵みでなくて何であろうか。それを周りの大人たちや友達を通して味わうことができるならば、何と幸いなことだろうかと思う。教会がそういう場になるようにと、願わずにはいられない。

子どもたちは、大人たちがすることをよく見ている。教会に生きる大人の人たちが、どんな言動を取り、どのような振る舞いをするかに、大きく影響されている。皆が皆、主の恵みに生きるのは難しかろうが、それでも大部分の人たちの生き様によって、子どもたちは恵みの何たるかを知るのである。人生の先輩であり、進むべき道を指し示してくれる信仰の先達たちが、教会の中で、またクリスチャンの集まりの中で、自己正当化をしたり、頭の良さや賜物の凄さを自慢していたりすれば、信仰とはそういうものなのだ、子どもたちは思うであろう。だが、既に恵みにあずかって、その豊かな恵みに生きている人々が、自分たちの弱さ、愚かさ、足りなさや失敗を、イエス様の故に大いに喜んでいるなら、小さき者たちは、恵みの力強さ、素晴らしさを知るに違いない。

そういう意味で、「主イエス・キリストの救い」が、「私たち(子どもたち)のものとなる」のは、この世の価値観とは正反対の「主の恵み」に生きている大人たちを通してであろう。(梶浦和城)

テキスト            マタイによる福音書 9章1～8節  
カテキズム        子どもカテキズム 問28

### 〔単元のねらい〕

与えられたテキストには豊かなメッセージが蔵されているが、子どもカテキズム問28の理解を深めるということを最優先し、焦点をしぼった。ゆえに語っていない部分が多くあるが、聖書研究などを参考に各自で判断していただきたい。単元の主題は「恵みのみ」ということであるが、私たちが救うための神の自由な恩恵のありがたさを、その大きさのままに受け取るためには、自らの罪の深刻さに打ちのめされる必要がある。罪に死なねば、命を喜べない。「私たちが持っている正しさやかしこさ、そのほか、どんな良いものでも、自分の力で救いを手に入れることはできません。」子どもたちとともに、この答えを自分のものとすることを目指したい。

## 「子よ、元気を出しなさい」

今日の記事は、中風の人がベッドに寝かされたまま友人に運ばれて、イエス様のもとにつれてこられたと伝えています。この中風という病気は大変重い病気であったようで、脳出血で手足が麻痺してしまったような状態をいうようです。なにしろ寝たきりのままの、なににもできないような体であったのだと思われます。とても惨めな思いで過ごしていたかもしれない。未来になんの希望も持てない、元気を出しようがない、そんな毎日。

そして悪いことに、この時代のユダヤの人々は、病気というのはその人間が神様から罰を受けているしるしのようなものであると考えていました。ヨハネ福音書の9章2節にも「この人が生まれつき目が見えないのは誰が罪を犯したからですか、この人ですか、両親ですか？」という記事があります。そのように病は本人もしくは先祖の罪に対する神様の罰だと考えられてきたのです。そんなのは大間違いだと、今の私たちは知っています。でもこの中風の人は、そういうユダヤ社会の中で生きていて、そういう教えのもとで育ってきたのです。だからこの人は毎日、自分は神様から罰を受けていると感じていたのだと思います。苦しかったでしょう。怖かったでしょう。そして絶望していたことでしょう。

動けない体で、天上を見上げながら「あの時嘘

をついたのがいけなかった……あの時悪口を言ったのがいけなかった……」と後悔ばかりしていたかもしれません。「神様は怒っておられる。私を愛してなどくださらない。私はダメな人間だ。だからこんな体になってしまった。もう一人で歩くこともできない、何もできない。何も持たない。こんな自分は、もういなくなったほうがいい……。」そんな風に、深く深く絶望の淵に落ち込んでいく日々だったかもしれません。

みなさんの中にも、色んな事情で幼い頃から寝たきりの方がいらっしゃるかもしれません。でも多くの方は、元気に走り回ることができるでしょう。勉強もスポーツもがんばって、大きな声で歌うことも笑うこともできる。毎日自信満々で生きることができているなら、それは本当に素晴らしいことです。私は皆さんが、神様の愛をいっぱい受けながら、元気に満たされて歩いてほしいといつも祈っています。でも私たちは、そうやって自信満々で生きている時には、残念ながらこの中風の人のような元気の出ない人の気持ちが分からなくなるものです。ちょっと「かわいそうだな」って思うくらい。

しかし今日はいっしょに考えたいのです。この中風のひとと私たちは、何も違いがないということ



を考えたいのです。「かわいそうだな」なんて憐れむことのできる立場にはないのです。かわいそうなのは私たちです。人間の目で見れば、この中風の人に比べて私たちの多くは何でもできるし自信満々です。でも神様の前では、同じです。私たちも神様に自慢することのできるものを、何も持っていない。自分を救うために何もできない、滅びるべき罪人です。

私たちには「これは罰なのか？」と思うような、病気や痛みは与えられていないかもしれない。だから「あの時のあれが悪かったかも……」なんて頭を悩ませることはないかもしれない。でも神様が、そういう私たちの毎日犯しつづける罪の一つ一つを見過ごしておられると思ったら大間違いです。人を馬鹿にしたり、優しさを忘れたり、あげくの果てに、自分に都合の悪い聖書の言葉なんて「そんなの関係ねえ」って無視してみたり。正義の神様は、そんな私たちを笑って赦してはくれません。そういう私たちのふるまいは「死に値する」とはっきり聖書に書いてあります（ローマ1:32）。私たちはそういう悲しい存在です。本当は神様に愛される理由なんて何もありません。そういうことを真剣に考えるならば、この中風の人と同じように、深く深く落ち込んでいくより仕方がないはずなのです。

でもイエス様は、そんな私たちに「子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は赦される。」と仰ってくださいます。だから安心しなさいと仰ってくださいます。私たちは神様の前で何も持たない罪人です。「死に値する」ことを平気でやってのける者たちです。でもイエス様が、その私たちが

赦されると仰ってくださいます。だから私たちは、安心して神様の前で生きることができます。神様を怖がらずに生きることも死ぬこともできます。

イエス様は、そんな罪の赦しを与えてくださる方です。なぜならこの方は、私たちの身代わりに十字架にかかってくくださる方だからです。私たちの代わりに、神様に滅ぼされてくださる方だからです。真っ暗な闇の中で、神様の怒りを全部引き受けてくださる方だからです。イエス様は「あなたの罪は赦される」と仰ってくださいます。それは「私があなたの代わりに死ぬ」と仰ってくださいます。あなたを決して滅ぼしはしない、私が滅びると仰ってくださいます方が私たちの救い主です。だから私たちはもう惨めに落ち込んでいる必要ありません。元気を出すことができるのです。

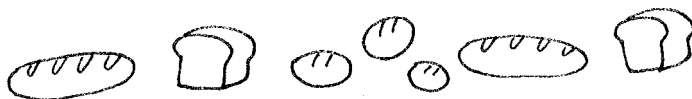
中風の人も、そんなイエス様に罪を赦されて、元気を取り戻しました。そして病をも癒されたことが分かります。自分を救うために何もできなかった人だからこそ、イエス様の与えてくださる救いをまっすぐに受けとめて、それを喜ぶことができました。それと正反対の人も、ここには登場しています。イエス様を陰で悪く言う律法学者の人たちです。この人たちは、自分たちこそが神様のことを一番よく分かっている、そして自分たちは神様の前で正しく生きてると自信満々でした。でもそのような心では、イエス様の救いを喜ぶことはできません。私たちは、イエス様に罪を赦していただいて、元気を出してこの一年を過ごしたいですね。（坂井孝宏）

---

[今週の暗唱聖句]      マタイによる福音書 9章2節後半

イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、  
「子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は赦される」と言われた。

---



〈ねらい〉

わたしたちがどんなに賢く、よい子になっても、イエス様の救いを手に入れることはできません。また、自分で自分の罪をあがなうこともできません。救いが、ただ神様からの一方的な恵みであることを学びます。

〈こども観〉

わたしたち人間が、全く汚れた罪の中にあるということを見つめるとき、イエス様の救いが恵みとして大きくわたしたちの心に感謝の気持ちを抱かせます。しかし、幼い子どもたちに自分で自分を救うことのできない全く悪いものだという罪に気づかせるのは、分級のやりとりの中だけでは難しいでしょう。生活の中で「悪いこと」をしたとき省みて、「ああ、悪いことをしたな、ごめんなさい」と言うことはできます。けれども、「自分はよい子だ」「よりよく生きよう」というエネルギーに支えられて成長しているのが子どもたちなのです。はっきりとした罪の自覚を持つことはまだ難しいことをよく理解しておく必要があるでしょう。けれども、わたしたちに何かよいところがあるから「光の子」として教会に招かれているのではなく、それは、神様の一方的な恵みであるということを知らせたいと思います。

〈展開例〉

みんなは夏にプールに入ったり、水遊びをしたりしましたか。冬でも温水プールに行ったり、スイミングに行って泳いでいる子もいますね。

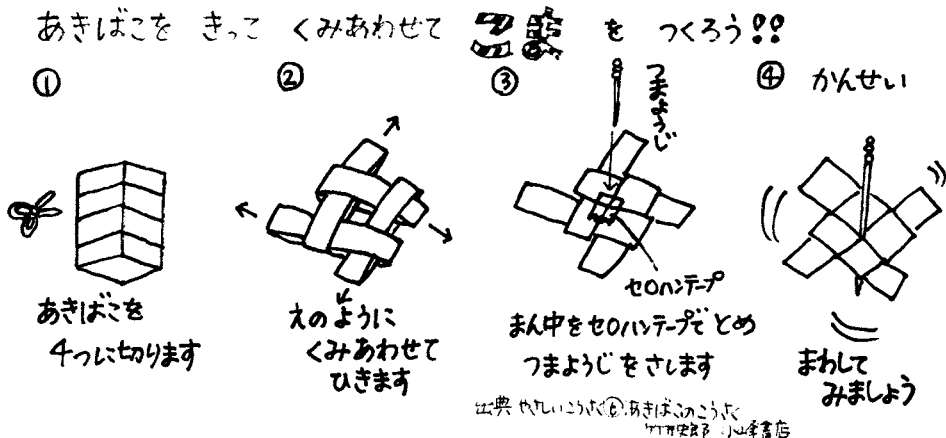
〇〇君が、お父さんお母さんと一緒に海水浴に行きました。楽しく遊んでいるうちに、足のつかない深いところに流されてしまいました。水遊びは好きだけど泳げない〇〇君は、たくさんお水を飲んで、息ができなくて、おぼれてしまいました。「たすけてーっ！ たすけてーっ！」って必死になって叫びました。そのとき、天から大きな浮き輪が投げ込まれました。〇〇君は必死で浮き輪につかまって、砂浜に泳ぎ着くことができました。

これは、たとえ話です。先生もみんなも〇〇君と同じように、海でおぼれても自分で自分を助けることができない、罪という海でおぼれて苦しんでいます。そこから、イエス様という浮き輪をくださって、助け出してくださった方が神様なのです。わたしたちが、賢いから、かわいいから、何かよいことをしたから助けにくださったのではなく、それはただ、神様の「恵み」なのです。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、罪の海でおぼれて自分ではどうしようもないわたしたちに、イエス様を送ってください感謝いたします。アーメン。

〈やってみよう〉



**〈ねらい〉**

ぼくたち私たちはイエス様を信じて、救われました。でもそれは、ぼくたち私たちの内に何か良いところがあったからではなくて、ただ神様の恵みです。一方的な恵みによって救われたことを知る。

**〈展開例〉**

新しい年を迎えました。今年も神様と一緒に歩んでいきましょう！

「イエスは舟に乗って湖を渡り、自分の町に帰って来られた。すると、人々が中風の人を床に寝かせたまま、イエスのところへ連れて来た」(ver1-2)。

今日、登場してくるのは、中風の患者です。中風というのは、手や足が痺れて動かなくなってしまう病気です。その病気でずっと、長い間伏せている人がいました。

ぼくたち私たちは、何か悪いことがあると、ぼくは何か悪いことをしたのかな？ これは、神様からの罰かな？ そう思うてしまうことがあるかもしれません。

それと同じように、この男の人は、長い間、伏せていたので、ぼくは何か悪いことをしたのかな？ これは、神様からの罰かな？と、思っていたかもしれません。この中風の人も自分の心を責めていたかもしれません。

でも、イエス様はそんな人の心を大変よく知っておいでになります。その中風の患者にイエス様は言われました。

「イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、『子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は赦される』と言われた」(ver2b)と、聖書は言っています。

イエス様は、私たち一人ひとりをご覧になられて、「子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は赦される」、このように言ってくださるお方です。ぼくたち私たちがつらい時に、悲しい時に、一緒にいて励ましてくださるお方です。

それだけではありません。私たちは神様の御前に罪人です。「彼らは、このようなことを行う者が死に値するという神の定めを知っていながら、自分でそれを行うだけではなく、他人の同じ行為をも是認しています」(ローマ1:32)と聖書が言っていますように、私たちの罪は神様の御前に死に値するものなのです。でも、イエス様はそんな私たちの罪をただ見逃されるのではなくて、十字架で命を投げ出してくださり、私たちの罪を十字架で一方向的に赦してくださったのです。イエス様は、命をかけて、「子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は赦される」と言ってくださるのです。一方的な恵みによって赦してくださるイエス様と共に、今年も歩んでいきましょう。

**〈お祈り〉**

イエス様が一方的な恵みによって、私たちの罪を赦してくださったことを心から感謝いたします。今年もイエス様を見上げて歩むことができるように導いてください。イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



✠ 聖書をひらいて (マタイによる福音書9章1～8節、参考マルコ2章1～12節)



☆問題：二重枠に入る文字を組み合わせると、どんな言葉になりますか？

	①	③	
⑥			
	⑦		②
⑤			
④			

タテのカギ

- ①『起きて〇〇〇』というのと、どちらがやさしいか？
- ②中風の人にイエスさまは、「〇〇〇を出しなさい」と言った。

ヨコのカギ

- ③中風の人を〇〇に寝かせたままイエスさまの所へ連れてきた。
- ④イエスさまは中風の人を連れてきた人たちの〇〇〇〇を見た。
- ⑤医者が必要とするのは、〇〇〇〇〇
- ⑥イエスさまは、中風の人の罪を〇〇〇〇〇
- ⑦イエスさまは罪をゆるす〇〇〇を持っておられる

(答えは、P.118にあります。)

答

ヒント：イエスさまを見て群衆は、神を・・・した。

✠ 考えてみよう (みんなで話し合っね (^0^)/)

☒「勉強しないと、テストでいい点は取れないし、いっしょうけんめい練習しないと、ピアノも上手になりません。それなのに、イエスさまを信じて神さまの子どもにしていただける、すばらしい救いの恵みは、どうして『ただ』でいただけるのですか？」(A子・10才)



✠ 言ってみよう (〇に、ひらがなを入れてね)

問20  
主イエス・キリストの救いは、どのようにして私たちのものとなるのですか？

私たちが持っている正しさやかしこさ、そのほか、どんな良いものでも、自分の力で救いを手に入れることはできません。救いは、ただ神さまの〇〇〇として与えられるのです。

✠ やってみよう —ワン・ツー・ゲーム— 「イエスさまのところへ、連れてくるゲーム」

- ①新聞紙を広げて(2面分) 4～5枚重ねて、その上に一人が座ります。
- ②他の子(2人)が、スミ(進行方向の2スミ)を引っ張り、床をすべらせて運びます。

✠ 今週の暗唱聖句 (マタイによる福音書9章2節後半)



イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、「子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は〇〇〇〇〇〇」と言われた。

## 〈ねらい〉

## 1. 「恵み」と「報酬」の違いについて。

「恵み」は、「報酬」と異なる。「報酬」は相手の“なにか(正しさ・かしこさ・力・能力・努力・行為……)”に対して支払われるものだが、「恵み」は相手のなにもよらず、ただ一方的な愛情によって与えられる。

神様が私たちに救いを与えてくださったのも、私たちの“なにか”に対してではなく、ただ一方的に私たちを愛してくださったからである。

## 2. 「救い」のどの面が「恵み」なのだろうか。

父なる神が「罪人を救おう」と考えてくださったこと。

子なるキリストが救いの御業(受肉と身代りの死)を成し遂げてくださったこと。

父なる神が、「イエス・キリストを信じた者の罪を赦す」と決めてくださったこと。

聖霊なる神が、私たちの心を新しくつくりかえ、福音を信じるように導いてくださること。

## 〈子どもカテキズム〉

問28：主イエス・キリストの救いは、どのようにして私たちのものとなるのですか。

答：私たちが持っている正しさやかしこさ、そのほか、どんな良いものでも、自分の力で救いを手に入れることは出来ません。救いは、ただ神様の恵みとして与えられるのです。

## 〈展開例〉

## 1. 説教を聞いて教えられたこと・考えたことを分かち合う。

Q. 説教を聞いて新しく教えられたことは？

Q. 分からなかったことは？

## 2. 生徒と一緒に考える。

Q. 「恵み」と「報酬」の違いはなんだろうか？

Q. 人(親や友人)から「恵み」として、何かをもらったことがあるだろうか？

→誕生日プレゼント、クリスマスプレゼント

Q. 「救い」のどこが「恵み」なのだろうか？



テキスト マタイによる福音書 9章9～13節

「マタイ」。マルコによる福音書2章13～17節とルカによる福音書5章27～32節の徴税人レビと同一人物であろう。元々レビという名であったが、主の弟子となった後で、マタイというあだ名で呼ばれるようになったようである。後に十二使徒に加えられ(10:3)、この福音書の著者となった。

当時のユダヤ社会では、徴税人は主として二つの理由で同胞から忌み嫌われていた。ユダヤ人は自分達が神様の選民であると自負していたが、現実にはローマ帝国の支配下に置かれていた。徴税人はその異邦人の手先として、同胞から税金をまきあげる裏切り者と思われていた。そして徴税人自身も税金システムを利用して私腹を肥やしていた。納めるべき一定額を納め、実際にはそれ以上の金額をだまし取っていたのである。こうした二つの理由で、徴税人は憎まれ、盗人や罪人と同類とされた。それで、「収税所に座っている」マタイは、罪の仕事に従事しているように見なされ、誰も彼を直視する人はいなかったであろう。その彼を見つめ、徴税人を弟子とするリスクをあえて負い、マタイを召し出すイエス様の深い恵み。それはマタイが二度と戻れない現在の職業さえ捨てて、生涯に亘ってイエス様に従って行くために立ち上がらせる程であった。

「イエスはその家で食事をしておられたときのことである。徴税人や罪人も大勢やって来て、イエスや弟子たちと同席していた」。食事を共にすることは親密さのしるしであったので、ファリサイ派の目には、イエス様がしていることは徴税人や罪人との仲間となることに映った。「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」。弟子たちへの非難のこもった質問に、

イエス様御自身が答えられた。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である」。イエス様とファリサイ派の違いは、神様の御心の理解であった。ファリサイ派は規則を守ることで、罪を犯さず、きよさを保つことを第一と考えたが、イエス様は人々を第一とした。どちらが正しいのかは、13節で引用されたホセア6:6が明らかにする。神様が預言者を通してお語りになったことは、儀式的要求が愛に取って代わった宗教の墮落に直面しての御言葉であった。それに照らして見る時に、イエス様の罪人との食事の交わりこそ、神様の御心の実現であり、ファリサイ派の徴税人や罪人たちに対する態度は、ホセアの時代の腐敗した宗教の再生であった。

「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」。ファリサイ派は、彼ら自身の目には「正しい人」に映ったが、イエス様は彼らのような義が十分だとはお考えにならなかった(参照、5:20)。イエス様は、御自分が地上に来られた目的は、自己満足している自称義人ではなく、罪人を招くためであることを明らかにされた。

「マタイ」という名の意味は、「主の賜物」。マタイは自分の書いたこの福音書の使徒リストに、自らを「徴税人マタイ」とあえて記している。罪深い自分が救われたのは、主の弟子として生かされているのは、ただ主の恵みの賜物だというマタイの感謝の表現と言える。イエス様は罪人を恵みによってこのように造り変えるために、地上に来られ、今、私達をも招いておられる。生涯、イエス様の愛を感謝し、証しする新しい人生を歩み始めるために。(岡本 告)

カテキズム 子どもカテキズム 問29

子どもカテキズム

問29 神さまの恵みとは何ですか。

答 神さまが、一方的に、愛をもって、私たちを救いのうちに選んでくださったことです。

私たちは、聖霊のお働きによって、自分を罪人と認め、悔い改め、

イエス様を信じることができました。

ですから、私たちは、心をこめて、神さまを賛美します。

問29は、問28の「救いは、ただ神さまの恵みとして与えられるのです」を受けて、(それでは)「神さまの恵みとは何ですか」と尋ねている。つまり、神の恵みと言われても、それが何のことかよく分からないので、もっと詳しく教えて欲しい、というわけである。

しかし、ここで改めて問い、また考えてみたいことは、新約聖書で使われている「恵み」と、現代の子どもたちが使うときの「恵み」は、たぶん随分と意味合いが違うだろうということである。普通よく聞く「恵み」と言えば、「大地の恵み」とか「太陽の恵み」とか、そういった私たち人間の命を根底で支えてくれているもの、といったイメージではないだろうか。それがなければ生きていけないもの、と表現してもよかろう。いずれにしても、聖書が言うところの「恵み」とは、ニュアンスが異なる。聖書が言うところの「恵み」とは、本来それを受けるに全く値しないものが、ただひたすら憐れみによって、その恩恵にあずかることができる、ということである。誤解を恐れずに言えば、「ラッキーなこと」である。

「ラッキーなこと」に遭遇した時の嬉しさや喜びを、子どもたちはよく知っている(滅多に出会えるものではないが)。言葉にはうまく表現できなくても、感覚的に実感しているのだ。何かの賞をもらったり、選抜メンバーの一人になれたり。それは本当に心地よいものだ。だが、それは、一

度挫折を味わった者こそが、心から楽しむことの許されている心境である。自分なりに一生懸命頑張ったのに、大人たちが励ましてくれるようには、努力が報われるとは限らないのだ、と知った子どもたちにとって、人生は空しいものと映しても不思議ではない。良い報いにあずかれるのは、選ばれた人たちだけ、その他大勢の人間には、あずかることが許されないもの、それを子どもたちが知るといえることは、生きることの大きな土台を失うことである。そのやるせない思いを、周りの大人たちや友達は、十分受け止めきれないでいる。いや、感じ取ることさえもできないし、共感することに恐れを感じている。なぜなら、それはあまりにも巨大な闇の力だから。

しかし、そういうところで、神さまが自分のことを無制限に愛し、信じられないぐらいに大切な宝物だと言ってくださっていると知ることができるなら、どんなにか素晴らしいことだろう。そうならば、子どもたちには自然と笑みがこぼれる。勝手に喜びを表現し始める。だから、子どもたちをイエス様の元に連れて行くのだ。その邪魔をしいけない。邪魔をするのは、イエス様の恵みを味わっていない人たちなのだ。教会が、そういった子どもたちのやるせなさも、愛されている喜びも、自由に表現できる場であってほしいと思う。子どもたちの無邪気な讚美が、教会中に満ち溢れるようにと願ってやまない。(梶浦和城)

テキスト            マタイによる福音書 9章9～13節  
カテキズム        子どもカテキズム 問29

### 〔単元のねらい〕

主題は「選びと有効召命」ということである。神の自由な選びによって、価なき者が救われる、この驚くべき恵みを伝えたい。マタイの召命という記事が与えられたことも幸いである。選ばれ救われた者が、その恵みによっていかに変えられるか、信仰者が「立つ」ことをはじめる姿が明瞭であるのは望ましい。神の救いは、選び出して終わりではなく、そこから始まる新しい命の充実に至るまで、そして終わりの栄光へと向かっていく全過程が含まれていることを想起する。私たちは、限りある生涯を、キリストの弟子として命燃やして歩むために選ばれる。この価なき者が、そのような幸いな人生へと選び取られる。この喜びを伝えたい。

## 「われをもすくいし……」

讚美歌第二編167番に「われをもすくいし」という歌があります。「われをもすくいし くしきめぐみ まよいしみもいま たちかえりぬ」。自分のような何の値打ちもない者を、神様が選んで救ってくださった。このすばらしい恵み！この恵みを受けたから、道を外れて迷子になっていた私も、今、神様のもとに帰ることができた。そういう喜びを歌っています。そしてこの讚美歌は、ジョン・ニュートンという人が作った有名なアメイジング・グレースという歌を日本語に訳したものです。

ジョン・ニュートンという人は18世紀のイギリス人で、奴隷船の船長をしていた人です。元々信仰深いお母さんに育てられたのですが、そのお母さんが7歳の時に亡くなります。それ以降、お父さんの影響で船乗りになるのですが、それからは英国海軍に入隊したり、そこから脱走したり、奴隷商人の召使いになったりと転々として、やがて奴隷船の船長になって、アフリカとアメリカを往復して黒人たちを運搬する仕事をするわけです。そんなあるときに、彼は航海中に大きな嵐にあいます。それは今まで経験したことのない嵐で、誰もが死を覚悟したそうです。そんな中で、彼は初めて「神様助けてください」と心から祈った、すると本当に奇跡的に嵐はやんで船は助かりまし

た。その時から、彼の心の中で何かが変わったのです。それは1748年5月10日、彼が22歳の時でした。

そして彼はお母さんが残してくれた聖書を読み始めて、神さまによって少しずつ変えられていきます。それまで奴隷船の黒人たちは家畜以下の扱いを受けていたそうですが、彼の船においてだけは人間としての尊厳が守られるように扱われるようになったということも記録されています。そして彼はやがて船を降り、勉強をしておして牧師となります。それから亡くなるまでに280以上の讚美歌を作ったと言われていますが、自分に与えられた神さまの恵みにいつまでも感謝しながら生涯を生き抜いたと言われていました。その彼の最も代表的な讚美歌がアメイジング・グレース……「驚くべき恵み」という歌なのです。奴隷貿易などという罪深いことをしていた自分のような惨めな者にまで、神さまが恵みを注いでくださった、そして命を与え、新しい人生へと送り出してくださいました、その路を開いてくださった、そのことへの言葉に尽くせぬ程の感謝を唄った讚美歌です。

こういう賛美の歌が2000年のキリスト教会の歴史の中で、たくさん生まれてきました。今日いっしょに読んだ聖書の中に出てきたマタイという人



も、きっと同じように神様を賛美したことでしょう。

マタイ、この人はやがてすばらしい弟子になって、「マタイによる福音書」を書くことになりましたが、イエス様に出会うまでは決して立派な人ではない。曇った目で世の中をにらんでいたかもしれない。徴税人だったとあります。ローマにおさめるための税金をユダヤの人たちから取り立てて、しかも多めに取り立ててすっかり自分のものにしてしまういやな奴。ザアカイと同じですね。そんな徴税人の彼らのことを、ユダヤの人たちは毛嫌いし、あんな罪深い奴らとは付き合ってはいけない、いっしょにご飯を食べるなんてゾッとすらって考えていました。そうやって嫌われれば嫌われるほどにマタイの心は荒んでいったことでしょう。どうせおいらはすれっからし、みんなの嫌われ者だ。その目はますます鈍く光って、ドスの利いた声で取り立ての手を厳しくしていったことでしょう。

でもそんなマタイの人生に光が差しました。「わたしに従いなさい」と声が聞こえました。まさか、そんなはずは……と思ったかもしれませんが。その声の主は、自分には似つかわしくない美しい目をしていました。貧しい者たちの病を癒し、苦しむ者を救うメシアだと、風の噂に聞いていました。でもマタイは、自分には関係のない話だと思っていたのです。そんなメシアがこの町に来たら、自分のような者は嫌われるに違いない。お前のような悪人は地獄に落ちろと言われるかもしれない。恐れと、あきらめと、さみしさと……色んな思いがあったでしょう。そして結局「あの方には近づかないでおこう」と思っていたかもしれない。でも驚くべきことが起こりました。そんなマタイの

ほうに、その方のほうから近づいてこられたのです。そしてあろうことか「わたしに従いなさい」と招いてくださいました。それはたしかに、その方、イエス・キリストの声でした。マタイは少しも迷いませんでした。イエス様が、こんな自分を選んでくれた、そのことがたまらなくうれしくて、すぐに立ち上がってイエス様に従う弟子になることを決断しました。人生を新しくやり直すことにしたのです。

ファリサイ派の人たちは、そんなイエス様を白い目で見ます。あいつは汚らしい者たちと食事をしている、何を考えているんだと陰口をたたきます。でもイエス様は言われました「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。」「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

マタイのような自分の惨めさ、罪深さに絶望している人、あきらめている人に、「神様はそのあなたを愛している。人生をやり直すことができるよ」と伝えるために来てくださったのがイエス様です。そういう人たちだからこそ、イエス様の示してくださった恵みを素直に受け取ることができるのかもしれませんが。

あなたは自分のことをどちらの人間だと思えますか。実は先生は、自分のことをマタイよりは立派な人間じゃないかと思っているところがあります。でも違うのですね。私も神様の前で、マタイと同じすれっからしの嫌われ者です。あなたはどうか？自分の本当の姿に気付いたならば、「わたしに従いなさい」という声のかぎりない優しさとおたたかさに、胸を震わせずにはおれないはずです。 (坂井孝宏)

---

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 9章13節後半

わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。

---

## 〈ねらい〉

神様の選ぴによって、罪深いわたしたちは救いに入られます。一方的にこれから先もずっととらえ続けてくださる神様の愛にこどもたちが気づくことができますように。

## 〈こども観〉

こどもたちが「愛」や「やすらぎ」を感じるのはどんなときでしょうか。満ち足りた気持ちを感じるのはどんなときでしょうか。お父さん、お母さん、あるいはおいしいちゃん、おばあちゃん、先生など、周囲の大人たちに大切にされ、理解され、いつも安心して生活しているこどもは、日常的に「愛」を体全体で感じ取り受け止めています。こどもは「愛」に敏感です。人間の愛は完全ではありませんが、その中途半端にしか愛することのできない人間＝教会学校教師を用いて、神様はこどもたちに福音を伝えようとしてされています。お父さん、お母さんよりも、もっとこどもたちを理解し、愛してくださる神様の存在を喜びをもって伝えましょう。こどもは本物の愛がわかるのです。

## 〈展開例〉

神様の愛を伝えるために、ふさわしい絵本を用いてみましょう。

## ①絵本「たいせつなきみ」

幼いこどもには、言葉が難しく、文字数が多すぎますから、言葉を簡便にし、文章を簡潔にまとめて読み聞かせてみましょう。「わたしがおまえのことをどれだけ好きかわすれないようにね」という神様（エリ）の言葉がこどもたちにとどきますように。「大好き」と言われるととってもうれしい。

## ②紙芝居「ザアカイ」

イエス様の愛にふれたとたん喜びにあふれ、一瞬にして変えられたザアカイさんから、イエス様に愛されることのすばらしさに気づかせます。

## ③教師自身が神様の愛にふれて喜びにみたまされたできごと、経験をわかりやすく語ってみましょう。

## 〈準備するもの〉

絵本 「たいせつなきみ」、マックス・ルケード、  
フォレストブックス

紙芝居 「ザアカイ」

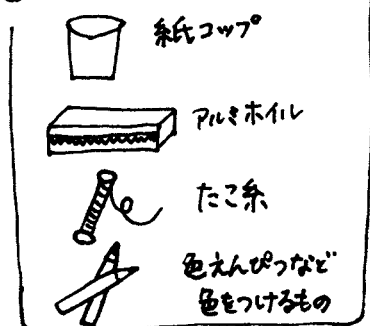
## 〈お祈り〉

天にいらっしゃいます父なる神様、こんなわたしたちを神様は大好きだと言って選ぴ、救いに入れてくださって本当にうれしいです。感謝いたします。アーメン。

## 〈やってみよう〉

## けんだまをつくらよう

## ① よういするもの



## ① 紙のコップに好きな絵を描く

## ② まるめたアルミホイルにたこ糸をくっつけ 紙のコップにも固定する



## ③ かんせい!!

## 〈ねらい〉

ぼくたち私たちは、イエス様を信じて救われました。イエス様を信じる人は、どんな人でも救われます。それは、イエス様がぼくたち私たちを永遠の初めから選んでくださり、救いの中に守ってくださるからなのです。どんな人でもイエス様を信じるときに、救われるのです。

## 〈展開例〉

新しい年を迎えました。今年も神様と一緒に歩いていきましょう！

今日、登場するのは、まず、マタイさんです。マタイさんは、イエス様に出会う前は徴税人でした。徴税人とは、同胞の、自分の友だちであるユダヤ人から税金を取って、当時ユダヤを支配していたローマ帝国に納めていた売国奴、国を売るような、仲間を売るような、悪い奴でした。しかも、決められたより多くの税金を取って、ローマ帝国には納める分だけを納めて、その差額を自分のものにしていました。そのため、彼には友だちがおらず、一緒にご飯を食べてくれる人もおらず、大変寂しい思いをしていました。

しかし、イエス様はそんな彼に言いました。

「イエスはそこをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、『わたしに従いなさい』と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った」(マタイ9:9)。

イエス様は、そんな彼を受け入れてくださいました。それだけではなく、この後のこと、何とご自分の十二弟子の一人に加えてくださったのです。マタイはビックリしました。イエス様は自分の過去ではなくて、これからに目を留めてくだ

さって、自分を招いてくださったのです。

イエス様は私たち一人ひとりをご覧になって、私たちの過去、昔どんな悪いことしてしまったか、どんな生き方をしていたか、そんなことに関係なく、そのまま受け入れてくださり、私たちの将来に目を留めてくださるお方なのです。私たちのこれからに目を留めてくださるのです。

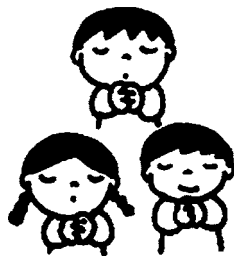
次に出て来るのは罪人です。罪人というのは、悪いことをした人というのではなくて、神様の律法を守ることでできない人のことを言います。ですから、ファリサイ派の人々や律法学者は、彼らのことが嫌いでした。しかし、イエス様は、「イエスがその家で食事をしておられたときのことである。徴税人や罪人も大勢やって来て、イエスや弟子たちと同席していた」(ver10)と、罪人を喜んで受け入れてくださるお方です。

ファリサイ派の人々や律法学者は、罪人や徴税人と食事をするイエス様を裁きます(ver11)。しかし、イエス様は言われました。「イエスはこれを聞いて言われた。『医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である』」(ver12)。

イエス様は罪人を喜んで受け入れてくださるお方です。ぼくたち私たちが自分の罪をイエス様に告白するならば、イエス様は喜んで、その罪を赦してくださいます。皆さんは、自分のことをファリサイ派の人々や律法学者の立場に置いていませんか。徴税人や罪人のように、喜んでイエス様に従う者となりましょう。

## 〈お祈り〉

イエス様に喜んで従うことができますように。イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



✦ **聖書をひらいて** (マタイの福音書9章9～13節、参考マルコ2章13節)

☆問題：二重枠に入る文字を組み合わせると、どんな言葉になりますか？

	④	④		⑤
③				
②				

答

ヒント：マタイのもとの名

**ヨコのカギ**

- ① 取税所に座っていた人の名前
- ② イエスさまに声をかけられて、彼は立ち上がって何をした？
- ③ 「わたしが来たのは、〇〇〇〇をまねくためである」

**タテのカギ**

- ④ 神さまの愛のこと
- ⑤ ささげ物のこと



(答えは、P.118にあります。)



✦ **考えてみよう** (みんなで話し合ってね！(^-)-☆)

☒ マタイさんが自分のことを、「マタイの福音書」に書いていて、ビックリしました。  
マタイさんは、ザアカイと同じ取税人でした。イエスさまは、ふせい不正をはたらいて、人々からきらわれていたような人が好きだったのですか？(S君・11才)

✦ **言ってみよう**

問29

神さまの恵みとはなんですか。

神さまが、一方的に、〇〇をもって、私たちが救いのうちに選んでくださったことです。私たちは、聖霊のお働きによって、自分を罪人と認め、悔い改め、イエスさまを信じることができました。ですからわたしたちは心をこめて、神さまを賛美します(♪)

✦ **やってみよう** (調べてみよう！)

- ・ イエスさまの12弟子の名前をあげて、もとの職業や、イエスさまにつけていただいた名前の意味を聖書や、聖書辞典から探してみよう。(マタイ：もと取税人・「レビ」主の賜物)
- ★ イエスさまは、身分・職業に関係なく、救いのうちに選んでくださり、新しく生まれ変わらせてくださいます。

✦ **今週の暗唱聖句** (マタイによる福音書9章13節後半)

わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、〇〇  
〇〇を招くためである。

〈ねらい〉

### 1. 救いの根拠（土台）について。

「天地創造の前に、神は、わたしたちを愛して、……キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです」（エフェソ1:4～5）。

私たちの救いの根拠（土台）は、神様の御心にある。たまたま親がクリスチャンだったから、たまたま教会に通ってみたから、たまたま聖書を読んでみたから、そのような私たちの“なにか”に救いの根拠があるのではない。私たちには知り尽くすことができないが、神様の方で、「お前をわたしの子にする！」と決めてくださっていたことに、救いの根拠がある。

### 2. イエス・キリストは「わたしに従いなさい」と招かれる。

イエス・キリストは、マタイのもとに訪れ、「わたしに従いなさい」と言って、マタイを確実に（有効的に）永遠の命の中に召しだされた（召命）。

同じように、イエス・キリストは私たち一人一人を確実に救いに入れるために、聖書の御言葉と

聖霊の導きによって、「わたしに従いなさい」と力強く語ってくださる。

### 〈子どもカテキズム〉

問29：神様の恵みとは何ですか。

答：神様が、一方的に、愛をもって、私たちを救いのうちに選んでくださったことです。私たちは、聖霊のお働きによって、自分を罪人と認め、悔い改め、イエス様を信じることができました。ですから、私たちは、心をこめて、神様を賛美します。

### 〈展開例〉

#### 1. 説教を聞いて教えられたこと・考えたことを分かち合う。

Q. 説教を聞いて新しく教えられたことは？

Q. 分からなかったことは？

#### 2. 生徒と一緒に考える。

Q. もし救いの根拠が自分の中の“なにか”にあったなら、どうなるだろうか？

→いつか救いから離れてしまう



イエス様が、御自分と弟子たちの結びつきをたとえて教えている箇所である。

旧約聖書でぶどうの木は、神様の選民イスラエルの象徴であったが（詩80:9）、出エジプトの解放によって約束の地に植えられた最愛の良いぶどうの木は、神様の期待に背いた悪いぶどうに変わり果てた（エレミヤ2:21）。イエス様が御自分を「まことのぶどうの木」と表現された時、イスラエルが歴史の中で完成しなかった事実と、御自分においてこそ新しい神様の民が形成、完成することを教えている。

イエス様が「木」であり、弟子達が「枝」であるという関係は、両者の生命的結合と交流を表現している。弟子達はイエス様との親しい契約的交わりに入れられたのである。かつては神様に背を向けて生きていた者達が、「農夫である」主権者なる神様の御手によって、命の源であるイエス様と結び合わせていただき、イエス様がお与えくださった永遠の命に生かされるものとされている。

父なる神様はイエス様に結び合わされた弟子達の剪定作業をなさる。弟子達が「いよいよ豊かに実を結ぶように」なるためには、神様による「手入れ」が必要だからである。そうでなければ、弟子に進歩はなく、かえって退歩してしまう。農夫である神様が用いる手段は、3節「わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている」から分かるように、イエス様の御言葉である。これを弟子達は既に経験していた。イエス様の御言葉によって、イエス様にこそ寄り頼む者へと変えられてきていたのである。弟子達は御言葉に教えられ、自己充足の傲慢から解放され、ますますイエス様に寄り頼む者へと変えられてゆくのである。

4節「わたしにつながっていないさい。わたしもあなたがたにつながっている」。イエス様は弟子達が御自分を信頼し続けることを命じておられる。そして信仰によって御自分につながっている者達とつながってくださると保証される。こ

れは枝である弟子達には、イエス様なしに、自分だけでは生きられず、自力で実を結ぶことが不可能だからである。5節「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」。イエス様の生命が弟子達に流れ、それによって生かされていけばこそ、「その人は豊かに実を結ぶ」のであり、「わたしを離れては、あなたがたは何もできない」。

6節「わたしにつながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう」。悲しいことだが、不信仰によってイエス様から離れてしまう者達が現実にはいた（参照、ヨハネ6:66、ヨハネ2:19）。

7節の「望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる」は祈りの勧めである。弟子達が祈るならば、その願いはかなえられるとイエス様は約束された。しかしこれは、気まぐれや、欲望のままに願った祈りが全てかなえられるという保証では決してない。7節の前半部分に、「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にいつもあるならば」と書かれており、イエス様の御言葉＝御心をわきまえての祈りだという意味は明らかである。父なる神様の栄光を目指して、御心をこの世で行なって生きるために、必要な霊的な能力、賜物を授けてくださるようという意味であろう。

「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた」。イエス様は御自分の弟子達への愛を表され、続けて命じられた。「わたしの愛にとどまりなさい」。それは現実には、イエス様が与えた愛の掟を弟子達が守ることによってなされてゆく。「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」（ヨハネ13:34）。「目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません」（ヨハネ4:20）。

（岡本 告）

## 子どもカテキズム

問30 神さまの恵みは、どのようにして私たちに与えられるのですか。

答 聖霊なる神さまが私たちに信仰を与え、

私たちを主イエス・キリストと一つに結び合わせてくださることによってです。

「五 聖霊なる神さま」という大きな枠組みの中でも、「聖霊なる神さまが」と、聖霊なる神さまを主語にして語る問答は、この問30だけである。それだけに、この單元においては、極めて重要な箇所であると言える。

子どもたちにとって、聖霊なる神さまとはどんなお方だろうか。大人でも聞かれたら、答に窮するであろう。父なる神さまのことは何となく分かるし、イエス様のことはイメージしやすいが、聖霊なる神さまのこととなると捉えどころがなくなってしまう。おそらく、それが本音ではないかと思う。あまりにも漠然とし過ぎていて、想像することすら難しい。聖書が、風とか炎とかで分かりやすく語ってくれていてもだ。それもそのはず。聖霊なる神さまは、まさにそういうお方だからだ。だから、その直感的な感覚は、あながち間違っていないと言える。五感では捕らえきれない仕方で、また理屈や常識では推し量れないところで働かれるお方だからだ。その意味で言えば、大人たちが置き忘れてきてしまった、目に見えないものへの鋭い感覚を持っている子どもたちの方が、聖霊なる神さまを親しく感じるができるのかもしれない。子どもたちの方が、聖霊なる神さまの働かれる霊的世界に敏感だとも言える。その真実な霊的現実に関心が開かれる時、いわゆる大人たちも、自分たちの常識が如何に誤りであったかに気付くことができるのだろう。私たちは人間を知っており、人生をわきまえていて、世の中のこと

とは分かっていると思っていた人たちが、それは違っていたということに悟り始める。即ち、罪と死とあきらめが支配するのが、世の現実なのではなくて、聖霊なる神さまが罪人たちに信仰を与え、イエス様に次々と結び合わせて行かれることこそが、本当の世の現実だということ、である。そこには、希望がある。勝利がある。夢が現実となっている。子どもたちは知っているはずだ、神さまに不可能なことはないということ。大人たちこそが、子どもたちにそれを教えてあげなければ。いや、既に知っていることを、改めて確信させてあげなければ。目に見えないけれども、柔らかで真直ぐな心には見える、その聖霊なる神さまの御手が働くならば、人は変わることができるのだ。言葉の真実な意味で、新しく生まれることができるのである。

聖霊なる神さまは、御言葉の中で言われていたことが、本当にそうなるんだと教えてくれるお方である。だから、子どもたちにこう伝えたい。子供たちよ、一緒に祈ろうと。聖霊なる神さまが、あの人の人に信仰を与えてくれるように。友達がイエス様と出会えるように。何よりも君たち自身が、イエス様にしっかり結び付くことができるように。その時、君たちもまた、神さまの恵みというものが、どんなにかもの凄いなものであるかにきっとびっくり仰天するに違いない。それが、神の子どもたちであるクリスチャンに授けられた、神の恵みの力なのだ。 (梶浦和城)

テキスト ヨハネによる福音書 15章1～10節  
カテキズム 子どもカテキズム 問30

### 〔単元のねらい〕

イエス・キリストが、どのようにして私たちのまことの救いとなってくださるか。キリストによる救いの道が、どれほど堅固で信頼に値するか。何よりも、キリストの救いの中に安らうことが、私たちにとってどれほどの幸いであるか。この幸いは、キリストとの結合という事実で頂点に達する。キリストとの結合は、聖霊の働きによる恵みの出来事である。神がキリストにおいて、私たちを選び、召し出してくださったかぎりにおいて実現する一方的な恵みである。この恵みが、すでに私たちの中で開始されていることを、宣言的に告げることが、ここでの礼拝説教の第一の眼目である（「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」8節）。他方、ヨハネ福音書15章では、この神秘的な結合は、「わたしにつながっていないさい」「わたしの愛にとどまりなさい」など、恵みへの積極的な参与へと招き、「豊かに実を結ぶ」使命論へと拡大されている。受けた恵みが実を結ぶ。その喜びへと、教師も生徒も共に招かれていることを感謝したい。

## 「命はつながり、命はみのる」

(1) イエスさまの誕生、そこに示された神さまの特別な愛を、もういちど信じて、クリスマスをお過ごししました。クリスマスは、何度迎えても、迎えるたびに喜びが新しくなりますね。不思議なことです。クリスマスを迎えるたびに、喜びが新しく深くなる。それはなぜだと思いますか？ それは、イエス様がいつも私たちの内に生きておられるからです。イエス様は、世界の教会、世界のクリスチャンの中で今も生きておられます。ですから、クリスマスの喜びは、回を重ねるごとに新しくなるのです。

(2) イエス様が、今も私たちと共に、私たちの内に、生きておられる。今朝の聖書では、その素晴らしい恵みが「イエスはまことのぶどうの木」と言い表されています。神様の畑に、太い、大きな枝を張るぶどうの木が、その枝を広げている。その様子を、想像してみてください。このぶどうの木は、世界のどの国、どの地域でも、そこに人が生きているかぎり、どこまでも、どこまでも枝を広げています。

イエス様というぶどうの木。そのぶどうの木から、数え切れないほどの枝が伸びているのです。

その様子も、想像できますか。今は、冬の季節ですから、ぶどう畑のぶどうは、枝が切り落とされて春を待っています。冬の間は、ぶどうの木も、そこから少しだけ伸びた枝も、命を失って枯れているように見えます。でも春になると、ぶどうの木は地中の水分や養分をどんどん吸い上げて、ぐんぐん枝を伸ばします。ぶどうの木がたくわえた命が、ぶどうの枝に送られて、みるみるうちに、青々とした明るい緑の葉が、ぶどう畑いっぱいになります。命のちから、命のめぐみ、命の喜びが、畑いっぱいになります。

(3) イエス様は、ぶどうの木です。私たちは、イエス様につながっているぶどうの枝です。ぶどうの枝は、長く長く伸びて畑をおおうほど伸びてゆきます。その枝は、どこから養分が伝わっているか、見分けがつかないほど、細く、長く伸びて、時には他の枝と絡まりあって見えることもあるでしょう。それでも、枝が木につながっているかぎり、ぶどうの木の命は、一つひとつの細い枝に送り込まれ、やがて枝の先に薄緑のぶどうの実がつくようになるのです。

「つながる」ということは、素晴らしいことで



すね！ 私たちは、ふだんの生活のなかでも、いろいろな「つながり」をもっています。家族とのつながり、保育園や学校でのつながりがあります。近頃では、携帯電話で友だちとのつながりを大切にする人たちもいるでしょう。

人と人のつながり。それはとても大切なことです。家族の人たちと、心の通うつながりをもつ。そうしたら、家庭での生活は楽しく、生き生きとしてくるでしょう。学校で、友だちと仲良くつながることができれば、学校の生活は楽しく、実りのあるものになるでしょう。良いつながりは、きっと良い実りを生むのです。友達のことを、よく考えてあげる。友だちの苦しみを理解してあげる。それが「実」を結ぶことです。

でも、家族や学校でのつながりは、ときどきとてもつらく苦しいつながりになってしまうこともあるでしょう。つながることは、喜びでもあるし、ときには苦しみにもなります。携帯電話などで、見知らぬ人と「つながる」ようなことから、おそろしい犯罪に巻き込まれる事件が、毎日のように起きています。友だちとの「つながり」が、ある日突然、考えもしなかったような「すれちがい」になってしまうこともありますね。友だちと心が通わない、家族で心が通わない。学校や、家での日々が、とてもつらく、さびしいということ、皆さんもきっと味わったことがあるでしょう。

(4) 私たちが、心から安心して「つながる」ことができるのは、まずイエスさまとのつながりです。イエスさまは、私たちのような、小さなぶどうの枝を、天の神様の愛につなぐために、私たちのところに来てくださいました。クリスマスに、はっきり学んだように、ベツレヘムの暗くさびしい家畜小屋で、イエス様は、私たちのために生まれてくださいました。イエス様を信じる人が、だれも滅びることがないように。信じる人が、みな永遠の命を受けることができるように。祈りと愛をこめて、イエス様は生きてくださった。私たち

を天の神様の子どもにするために、十字架の苦しみも引き受けてくださったのです。そして、イエス様は、死に打ち勝って、永遠の命のはじめとなってくださいました。

このイエス様に、つながりましょう。イエス様が、もう私たちとつながっておられます。イエス様が、私たちの手を離されることは決してありません。イエス様が私たちに伸ばされた手に感謝しましょう。イエス様の暖かい手を、ふりほどくようなことを、私たちが決してしませんように！

イエス様という木につながってきたいのです。イエス様がくださる命によって、私たちも生きてゆきたいのです。イエス様の命、イエス様の愛。そこにつながっていれば、私たちは「実をむすぶ」ぶどうの枝です。イエス様の愛を、だれかに伝えてあげる人になります。イエス様の命に、家族やお友だちを、招いてあげる人にもなれるでしょう。イエス様という木につながっていれば、もうそれだけで、神様の栄光をあらわす(9節)ことができます。

(5) イエス様という枝。そこにつながる大切な一つの道を教えましょう。それは、イエス様の言葉の中に、いつもいることです(7節)。イエス様の言葉に、命があります。イエス様の言葉が、実を結びます。イエス様の言葉は、神様への愛と、人への愛を与えてくれます。イエス様の言葉を持つ人は、神様の愛を伝える人になれるのです。

イエス様の言葉の中にいる。そのためになにをしますか？ 決して難しいことではありません。イエス様の言葉が聞こえるところに集うことです。自分で聖書を読むこと。それ以上に、日曜学校に、教会に、集まっていることです。同じぶどうの枝である私たちが、励まし合って、イエス様の言葉を学び、イエス様の言葉で支え、祈り合う。それが、元気なぶどうの枝として生きる生活です。

(小野静雄)

---

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 15章5節前半

わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。

---

## 〈ねらい〉

神様は「わたしの愛にとどまりなさい」とわたしたちを招き、「わたしにつながっていなさい」とイエス様につながる者としてくださっていることを、ぶどうの木のたとえを用いて伝えます。

## 〈こども観〉

クリスチャンであること、イエス様を信じることはこどもたちにとっても、ときに孤独なことです。だって、幼稚園でも保育園でも、イエス様を知っているおともだちなんかいない。日曜日は教会に行かないでもっと楽しいところに行っているみたい。先生だって、給食の前に神様にお祈りしましょうって言わない。だから、教会でしていることは、教会の中だけのこと……。日本の「教会の子」は、少なからずこんな思いを抱いているのではないのでしょうか。

さて、今回の単元「キリストとの結合」ではわたしたちは、イエス様と堅くつながっているということを伝えます。イエス様を信じることは、どんな異教の地にあっても決して孤独なことではありません。イエス様はいつでもこどもたちにとって、最高のおともだちです。イエス様はまことのぶどうの木で、わたしたちはその枝としてしっかりと結ばれています。「イエス様につながっている幸い」がこどもたちにとどきますように。

## 〈展開例〉

「ぶどうの木」のたとえ話は、視覚的な教材を使用するとわかりやすい。フランネルグラフは絵柄をくっつけたり、とりはずしたりできますから、この題材でぜひ用いてみましょう。

みなさん、おはよう。

(何も実っていない木をボードにはります)

こどもさんびか73番「しゅイエスはまことのぶどうのき」を教師が歌って聞かせます。

さて、この木は、何の木だと思いますか。先生が歌った讃美歌、ちゃんと聞いていましたか？

そうです、ぶどうの木です。このぶどうの木、実はイエス様を表しているんです。木には枝がついていますね。寒い冬が過ぎて、温かくなって春が来て、暑い暑い夏が来て、実りの秋がやってきました。そうすると、地面からぐんぐん栄養をとって、恵みの雨をたくさん飲んで、太陽の光をいっぱいあびたぶどうの木には、その枝にぶどうの実をいっぱい実らせます。

(ぶどうの実を枝にはりつけます)

この枝はわたしたちです。わたしたちは、イエス様につながって、こんなふうにたくさん恵みをいただいて、どんどん実をつけることができます。イエス様につながりましょう。それは、イエス様の言葉が聞ける教会に来ることです。

## 〈準備するもの〉

フランネルグラフのボード

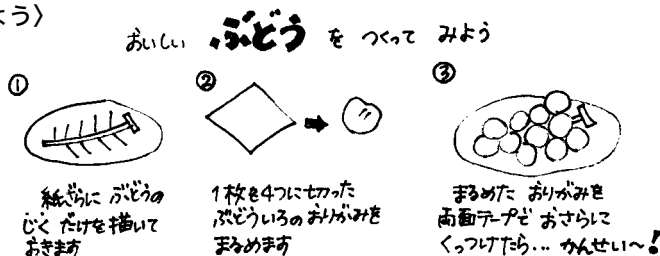
はりつける絵

ぶどうの木、枝、ぶどう、農夫、太陽、雨等

## 〈お祈り〉

天の父なる神さま、父なる神様は畑の農夫で、イエス様はぶどうの木、わたしたちはその枝、聖霊がわたしたちをイエスさまと結びつけてくださっています。イエス様につながって、いつも「元気なぶどうの枝」でいられますように。アーメン。

## 〈やってみよう〉



**〈ねらい〉**

ぼくたち私たちは、イエス様を信じて救われました。一度、イエス様を信じた人は、どんなことがあっても、救いから漏れることはありません。それは、イエス様がぼくたち、私たちを永遠の初めから選んでくださり、救いの中に守ってくださるからなのです。信じた者は二度と滅びることがない、イエス様の愛を知っていきましょう。

**〈展開例〉**

よく映画で、次のようなシーンを見かけませんか？ 崖から友だちが落ちこちようとしているのです。それを、友だちも木にぶら下がりがりながら、下に落ちこちないように片手で支えているのです。手がぶるぶる震えて、もう駄目だ！！ 絶体絶命の危機の中で、「ぼくの手は絶対に離さないからな！！ お前も絶対に離してはならんぞ！！」 一生懸命に手を握っているのです。そして、何とか上に引っ張り上げて、ことなきを得るのです。こんなシーンを見ると本当に、ドキドキしますね！！

今日のお話は、イエス様が語られたブドウ園の譬えです。イエス様は言われました。「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である」(ヨハネ15:1)。

イエス様はブドウの木です。太くて、大きなシッカリとしたブドウの木なのです。イエス様は、私たち一人一人をしっかりと受け止めてくださいます。そして、私たちはそれに連なっている枝なのです。

イエス様は言われました。「わたしにつながっていないさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていないければ、

自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていないければ、実を結ぶことができない」(ver4)。

私たちはイエス様に連なっている時に、良い実を結ぶことができます。しかし、どんなに自分の力で頑張ってみても、良い実を結ぶことはできないのです。ですから、大切なことは、イエス様にしっかりとつながることです。

では、イエス様に連なる、イエス様につながるとはどういうことを言うのでしょうか。それは、イエス様を信じることです。イエス様を信じるというのは、イエス様と心のつながりをもつということなのです。お友だちと心のつながりをもてば、安心できます。お父さん、お母さんと心のつながりを持てば、安心することができます。学校の先生と心のつながりを持てば、安心して勉強に励めます。それと同じように、イエス様を信じれば、ぼくたち、私たちはイエス様の救いの中に心安らぐことができるのです。

それだけではありません。イエス様の救いの手は、先ほどの崖のお友だちの手以上に、ぼくたち私たちの内に何があったとしても、決して離れてしまうようなことはありません。大切なことは、自分の力に頼ることなく、イエス様の内に安らぐことなのです。イエス様の御手はあなたを決して離すことがないので、イエス様の内に安らぐ者となりましょう。

**〈お祈り〉**

イエス様に喜んで従い、イエス様の内に安らぐことが出来るように導いてください。イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



✠ 聖書をひらいて (ヨハネによる福音書15章5～10節)

☆問題：二重枠に入る文字を組み合わせると、どんな言葉になりますか？



①				③
⑥	②		⑦	
④				

ヨコのカギ

- ① 果実がなること (15:2) ○○○○
- ② 「わたしは○○○のぶどうの木、わたしの父は農夫である」
- ③ 農夫が、果樹の世話をすること
- ④ イエスさまに、○○○○ことが大切です。

タテのカギ

- ⑤ 棚を作り、枝を広げます。秋にはおいしい実がなります。
- ⑥ イエスさまも、父なる神さまの○○○を守りました。
- ⑦ イエスさまの愛に○○○○ことは、神さまのおきてを守るこ  
と。

答

ヒント：ほうとう放蕩○○○

✠ 考えてみよう (みんなで話し合ってね！(´-)-☆)

☒ 「イエスさまにつながる」って、どういうことですか？イエスさまが、わたしと手をつないでいてくださるのですか?? (A美ちゃん・10才)



✠ 言ってみよう

問30  
神さまの恵みは、どのようにして私たちに与えられるのですか？

聖霊なる神さまが私たちに信仰を与え、私たちに主イエス・キリストと一つに○○○合わせてくださることによってです。



✠ やってみよう —♪ワン・ツ—ミュージック♪—

**初級** 「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫です」(15:1) **上級** 「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ」(15:5) など、今日の聖書のみことばに①メロディーと、リズムをつける②楽器といっしょに、レッツ・オリジナル・ソングう～!!(ラップ調もイイネ(´-)-☆替え歌でもいいよ)

✠ 今週の暗唱聖句 (ヨハネによる福音書15章5節前半)

わたしはぶどうの木、あなたがたはその○○である。

〈ねらい〉

1. キリストと一つに結び合わされる。

聖書は、神様が与えてくださる「救い」の豊かさについて、「神の子となる」「罪が赦される」「永遠の命をうける」などと様々な表現を用いている。今日の箇所では「救い＝キリストと一つに結び合わされる」ということである。

私たちがキリストと一つに結び合わされると、キリストの命が私たちの中に豊かに流れ込んでくる。このキリストとの結合は、どんな力によっても引き離されることはない（ローマ8:38）。

〈子どもカテキズム〉

問30：神様の恵みは、どのようにして私たちに与えられるのですか。

答：聖霊なる神様が私たちに信仰を与え、私た

ちを主イエス・キリストと一つに結び合わせてくださることによってです。

〈展開例〉

1. 説教を聞いて教えられたこと・考えたことを分かち合う。

Q. 説教を聞いて新しく教えられたことは？

Q. 分からなかったことは？

2. 生徒と一緒に考える。

Q. 「キリストとの結合」ってどういう意味？

Q. キリストと一つに結び合わされると、どんな恵みがある？

Q. 「イエス様と私との結合」を引き離すことができる？



テキスト ヨハネによる福音書 8章1～11節

**【1～3節】**

この御言葉が語っている場面は、とても衝撃的な場面である。早朝の、恐らく静かな雰囲気であった神殿は、この時突然騒然となり、厳しい対決の場に様変わりした。

**【4節～6節】**

律法学者とファリサイ派たちは、姦通の罪を犯した女性をダシにを使って、主イエスを陥れようとしていた。彼らは主イエスに、「この女をどう裁くのか？ 石で打って殺すのか？ そうしないのか？」と問う。もし「石で打って殺す」と主イエスが言うならば、これは当時唯一死刑執行の権限を持っていた、ユダヤの支配者としてのローマ帝国の権威を軽んじる反逆罪に当たることになり、また日頃罪人たちと食事をし、低き者たちへの愛を語っていた主イエスの言動とも矛盾する故に、主イエスを訴えて、その名声を失墜させための良い根拠となる。また反対に、主イエスが女を石で打ち殺すことを拒む場合にも、それは旧約聖書のモーセの律法への違反として訴える口実になり、どちらにせよ主イエスを逮捕し、訴える端緒となる。しかしここで主イエスはかがみ込んで、指で地面に何か書き始められた。主イエスは、はじめは彼らと取り合わず、YesもNoも言わずに彼らを無視している。

**【7～9節】**

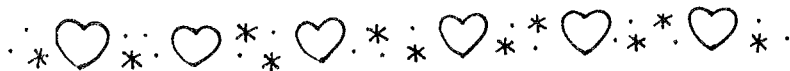
ここで主イエスは、石を投げてもよいと言われるが、石を投げてよい者の資格を、罪のない者と限定したことによって、ここで実際に石が投げられることを防がれた。人に向かって石を投げる行

為の背後にある心の動きとは、自分の無罪を主張して、相手に対して高く構えるという思いである。主イエスは石を投げる者自身にその資格を自問させる。この姦通の女性と一対一で向かい合うときに、あなたは石を投げることができるのか？あなたには、それだけのことができる資格と、自信と、その正しさがあるのかと問われる。当局者たちは退却を余儀なくされた。

**【10節～11節】**

「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。」ここに罪の完全な赦しがある。本来なら石打ちで処刑される身だったこの女性に、主イエスは、もう一度生きる機会を与えられた。彼女に石を投げる資格のある、たったひとりのお方が、「裁かない。罰しない。行きなさい。」と彼女を逃がしてくださった。私たちは皆罪人であり、主イエスの前にいる女性の姿は、私たちの姿でもあることを自覚させられずにはおれない。

この「行きなさい」という言葉は、大きな慰めの言葉となっている。「行きなさい」と言って彼女を逃がしてくださった主イエスは、この後反対に「行かない」、「逃げない」そして「生きない」のである。彼女が罪人として立つべきところに、主イエスは代わりに立ってくださった。彼女が受ける屈辱を、死に至る刑罰を、主イエスは十字架で代わりに受けられた。この私たちの罪も、ただこの主イエスの救いの御業によって、完全に赦されるのである。この方によってこそ私たちは、罪ゆえの死の罰を、この女性と同様に免れることができるのである。 (吉岡契典)



カテキズム 子どもカテキズム 問31

子どもカテキズム

問31 救いとは何ですか。

答 神さまの子どもとされることです。

そのために、神さまは私たちの罪を赦して、義と認めてくださいました。

ですから、私たちは、喜びと感謝をこめて、

「私たちの父なる神さま、私の天のお父さま」とお呼びします。

「救いとは何か?」、これはとても難しい問いだ。一言で答えるのは至難の業である。それこそ、いろんな面からアプローチすることができるし、実際、聖書自身が多種多様な視点で、救いのことを語ってくれている。そのことについて、詳細に語っていけば、時が足りないであろう。しかし、これは子どもカテキズムである。子どもたちには、子どもたちの目線で語れる言葉というものがある。何よりも感謝すべきなのは、救済論に関する神学的なことが分からない多くの人にも、救いのことが肌で感じられるようにと、神さまが配慮してくださったということである。つまり、親子の関係の中で、親に叱られ、その後受け入れられるという経験を、何度も繰り返していくことによって、罪が赦されることや、義と認められることを、感覚的に分かるように、あらかじめ備えていてくださったのである。それは、神さまとの関係を失ってしまった人類に対して、神さまが憐れみ深くも気を配ってくださったことのあらわれなのだ。そのような恵みがなかったとしたら、私たちは罪の赦しも義認も、決して理解できなかったであろう。私たちは、生まれてからずっと、親に叱られ、その後赦してもらうという経験を重ねながら、イエス様を通して神さまに罪赦していただく道備えをさせていただいてきたわけだ。叱られることも、赦してもらうことも、子どもたちは大人以上に知っているとも言える。大人になったら、別な意

味で叱られることも多くなるだろうが、赦される喜びはあまり体験できないかもしれない。その意味で、怒られることと、その後で受け入れられることを、子どもたちは経験して知っている。それだからこそ、福音の言葉は届くはずだ。

しかしながら、健全な仕方、叱られることも赦されることも知らない子どもたちも多いのだと思う。十分な愛を注がれず、感情にまかせた怒りで叱られ、許してもらえたのかどうかさえも感覚的に掴めないでいる、幼き者たちも数多くいるのではないか。そういう子たちにこそ、イエス様の福音を届けてあげたい。福音の中でこそ、健全に叱られることもできるし、健全に赦してもらうこともできる。本当の愛を体験できる。イエス様がその溢れんばかりの愛を注いでくださるから。「罪の赦し」以上に、「義認」という言葉は、難し過ぎて、子どもたちにチンプンカンプンであろうが、愛に飢えている子どもたちを抱きしめてあげること、子どもたちは義認の何たるかを知るであろう。どんなことがあっても、自分のことを決して離さないお方がいるのだということを知るのだ。それによって、子どもたちは神さまの愛を知り、イエス様が罪赦してくださったことの喜びを味わうのである。子どもたちにこう語りたいと思う、子どもたちよ、イエス様のもとに来なさい。イエス様が君たちを抱きしめてくれるんだよと。

(梶浦和城)

テキスト ヨハネによる福音書 8章1～11節  
カテキズム 子どもカテキズム 問31

### 〔単元のねらい〕

問31を二回に分けて伝えるうちの一回目として、罪を赦され、義と認められたことを伝える。福音の核心であるから何よりもこの喜びを伝えなければならない。その前提として、子どもたちが罪というものの手触りを身近に実感できるようにしてあげたい。そして神の御前にはどんな罪もあいまいにはされないことを教えることも必要だろう。その上で、私たちが犯したどんな罪も確実に赦されていることを納得させたい。そして赦してもらっているということがどれほどうれしいことかを知らせたい。その喜びの道を、教師と子どもたちが一緒に歩いているのだという現実がリアルに浮かび上がることを目指したい。そのためには教師自身が今一度深くわが身の幸いを黙想しなおすことが不可欠の説教準備となるだろう。

## 「罪を犯してしまった人」

皆さんの中で、今までに罪なんかひとつも犯したことはない人はいますか。いませんよね。それはここにいる先生たちも同じです。神さまの前では人間は全員、罪人なのです。それではみなさんは、今までに特別に大きな罪を犯してしまったことがありますか。そのときに、もし人から怖い目でじっと見つめられたらどんなでしょうか。たとえば自分ではそんな大きな罪を犯してしまったことはなかったとしても、もしかそういうことがあって、そのときに人からじっと見つめられたらどんな気持ちになると思いますか。今日はそういう大きな罪を犯してしまった女の人のお話です。その女の人が犯してしまった罪は、石で打ち殺されなければならないほどの大きな罪でした。その女の人をイエスさまのところに連れてきて、律法学者たちやファリサイ派の人々は「あなたはどうお考えになりますか。」とイエスさまに聞きました。それは相談したのではありません。「イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである。」と書いてあります。イエスさまを試して、訴える口実を得るためのわなだったのです。どうしてこれがわなになるのですか。この女の人を石で打ち殺すべきですか。それとも赦してあげべきですか。

もしイエスさまが「赦してあげるべきだ。」と答えたらどうなるでしょうか。律法学者たちは「このイエスという男は神さまの教えを無視している。」と人々に言いふらすにちががありません。そして訴えることができます。それでは逆にもしイエスさまが「罪を犯したのだから罰を与えるべきだ。石で打ち殺すべきだ」と答えたらどうですか。皆さんはどう思いますか。「なーんだ。イエスさまは救い主だと思っていたのに、救ってくれないのか。」とあって、人々はイエスさまから離れていってしまうでしょう。律法学者たちはそれをねらっていたのです。どちらで答えてもイエスをしくじらせることができるぞ、そう考えて、この律法学者たちはわなをしかけてきたのです。あなたはどうお考えになりますか。」とイエスさまに迫りました。ところがイエスさまは、かがみこんで指で地面に何か書き始めてしまいました。何もおっしゃいません。それで律法学者たちは「どうなんですか。あなたはこの人を石で殺すんですか、それとも赦すんですか。黙っていないで答えてください。」としつこく問い続けました。どうどうイエスさまは身を起こしてこう言われました。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」そう言って、



また身をかがめて、地面に何か書き続けていました。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」すると人々は、一人また一人といなくなってしまうました。どうしてだと思いますか。罪を犯したことの無い人などいないからです。みんな、「ああ私も罪を犯したことがある、だからこの女の人に石を投げることはできないな」と思ったんですね。

でも皆さん、誰か忘れていませんか。この場面に「罪を犯したことの無い」人は本当に一人もいませんか。そうです。イエスさまは罪を犯したことの無い人ですね。だったらイエスさまがこの女の人に石を投げて罰してもいいのではないですか。イエスさまは罰しましたか。いいえ。イエスさまはこの女の人を罰しませんでした。それではイエスさまは何とおっしゃいましたか。「わたしもあなたを罪に定めない」。イエスさまはどんな罪を犯してしまった人も罰さないのですね。もし皆さんがどんな大きな罪を犯してしまったとしても、イエスさまは皆さんを罰しません。イエスさまは皆さんを絶対罰しないということをよく覚えておいてくださいね。

それではこの女の人々の罪はどこへ行ってしまったのでしょうか。なくなってしまったのでしょうか。皆さんが犯してしまった罪はどこへ行ってしまったのでしょうか。もうなくなってしまったのでしょうか。神さまの前では絶対なくなりませんよ。それではその罪はどうなるのですか。罰を受けなくていいのですか。

いいのです。私たちはどんな罰も受けなくていいのです。私たちが本当は受けなくてはいけなかった罰を、イエスさまが全部、受けてくださったからです。どうやって罰を受けてくださったのですか。そうです。十字架です。私たちの身代わりになってくださったのですね。だから私たちが受ける罰はもう何も残っていません。

でもこの女の人々のときにはまだイエスさまは十

字架にかけられていませんよね。でもイエスさまはこの女の人に「わたしもあなたを罪に定めない」と決めてくださいました。どうして決められるのですか。イエスさまは、この女の人々の罪もわたしが十字架で引き受けよう、そう決めてくださっていたのです。イエスさまは最初から、十字架にかけられることを決めておられたのですね。

私たちの犯してしまったどんな罪も、イエスさまはにらみつけていません。そういうイエスさまの前で、私たちは自分の罪に気付くことができるのです。にらみつけられないイエスさまの前だから、私たちは正直に、自分の罪に気付くことができるのです。今まで私は自分の罪を棚に上げて、人の罪ばかりをにらみつけていたな、ということにも気付きます。イエスさまの前に出て、ああ自分は罪人だった、と気付くことはつらいことでしょうか。イエスさまの前で、ああ、わたしは大きな罪を犯してしまったな、と思うことはつらいことですか。いいえ、そうではありません。律法学者たちやファリサイ派の人々は、自分の罪に気付いて、こそごとイエスさまの前から立ち去ってしまいました。しかしイエスさまの前に残ったこの女の人に対して、イエスさまは何といわれたのでしょうか。「わたしもあなたを罪に定めない」。あなたは大きな罪を犯してしまったけれども、わたしはあなたを罪に定めない。あなたが受けなければならぬ罰は、全部わたしが引き受けるよ。あなたの代わりにわたしが十字架で殺されるよ。だからあなたは行きなさい。これからはもう罪を犯してはいけませんよ。イエスさまはそう言ってくださったのです。こんなうれしいことはないですね。涙がこぼれるほどうれしいことです。私たちは皆、もう赦してもらっているのです。最後にイエスさまはやさしい声でおっしゃいました。「これからは、もう罪を犯してはいけませんよ。」

(赤石純也)

---

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 8章11節後半

わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。

---

〈ねらい〉

女が罪を犯してしまったとき、イエス様は罰ではなく、赦しをお与えになりました。でも、その罪は消えてなくなってしまったのではなく、受けるべき罰はイエス様が引き受けてくださったのです。義なる神様の救いの業に感謝することができますように。

〈こども観〉

くり返しになりますが、幼いこどもたちに「あなたは罪人です」という自覚を促すことは、とても難しいことです。今、ここに「悪いことをした」という事実がない分級の場では、いたずらに低い自尊心、自己嫌悪感を植えつけてしまいかねません。けれども、他者や自分の行いを「いいこと」「わるいこと」と判断する力、自分だったらどう感じるだろうと想像する力を身につけつつあるこどもたちです。たとえ話を用いて、神様の「罪の赦し」について語ります。

〈展開例〉

みんなは、クリスマスにサンタさんからプレゼントをもらったかな？ よい物をもらったんだね。

さて、あるところに〇〇ちゃんという女の子がいました。小学2年生の女の子です。あるとき、一人で鉛筆を買いに文房具屋さんに行きました。そこには、ずっとほしかったキラキラ光るシールがおいてありました。お店の人は向こうをむいて

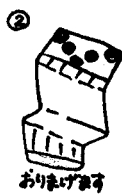
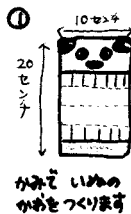
います。〇〇ちゃんは、「シール一枚くらいなら盗ってもわからない、大丈夫!!」という悪魔の声に負けて、シールをそっとポケットに入れてしまいました。ドキドキしながらお店をでようとすると、買い物にきていたおばさんに呼び止められてしまいました。〇〇ちゃんは、心臓が止まりそうなくらい、びくっとしました。おばさんは、「ポケットにシール入れたでしょう。出しなさい。お金をはらわないといけませんよ。」と言いました。鉛筆を買ってしまって、〇〇ちゃんには、もうお金はありません。おばさんは、シールをレジに持って行ってお金をはらってくれました。お店の人にも謝ってくれました。そして、「シールのお金ははらったから、これはあなたのものになったわ。お店の物をだまって持って行くのは悪いことですよ。わかるわね?」と言って、まっすぐに〇〇ちゃんを見つめました。〇〇ちゃんは、「ああ、わたしはなんて悪いことをしてしまったんだろう」と思いました。「ごめんなさい、ごめんなさい」という気持ちがあふれてきて、わーっと泣き出してしまいました。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、悪いことをしても赦してください、わたしたちを愛してくださる神様に感謝いたします。私たちが悪いことをしたと気づいたら、イエス様に心から「ごめんなさい。ゆるしてください」と言えますように。アーメン。

〈やってみよう〉

はやくはやくわんこぞ おしゃべりしよう



かんせいです。  
ぱくぱくさせて いっほい  
おしゃべりしてみましょう!!

出典 たのしい行事と工作 1月のこども  
竹井英郎 小倉書店

**〈ねらい〉**

ぼくたち私たちは、イエス様を信じて救われました。それでも、罪犯してしまうことがあります。大切なことは、どんな罪でも告白すれば赦されるということです。どんな罪でも赦してくださるイエス様の愛を知っていきましょう。

**〈展開例〉**

あるところで嘘つきコンテストがありました。誰が一番すごい嘘をつくことができるかというコンテストです。そして、一人の男の人が優勝しました。さて、この人はどんな嘘をついたのでしょうか？

皆、分かるかな？（聞いてみる……）

何と、この男の人は、「今までぼくは一回も嘘をついたことはありません。」こう言ったそうです。ぼくたち私たちの中で、今まで一回も罪を犯したことがない人はいないと思います。

どんな罪でも、イエス様が赦してくださいます。ですから、その罪を告白することが大切なことです。

さて、「先生、この女は姦通をしているときに捕まりました」（ver4）。今日の聖書を読むと、ある大きな罪を犯してしまった女の人が捕まって、律法学者たちやファリサイ派の人々によって、イエス様のところに連れてこられました。そして、彼らはこう言いました。「こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうお考えになりますか」（ver4～5）。

これはイエス様にどうしようと、相談するものではありません。イエス様を陥れる口実を得るためでした。「赦してあげなさい」と言えば、それは神の律法に背くことになりました。しかし、「石打ちの刑で殺してしまいなさい」と言えば、それは、「イエス様には愛がない、心の狭い人だ」

という悪口を言いふらす口実を与えることになりました。どっちに転んでもイエス様を罠にかけられると思って、律法学者やファリサイ派の人々は攻撃をしてきたのです。

好奇の目線にさらされている女性をかばうためでしょうか。その好奇の視線をこの女からそらすために、「イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた」（ver6b）と聖書は言っています。しかし、彼らがしつこく問い続けるので、どうどうイエス様は身を起して言われました。「あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい」（ver7）。

「これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとり、真ん中にいた女が残った」（ver9）。

イエス様のお言葉に律法学者やファリサイ派の人々はビックリしました。なぜならば、今まで罪を犯したことがない人は、一人もいないからです。

そして、イエス様は言われました。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない」（ver11）。こうして、この女の罪は赦されました。この女の人の罪は、イエス様によって完全に赦されてしまったのでした。

大切なことは、どんな罪でも告白すれば赦されるということです。どんな罪でも赦してくださるイエス様を信じていきましょう。そして、天の神様を私のお父様とお呼びしていきたいと思えます。

**〈お祈り〉**

イエス様に喜んで心から罪を告白することができるように導いてください。イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。

✠ 聖書をひらいて (ヨハネによる福音書8章1～11節)

ナ	ゲ	ナ	サ	イ
コ	イ	ナ	ダ	エ
ウ	ユ	ビ	メ	ス
ジ	メ	ン	ナ	イ
ツ	ミ	サ	イ	キ

☆問題：今日の聖書箇所に出てきた言葉が重なりながら7つかくれています (タテ・ヨコ)。その言葉をのぞくと、文字が出てきます。この文字を組み合わせると、どんな言葉になりますか？  
(口美、地面、指、イエス、投げなさい、罪、定めない)

ヒント：イエスさまの言ったことは



✠ 考えてみよう (みんなで話し合ってね！( \_ )- ☆)

☒ イエスさまは、この女の人に「わたしもあなたを罪に定めない」といわれました。ボクのこともイエスさまは、「わたしもあなたを罪に定めない」といつてくださいますか？ (Yくん・12才)

✠ 言ってみよう

問30  
救いとは何ですか？

神さまの子どもとされることです。そのために、神さまは私たちの罪を〇〇〇〇て、〇と認めてくださいました。  
ですから、私たちは、喜びと感謝をこめて、「わたしたちの父なる神さま、私の天のお父さま」とお呼びします。

✠ やってみよう —ワン・ツー・ゲーム— 「わたしも、あなたを……ゲーム」



- ① 全員で丸くなって座ります。はじめの人が、「Aさん！」と名前を呼んで、Aさん以外の人に指をさします。(指を指された人は、指を指されても、反応してはいけません。)
- ② 名前を呼ばれたAさんは、今度は「Bさん！」と名前を呼んで、Bさん以外の人に、指をさします。……慣れてきたら、テンポを早くしてゆきます。

☆ 私たちは、「〇〇さんは、罪人！」と指をさすことができません。なぜなら、イエスさまもわたしのことを「あなたは、罪人です」と指を指されなかったからです。

✠ 今週の暗唱聖句 (ヨハネによる福音書8章11節後半)

わたしもあなたを罪に〇〇〇〇〇。行きなさい。  
これからは、もう罪を犯してはならない。

## 〈ねらい〉

## 1. 義と認められることについて。

神様は、イエス・キリストを救い主として信じる者の罪を赦し、その者を義と認めてくださる。「義になる、義に変わる（人間としての性質そのものが変えられて義人となる）」のではなく、人間としての性質は罪人のままであるが、しかし、恵みによって、神はキリストを信じる者を義と認めてくださるのである。

## 2. 義認における神の恵みについて。

イエス・キリストを救い主と信じたときに義と認められるのは、神の恵みによる一方的な決定である。「キリストを救い主として信じること」と「義と認められること」は本来別のことであるが、神は、私たちの理解を超える愛と憐れみによって、信じる者を義と認めてくださったのである。

## 〈子どもカテキズム〉

問31：救いとは何ですか。

答：神様の子どもとされることです。

そのために、神様は私たちの罪を赦して、義と認めてくださいました。

ですから、私たちは、喜びと感謝をこめて、「私たちの父なる神様、私の天のお父様」と呼びます。

## 〈展開例〉

## 1. 説教を聞いて教えられたこと・考えたことを分かち合う。

Q. 説教を聞いて新しく教えられたことは？

Q. 分からなかったことは？

## 2. 生徒と一緒に考える。

Q. 「義認(義と認められる)」ってどういうこと？

Q. 何をしたら義と認められる？

Q. なぜイエス・キリストを信じたら義と認められる？



神学的な意味において、ガラテヤ書の一つの頂点となっている御言葉である。ここには「キリストにある」、「キリストの霊」を与えられた者にとっての、一大転換が語られている。そしてそれがガラテヤ教会の一致の基礎として据えられている。ガラテヤ教会は、律法を軸として、互いに律法を押しつけ合うことによって歩むのではなく、父なる神に結び付けられた神の子らとしての、全く新しくされたアイデンティティーを今や得ている故に、それによって一致へと導かれるようにパウロは勧告している。

### 【1～3節】

未成年の相続人の姿が譬えとして描かれている。未成年の相続人は、既に父親の全財産を将来相続する者であることが確約されているが、未成年の間は相続にふさわしい身分が与えられるまでは、後見人や管理人の監督に服さなければならない。しかし成人した暁には、相続者は管理者の監督から自由になることができる。この社会的習わしを用いた譬えが、ガラテヤ教会に適用される。相続者が一時的に後見人・管理人に服従していたように、主の民もかつては律法並びにこの世のものに服していたのだが、しかしその拘束力は一時的であり、未成年期のみ限定されるものなのである。

### 【4～5節】

ここに歴史の大きな転換が生起したことが言い表されている。つまり時は満ち、そこから新しい時代が開始する。今やキリストの到来によって、

主の民にとっての未成年期は終わったのである。そこには神の御子、イエス・キリストによる律法からの自由がもたらされている。ここには全く簡明な仕方でもキリスト到来の中心的意義を語る、使徒パウロによるクリスマス説教が語られている。

### 【6節】

有名な御言葉である。主イエス・キリストの贖いが、主の民を未成年の僕の状態から、律法の支配下から解放してくださった。キリストの解放により、今や相続を約束されたかつての未成年者が、名実共に相続者としての身分を得ることになる。その新しい身分とは「神の子」という身分である。その者たちに、父なる神はキリストにもお与えになった聖霊を送ってください、それと並んで、子とされた者たちも父なる神に向かって「アッパ、父よ」と、喜びと共に呼ぶことが許される。

### 【7節】

「神の子」とされたキリスト者たちは、相続の権利がなく父に認知を受けていない、名ばかりの子としての庶子なのではなく、真正な相続者としての嫡子、跡継ぎなのであり、もはや全く奴隷ではない、「神の子」という高い身分に値する者となったということが明言される。そして「神の子」という身分を付されたということは、単に父との親密な父子関係が成立したことに留まらず、具体的に父としての神が有するもの全てを相続するという、父の恵みの具体的な相続権を既に得たということさえをも意味することが断言されている。

(吉岡契典)



子どもカテキズム

問31 救いとは何ですか。

答 神さまの子どもとされることです。

そのために、神さまは私たちの罪を赦して、義と認めてくださいました。

ですから、私たちは、喜びと感謝をこめて、

「私たちの父なる神さま、私の天のお父さま」とお呼びします。

この問答の後半部分は、父親のいない子どもや、お父さんのことが嫌いな子どもたちにとっては、いささか抵抗のあるものとなるかもしれない。実感として湧かないし、嫌な思い出がよみがえってくるから。神さまのことを「私たちの父なる神さま、私の天のお父さま」と呼べることの幸いは、父親というものに対して、肯定的で好意的なイメージを抱いている子どもだけが、感覚的に理解できるものであろう。そうでない子どもたちは、神さまを天のお父さまと呼べる恵みを、どうやったら味わえるのだろうか。それは、すぐには難しいかもしれないが、教会の人たちが、目に見えない神さまを天のお父さまと親しげに呼び、そのお方から注いでもらっている愛を楽しんでいる姿を見て、少しずつ分かっていくことができるのであろう。普通に父親のいる子どもたちや、お父さんのことが基本的に好きな子どもたちも、そのような子どもたちが天のお父さまの愛を知っていく姿を通して、天の父の愛をさらに深く味わっていくことになるのだと思う。なぜなら、天のお父さまは、双方にとっての父親なのだから。

父親たちが、神さまの前で幼子のようにになっている姿を見ることによっても、子どもたちは、神さまというお方を知るに違いない。そういう、父の祈りの姿を見ることのできた子どもは幸いだ。隠れた密室での、弱さや欠けをさらけ出した、甘

えている信仰の姿勢を垣間見ることのできた子どもたちは幸せ者だ。しかし、それは教会においても、体験できよう。礼拝の中で、交わりの中で、様々な活動の中で、神さまを天のお父さまと信頼して、大胆に恵みの座に出ている大人たちが、子どもたちに天のお父さまを教えてくれる。天のお父さまの愛の御腕に抱かれて、みんなが安心しているならば、その愛に囲まれて、子どもたちも着実に育っていく。しかし、もしそうではなく、罪赦された喜びや、天のお父さまの愛を楽しんでいる姿を、子どもたちが教会の中で見れないとなると、子どもたちはどこで天のお父さまの愛を知ることができるだろうか。どこで、天のお父さまを呼べる幸いを味わうことができるだろうか。そういう意味で、カテキズムを教えることは、単に教師と子どもたちだけの問題ではなく、教会全体の務めであることを思う。

子どもたちが、神さまのことを「私たちの父なる神さま、私の天のお父さま」と呼ぶということも、神さまのことを怖がっていないということでもあるし、その存在を疑っていないということでもある。どうか、聖霊なる神さまが、子どもたちの内に、大人たちの内に、そして教会全体に、天のお父さまへの真っ直ぐな呼び声を創り出してください。そこでこそ私たちは、イエス様と一つになることができる。(梶浦和城)

---

2月1日

「神の子とされる幸い」

説教展開例

---

テキスト ヨガラテヤの信徒への手紙 4章1～7節  
カテキズム 子どもカテキズム 問31

---

### 〔単元のねらい〕

問31の二回目として、一回目の罪の赦しに引き続き、神の子とされたことを伝える。子どもたちが祈っている祈りの言葉などから「父なる神さま」と呼んでいる現実を踏まえるなどして、神の子とされているリアリティーを伝えたい。そしてその感動を呼び覚ましたい。パウロのテキストに即すと論理的な困難もあり、子どもの年齢によっては理解が難しいだろうから、出席者の顔ぶれに合わせた教師の工夫が求められる。可能ならば聖霊との関係や、神の子とされたことに含まれている恵みの内実をも指し示したい。

---

## 「アッパ、お父さん」

---

皆さんは教会学校に来て、いつも主の祈りで、「天にましますわれらの父よ」とお祈りしていますね。「天にましますわれらの父」とは誰のことですか。そうです。神さまのことです。皆さんは神さまのことを「天にましますわれらの父よ」、「天にいらっしゃるお父さん」と呼んでいるのですね。神さまは皆さんの天のお父さん、皆さんは神さまの子どもなのです。だけど、ただ口先だけで主の祈りをいうだけではだめです。

皆さんはイエスさまを心から信じていますか。はい、みんなイエスさまを心から信じていますね。聖書にはこう書いてあります。「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えない」（コリントー12：3）。聖霊によらなければ、だれもイエスさまを信じることはできない。皆さんは今イエスさまを信じていますけれども、どうして信じることができるようになったと思いますか。それは神さまが皆さんに聖霊を注いで、信じる力を与えてくださったからです。神さまの力なのです。皆さんがイエスさまを信じているということは、皆さんは神さまから聖霊を注がれたということの証拠なのです。神さまは聖霊を皆さんの心に送ってくださったのです。

だから皆さんはイエスさまを信じることができ、そのイエスさまが教えてくださったのが主の祈りですから、私たちは主の祈りをとても大切に

して祈るのです。そして「天にましますわれらの父よ」と、心から神さまを呼ぶことができます。皆さんは神さまのことを「父よ」「お父さん」と呼んでお祈りしているのです。だからもう皆さんは神さまの子なのです。

ところで皆さん、イエスさまは何語を話されたか知っていますか。イエスさまが話された言葉はアラム語という言葉です。アラム語では「お父さん」のことを「アッパ」といいました。これはイエスさまが使った言葉そのままです。「アッパ」「お父さん」。イエスさまは神さまのことを「アッパ、お父さん」と呼んでいらっしゃったのです。イエスさまを信じている皆さんは、イエスさまと一緒に、神さまのことを「アッパ、お父さん」と呼ぶことができます。神さまを「アッパ、お父さん」と呼ぶのですから、皆さんは神さまの子どもです。皆さんは神さまの子なのです。

4章6節と一緒に読んでみましょう。「あなたがたが子であることは、神が、『アッパ、父よ』と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実から分かります」。皆さんがイエスさまと同じように、神さまのことを「アッパ、父よ」と呼んでいる事実から、皆さんが神さまの子であることが「分かる」と、聖書は言っています。「分かる」のです。皆さんは本当に神さまの子だと「分かる」のです。先生にもよくわかりますよ。



皆さんは心からイエスさまを信じて、イエスさまが教えてくださったとおりに主の祈りを「天にましますわれらの父よ」と言って祈っているのですから、ああ、みんなは本当に神さまの子なんだということが先生にもよく分かります。

子どもは親の財産を分けてもらいます。財産を分けてもらうことを「相続」するといいます。ですから親の財産を分けてもらう子どもは「相続人」です。

けれども、聖書は私たちははじめは奴隷のようだったと言っています。だれの奴隷のようだったと思いますか。悪の力、いろいろな悪い思い、罪の力の奴隷のようだったのです。皆さんも、ここにいる先生たちもみんなです。罪の奴隷でした。罪人だったのです。先週の教会学校で皆さんはどんな女の人の話を聞きましたか。大きな罪を犯してしまった女の人の話でしたね。石を投げつけて殺されなければならないほど大きな罪を犯してしまった女の人でした。しかしあの女の人は殺されてしまいましたか。殺されませんでしたね。どなたと出会ったのですか。そうです。イエスさまと出会って、罪を赦していただいたのでしたね。そうして、神の子どもとされました。

皆さんも同じなのです。ここにいる先生たちも同じです。みんな罪の奴隷のような罪人でした。本当に大きな罪を犯してしまったこともありました。しかしイエスさまと出会って、罪を赦していただいたのです。イエスさまが私たちの罪を全部引き受けて、私たちの身代わりになって十字架にかかってくださったので、私たちは全員、神さまから赦していただきました。赦していただいてどうなったかということ、神さまの子どもにされたの

です。このことを「救い」というのですね。皆さんは救われたのです。救われて、神さまの子どもにされたのですね。

子どもカテキズムの間31を読みましょう。「救いとは何ですか。神さまの子どもとされることです」。そうです。皆さんはもう神さまの子どもです。もともと人間は全員、罪人なのですが、イエスさまと出会って、イエスさまに罪を赦していただいて、皆さんは救われたのです。救われたということはどういうことかということ、神さまの子どもとされたのです。人間は皆、もともと奴隷です。罪の奴隷だったのです。しかしイエスさまに赦してもらった皆さんは、もう奴隷ではなく、神さまの子になったのです。皆さんはもう、なにもの奴隷でもなく、神さまに愛されて、神さまに守られて生きる、神さまの子どもなのです。

皆さんが神さまの子どもだということは、皆さんは神さまの相続人だということです。皆さんは神さまからどんな財産を相続すると思いますか。神さまの国です。神さまの国を引き継ぐのです。これはすごいことだと思いませんか。皆さんはイエスさまといっしょに、イエスさまの兄弟として、神さまの国を引き継ぐための、神さまの子どもなのです。

神さまの子だということはすごいことです。でも皆さんは恥ずかしがらないでください。遠慮しないでください。これは神さまがお決めになったことです。イエスさまを信じる皆さんを、神さまが、私の子だと決めてくださったのです。いいですね。堂々と答えてください。皆さんは神の子ですか。「はい」。(赤石純也)

---

[今週の暗唱聖句] ガラテヤの信徒への手紙 4章6節

あなたがたが子であることは、  
神が、「アッバ、父よ」と叫ぶ御子の霊を、  
わたしたちの心に送ってくださった事実から分かります。

---

## 〈ねらい〉

子どもたちが神様の子とされていること、神様を「お父さん」と呼ぶことができる幸いを伝えます。

## 〈こども観〉

子どもたちに「お父さん」「パパ」のイメージについて尋ねてみます。「お父さんはおうちでどんなことをしているかな」「おうちにいないとき、お父さんは何をしているかな」と発問してみると、いろんな答えが返ってきそうです。社会に出て多忙なお父さんは、お母さんよりも家庭の中では、こどもたちにとって存在感の薄さが浮き彫りになるかもしれません。いずれにしても、こどもたちにとって、「パパ」「お父さん」と呼べる人は、たった一人だけのはず。けれど、その近いお父さんのほかに、「お父さん」と呼べる存在があることを伝えます。

主の祈りの中で、「天にましますわれらの父よ」と唱えている言葉は、まぎれもなく神様を「お父さん」とよびかける言葉であることに気づかせましょう。わたしたちが、赦されて神の子とされていることを、感謝をもって伝えたいですね。

父親がいない家庭もあります。その場合は十分に配慮してお話を展開してください。

## 〈展開例〉

みなさんには、おうちにお父さん、お母さんがいますよね。お父さんは、おうちで何をしていま

すか？ どんな人ですか？

（一緒にお風呂にはいる・遊んでくれる・パパはカイシャ・オシゴトしているなど）

じゃあ、みなさんは、お父さんのことを何て呼んでいるのかな？

（おとうさん・おとうちゃん・パパ・〇〇くん）

では、みんなが「お父さん」と呼んでいる人が、他にもいることをご存知ですか？ 主の祈りの最初の部分を唱えてみましょう。「天にましますわれらの父よ」……あれ、天にいらっしゃいますわたしたちのお父さんと呼びかけていますよ。神様をお父さんと呼んでいるんですね。教会に来ている人は、みんな主の祈りを唱えますから、みんな、「神様のこども」ということになります。教会に来ている〇〇長老、お父さん、お母さんに、「あなたは神様のこどもなの？ 神様をお父さんと呼びますか？」と聞いてみてください。きっと、にこにこして「そうですよ」と答えてくれるでしょう。そして「あなたも神様のこどもだよ。いっしょだね。感謝だね」と教えてくれるかもしれません。神様をお父さんと呼べることに、心から感謝している人が教会には集まっているのです。

## 〈お祈り〉

天の父なる神さま、わたしたちを、毎週教会に招いて、神様のこどもとしてくださってありがとうございます。これからも、喜んで、感謝して「天のお父様」と神様を呼ぶことができますように。アーメン。


## 〈やってみよう〉

かみこひつじをつくらう

ようばいもの

- がようし (下線をかいたもの)
- 両面テープ
- ふわふわの白い毛糸
- おでか

つくりかた



下絵のひつじの上に  
あるめた毛糸のうらに  
両面テープをつけて  
もさもこのこひつじを  
つくってみましょう

**〈ねらい〉**

ぼくたち私たちは、イエス様を信じて救われました。それによって、天の父なる神様が、ぼくたち私たちの本当のお父様になってくださったのです。そして、ぼくたち私たちが神の子としてくださるのです。神の子としてくださった幸いについて学んでいきたいと思います。

**〈展開例〉**

皆さんの、お父さんはどんなお父さんかな？(皆に聞く……)

もしかすると、お父さんはいなくて、お母さんだけがいる人もいるかもしれません。

皆さんの、お父さんは優しいお父さんですか？それとも、怖いお父さんですか？ きっと皆のお父さんも、一人ひとりのことをよく考えて、ある時は厳しく、ある時は優しく語りかけてくれる、素晴らしいお父さんだと思います。

ぼくたち私たちは、イエス様を信じて救われました。ぼくたち私たちがイエス様を信じたということは、天の父なる神様が、ぼくたち私たちの本当のお父さんになってくださったということなのです。だから、「あなたがたが子であることは、神が、『アッパ、父よ』と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実から分かります」(ver6)と聖書が言っているように、ぼくたち私たちは、この天の父なる神様を「アッパ」と呼ぶことができます。「アッパ」というのは、幼児が使うアラム語で、そのまま翻訳すると「お父ちゃん!!」という意味です。ぼくたち私たちは、イエス様を信じたことによって、天の父なる神様

がぼくたち私たちの本当のお父さんとなってくださり、ぼくたち私たちがまた、天の父なる神様を「アッパ」「お父ちゃん」と親しくお呼びすることができる、そのような関係になることができたということなのです。ぼくたち私たちが神様の子どもとされたのです。

そして、さらに、ぼくたち私たちが神様の子どもとされたということは、神様の内にある素晴らしいものを、ぼくたち私たちのものとする事ができるということなのです。聖書は次のように言っています。「ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神によって立てられた相続人でもあるのです」(ver7)。ぼくたち私たちが神様の相続人なのです。神様の内にある素晴らしいものを自分のものとする事が出来るということなのです。

それは、神様との交わり、それによって与えられる永遠の命、罪の赦し、神様の素晴らしいご性質である愛と真実など、神様の内にある素晴らしいものを相続して、受け継いで、神の子として歩んでいくことができるのです。ぼくたち私たちが、もはや罪の奴隷ではなくて、神様の相続人なのです。そしてそれが、ぼくたち私たちが神様の子どもとされたということなのです。

**〈お祈り〉**

イエス様、ぼくたち私たちが神様の子ども、神様の相続人としてくださったことを心から感謝します。あなたを「アッパ」と呼ぶことができますようにしてください。イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



## ✦ 聖書をひらいて（ガラテヤの信徒への手紙4章1～7節）

↓

そ	う	ぞ	く	に
こ	は	れ	は	ん
で	な	い	や	ん
そ	う	ぞ	く	に
す	く	で	ど	も

☆問題：「相続人（そうぞくにん）」の文字を黒くぬってください。

①黒くぬったところから、どんなカタカナが浮かびあがってくるかな？（1文字） 答 \_\_\_\_\_

②残った文字を↓の方向に読んでください。



## ✦ 考えてみよう（みんなで話し合ってね！（\_）-☆）

☒どんなに親切にしてくれる人にも、その人を決して「おとうさん」とは呼びません。なのに、どうして神さまには、自然な気持ちで「天のおとうさま」といってお祈りできたのか、ふしぎでしかたありません。どうしてですか？（Mちゃん・11才）

## ✦ 言ってみよう

問31

救いとは何ですか？

神さまの○○○とされることです。そのために、神さまは私たちの罪を赦して、義と認めてくださいました。

ですから、私たちは、喜びと感謝をこめて、「わたしたちの父なる神さま、私の天のお父さま」と呼びます。

## ✦ やってみよう —ワン・ツー・ゲーム—「あととりゲーム」

①ことばの「最後の2文字」を頭につけて、しりとり（後取り）をしてゆきます。

② **スタート**

例) 相続人（そうぞくにん）⇒ニンジン⇒じんましん⇒信仰（しんこう）⇒公園（こうえん）⇒演奏（えんそう）⇒相続人（そうぞくにん）

・「相続人」から始まって⇒⇒⇒「相続人」にもどってこれたら、大成功!!

★神さまの本当の子どもとしてくださって、神さまの恵み、天の国の相続人にされたんだね。



## ✦ 今週の暗唱聖句（ガラテヤの信徒への手紙4章6節）

あなたがたが、○であることは、神が「アッパ、父よ」と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実からわかります。

〈ねらい〉

1. 神の子とされた喜び。

救われたことの喜びは、「今、私は神の子である」という事実にある。天地の造り主である全能の聖なる神様に向かって、まっすぐに「お父さん」と呼びかけることができる。この事実こそ、私たちの最大の喜びである。

2. 「お父さん」と呼びかけて祈る。

イエス・キリストは、「主の祈り」を教えてください、神に向かっ「父よ」と祈るよう言われた。

毎日の生活の中で、具体的に、声を出して、「お父さん」と神様に呼びかけることを生徒たちに強く勧めたい。父なる神様との親しい祈りの関係において、私たちの信仰はますます豊かなものに変えられていこう。

〈子どもカテキズム〉

問31：救いとは何ですか。

答：神様の子どもとされることです。

そのために、神様は私たちの罪を赦して、義と認めてくださいました。

ですから、私たちは、喜びと感謝をこめて、「私たちの父なる神様、私の天のお父様」と呼びます。

〈展開例〉

1. 説教を聞いて教えられたこと・考えたことを分かち合う。

Q. 説教を聞いて新しく教えられたことは？

Q. 分からなかったことは？

2. 生徒と一緒に考える。

Q. 神の子とされたということは、どんな意味（喜び、恵み）がある？

Q. 神の子とされる前と後で、どんな変化がある？



テキスト ガラテヤの信徒への手紙 2章19～21節

パウロが去った後、ガラテヤの教会にユダヤ主義者たちが来て、「異邦人はイエス・キリストを信じるだけでは救われない。割礼を受けユダヤ人の仲間になり、モーセ律法を守らなければならない」と教えはじめたようです。ペトロやバルナバさえ、一時的に、それに惑わされたのです(2:11-14)。霊の父であるパウロは、こんなにも早く異なる福音、救いと無関係なことに影響されているのに驚きあきれ(1:6)、何としても真の福音、救い、自由を伝えようとしています。

### 〈信仰によって義とされる、神様の恵み〉

(2:15-21)

神様の前に義しい人として立てるのは、どのような人なのか。異端を持ち込んだ人たちが言うように、律法の実行によるものではありません。生まれながらの神の選びの民、アブラハムの子孫であるユダヤ人であっても、律法の実行によるものではありません。ただイエス・キリストへの信仰によって義とされます(2:15)。律法というのは神様の愛の戒めであり、その要約は十戒です(マタイ22:34-40)。神の掟に生きようとし、それで自分を認めて欲しいと願っても、私たちの心に生ずるのは罪の自覚であり(ローマ3:20)、その道を追求しても誰ひとり義と認められないのです(2:16)。信仰の父アブラハムは、割礼を受ける(創世記17:24)前に信仰によって義とされたのです(3:6、創世記15:6)。敵対者たちが、キリストは自分の教えに人々を従わせることで、次々と罪人をつくりだしていると非難していることに対して、パウロは決してそうではない(2:17-18)と否定しています。

### 〈生きるために死ぬ〉

律法によって生きようとする道を徹底的に生き抜こうとしたパウロは(1:13-14、フィリビ

3:5-6)、神に対して生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです(2:19)と言います。生きるとか、死ぬとか、全く正反対のことを語るのですが、律法に対して死ぬとは、律法が支配する世界には、もう自分はいないということです。自分は、神様に対して生きている。神様の本当に素晴らしい恵みのご支配の中で生きている。もう、あの古い生き方、自分自身の努力、功績、業、行い、人柄とか、そんなものにより頼まない。誰であれ自分自身の中に律法が求めている全てに応える力があるはずがないと言うのです。自分はキリストと共に十字架につけられ、そのような古い自分に終止符を打てたのです。

### 〈キリストがわたしの内に生きておられる〉

新しい人は、自分自身の中に何かの根拠を持つ人ではありません。自分の外に自分の命の根拠を持つ人です。確かに私が生きていますが、生きているのは、もう私ではない。私たちの霊的現実です。それなら、誰が生きているのか。私と共に生きていてくださるキリストが私の内に生きておられる(2:20)。不思議なことが起こっています。私たちは、この地上を肉において生きていますから、弱さや欠けがあり、喜びも悲しみもあります。けれどもパウロは、今は、信仰によって生きているというのです。もう全てのことを、キリストに委ねて生きることが出来るようにさせられているのです。「わたし」という言葉を何度も使用するのは、「わたし」(2:21)のために注がれている神とキリストの恵みを覚えているからです。自分が死んで、自分の内にキリストが生きておられる。キリストが形造られて行く人生ですから、どのような試練の中でも、神を愛し、隣人を自分と同じように愛する者へと変えられて行く希望の中にあります。聖化の恵みが始められているのです。

(西堀則男)

## 子どもカテキズム

問32 救われたあなたはどうなりますか。

答 聖化の歩みを始めます。

問33 聖化の歩みとは何ですか。

答 神さまの子どもとして、罪に死に、神さまの御子イエスさまのお姿に似せられていくことです。神さまに愛されている喜びのうちに、私たちも神さまを愛して歩みます。

参照教理問答 ウェストミンスター大教理問答 問35

救われて神様の子どもとされた者は、聖化の歩みを始める。この「聖化」について今回から二週にわたって学ぶ。

## 〈救いは義認だけに終わらず〉

キリストを救い主と信じた時に、「私は救われた」と口にする。実際救い主を信じ受け入れたその時に、神様の子どもの身分をいただき、罪を赦されて義と認められ、永遠の命をいただく。だがこの義認だけをもって神の子とされる救いが完成する、というのは早計である。「神の子とされる」ことは、血のつながりのない人の養子になることとして考えることができる。養子になることは「誰々の子」という身分を得る一回的な決定であると同時に、以後は子として生きることを含む。だから、養子縁組はしたが生活の実質がそれ以前と変わらずというのでは、この縁組は偽装ではないかと周囲から身分にまで疑いの目を向けられる。神の子とされた私たちは、神様の導きと支えのもと、神の子の身分にふさわしく実質的にも生きたいと願って聖化の歩みを始める。

問30で、聖霊が私たちをキリストと一つに結び合わせる恵みによって私たちを救われることを学んだ。私たちは身分的また実質的に神様の御子であられるキリストと結合され、一体とされる。そこで使徒パウロは「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」（ガラテヤ2:20）と言い切る。私たちの内にはキリストの全体が注がれる。実質面での聖化の恵みも注がれる。にもかかわらず、自分の力にだけ頼ったり、愛に欠けた生き方

を救われた後も変えようとしなければ、「神の恵みを無に」すること、キリストの死を無意味にすることと言うほか無い。（ガラテヤ2:21参照）

## 〈墮落で失ったものを恵みにより取り戻す〉

新共同訳聖書卷末の「語句解説」によれば、「聖」とは「神の絶対的な尊厳を表わす表現。人間を含むあらゆる被造物との隔たりを意味する」。この聖なる神様が人間を神にかたどり神のかたちに創造し、神のものとして生きるよう取り分けられた。その点で人間は聖なる者とされた。人は罪を犯し、神様から離れることで、聖性も失っていた。しかし、神様は私たちを回復させ、再び聖なる者とするためにお救いくださった。

再び聖なる者とされるための聖化の歩みにおいて、注意しないといけないのが、キリストから離れて聖化を追い求めること（ガラテヤ書でいう「律法による義」）である。それでは自分で自分を完成させようとする修行に陥ってしまう。聖化についてウェストミンスター小教理問35は「値なしに与えられる神の恵みのわざ」と述べている。神の子とする聖霊によって聖化の歩みを進ませただけなのである。聖霊は神の御言葉、礼典、祈りという恵みの手段を私たちが用いる時に働かれる。そして私たちとキリストとの結合をいよいよ強め、深めてくださる。その時私たちに聖化の実りが与えられる。キリストは言われた。「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。」（ヨハネ15:5）

（吉田 崇）

テキスト      ガラテヤの信徒への手紙 2章19～21節  
カテキズム      子どもカテキズム 問32、33

### 〔単元のねらい〕

子どもに信仰を与え、主イエス・キリストとの交わりへと招き入れられたのは、ただ聖霊のお働き、恵みです。日曜学校教師は、いまだ信仰を公に告白していない子どもたちにも、聖霊が注がれ、働いておられることを信じる信仰が求められています。確かに、公に信仰を告白しようとの志が与えられるときまで、聖霊の働きを内的に確信することはできないでしょう。しかし、教会に通い、祈り、礼拝を捧げることができるのは、聖霊の御業です。ですから、教師は、自分のあらゆる奉仕が聖霊の注ぎのなかで用いられることを祈るべきです。それなしには、あらゆる奉仕は空しく、正しい実りを結ばません。聖化は、天国への歩み、その過程です。そして、始まりも過程も終わりも、すべてが聖霊の恵みの実りです。聖霊こそ、聖化の主であられ、天国をここで現出させ、味わわせてくださる神です。その聖霊は主イエスの霊です。主イエスを語りましょう。

## 「イエスさまといっしょ、そしてイエスさまのおられるところへ」

先生にとって、日曜日は、一番大切な日です。一番、嬉しい日、楽しい日です。皆さんに会えるからです。でも、一番嬉しく、すばらしいことは、ここでイエスさま、神さまにお会いできるからです。日曜日の礼拝の日は、神さまが天国の喜びを、ここに集う一人ひとりに与えてくださる日です。つまり、主の日、日曜日の礼拝式は、天国にある喜び受けることができる場所なのです。

主イエス・キリストを信じて救われて、神さまの子どもとされた僕たち私たちが、しなければならぬことはなんなのでしょうか。子どもカテキズムの問3に書いてあります。「信じる私たちは、主の日にキリストの教会に来て礼拝をささげ、毎日、神さまにお祈りします。」つまり、今、僕たち私たちがここでしていることです。神さまが一番喜んでくださることです。ですから、私たちにとっても、これ以上の喜びはありません。神さまの子どもとされた人というのは、日曜日に、礼拝をささげる人、お祈りしている人ということです。

「となりのトトロ」の歌の中に、「歩こう、歩こう、わたしは元気。歩くの大好き。どんどん行こ

う。」とあります。先生も、子どもの頃、歩くのが好きでした。皆さんは、どうですか？ それなら、歩くのが楽しいのは、どんなときですか。きっと、お天気の時ではないですか。なかには、雨降りの中、傘をさして、長靴をはいて歩くのが好きなお友達もいるかもしれません。それも楽しいですよ。でも、毎日、雨だったらやっぱり、嫌になると思います。さわやかな晴れの日、どんどん歩けたら、それも海が見えたり、湖が見えたり、緑の林の中や、澄み渡る青空を見上げながら歩いたら元気がでますね。

しかし、それでもまだ何か足りないと思います。何でしょうか。それは、「誰と歩くのか」ということではないですか。元気がでるのは、一人ぼっちで歩くより、大好きなお友達や、お父さんやお母さんと歩くときではないですか。神さまの子ども僕たち私たちは、歩きます。どんどん歩きます。それは、決して一人ぼっちの歩みではありません。イエスさまがいっしょです。イエスさまがいっしょにいてくださるから、歩き始めることができたのです。

一人で歩くのは、どうして嫌なのですか。つま



らないからですね。通いなれた道なら、それでも歩けます。でも、初めて歩く道を、ひとりきりで、「歩くの大好き！」と歌いながら歩けますか？  
きっと、途中で疲れてきてしまいます。だんだん、心配になって来ます。もし日が暮れて、たどり着けないことが分かったら、怖くて泣き出してしまいかもかもしれません。

もう一つ、大切なことがあります。明るく楽しく歩いて行くために、絶対に、必要なものがあります。何でしょうか。それは、行き先です。たとえば、あなたが、お母さんから、お使いを頼まれたとします。行き先や、買うものも聞かないで、お金ももらわないで、「歩くの大好きだから、行って来ま〜す！」とドアを開けて、飛び出して行ったら、どうなりますか。そんな人のことを、「慌て者」って言うのですよね。後で、戻ってきて、「何のお使いだっただけ？」そんなのは、とっても、恥ずかしいでしょう。

ところが、実は、とってもびっくりするのですが、大勢の人たち、大人の人でもありますよ、学校の先生たちや、もしかするとお父さんやお母さんまで、自分がどこに向かって歩いているのか、その行き先を知らなかったり、行き先までの地図をもっていなかったりするのです。それはお使いのことではありません。人生のこと、人間として生きる方向のことです。何よりも、恐ろしくて危険な事は、大勢の人たちが進んでいる太い道が、きっと、自分たちが進んで行けば良い方向、正しい道なんだと、思い込んでしまっているのです。

どんどんどんどん、進んでいるのですが、実は、神さまの目からは、迷子になってさまよっているのです。神さまの目からみれば、「慌て者！」となるのではないですか。

それなら、そんな愚かな人たちを、神さまは知らんぷりなさいますか。いいえ。迷子になっていることにも気づかないまま、さまよって、歩き回っている大勢の人たち。疲れ果て、怖くなって、立ち止まってしまっている大勢の人たち。昔は僕た

ち私たちだって同じでした。けれども、そんな私たちのところに、お迎えに来てくださったのが、イエスさまでした。天のお父さまが、僕たち私たちのところにお送りくださったのです。

そして、僕たち私たちは、このイエスさまのことを、教会で教えてもらいました。教会のことを、お父さんやお母さん、お友達や学校で教えてもらって来ることができるようになりました。そして、今では、イエスさまのことを少しずつ信じ始めて、今朝も、教会に来ることができました。それは実は、イエスさまに迎えに来てもらったということなのです。イエスさまに、「ここがあなたが来なくてはならない場所なのだよ」と連れてきてもらったのです。それが、この教会なのです。イエスさまを礼拝する教会、イエスさまがおられる教会に連れて来てくださったのです。

教会では、賛美歌を歌い、お祈りをし、聖書を読んで、説教を聴いて、神さまを礼拝します。この礼拝は、実は、天国で行われていることを真似しているのです。礼拝は、まるでエレベーターのように天国と通じています。太いパイプで繋がっています。そこから、天国の風、天国の歌、天国の喜びがこの場所に、ビューと吹いてきます。流れ込んできます。

天国におられるイエスさまは、今、イエスさまの霊、聖霊なる神さまを、信じている僕たち私たちの心の中にも注いでくださいます。そのようにして、イエスさまが、わたしの心の中に住んでくださっています。そのようにして、イエスさまは僕たち私たちといっしょに歩いてくださいます。そして、イエスさまがおられる天国へと連れて行ってくださるのです。そのような人は、毎週、日曜日に、天国の窓、天国のドアである教会に来ます。帰ったら、こんどはお家で、お祈りします。そして、イエスさまといっしょに、また次の日曜日と天国を目指してどんどん歩いて行くのです。

(相馬伸郎)

---

[今週の暗唱聖句]      ヨハネの手紙 一 1章7節

しかし、神が光の中におられるように、わたしたちが光の中を歩むなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血によってあらゆる罪から清められます。

〈ねらい〉

教会の礼拝に招かれ、御言葉を聞き、お祈りをし、讃美をしているこどもたちの心の中にはすでに聖霊が住んでいてくださいます。そして、神様のこどもとしてふさわしく歩むために、初めから終わりまで聖霊の豊かな注ぎがあります。それが、聖化の道のりであることを伝えます。

した。覚えているかな？ 毎週、教会に来ているみんなは、間違いなく神様のこどもです。神様のこどもとされているということは、誰に似てくるのでしょうか。そう、神様、イエス様に似てくるのです。顔や姿が似てくるのではなくて、心が神様に似てくるのです。みんなの心に聖霊が注がれて、「神様のこどもらしく生きる」ことができるようになります。

〈展開例〉

みんなは、「お父さんに似ているね、でも目はお母さんににているかな?」「あ、おじいちゃんにも似ているね」なんて言われたことはないですか。そんなふうに言われるのは、みんながお父さん、お母さんとのこどもだからです。先週は教会に来ている人はみんな、神様を「お父さん」と呼んで、神様のこどもとされていますということお話し

〈祈り〉

天の父なる神さま、今日も教会に来ることができてありがとうございます。わたしたちは、自分で「いい子になろう」としなくても、心に聖霊が住んでくださって「神様の子として歩む」ことができるようにされています。神様の恵み、聖霊のはたらきに感謝します。アーメン。

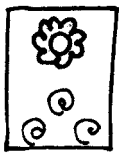
〈やってみよう〉

かんたん **バッグ** をつろう

よいもの

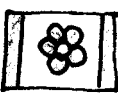
- がようし(ハッパキ)
- シャインテープ (幅広)
- リボン
- ホックキス
- はさみ
- 色えんぴつ
- シール
- セロハンテープ

①




がようしをたひにおき  
おきな えりもようを  
かきます

②




はんぱんにあて  
わきをシャインテープ  
くっつけます

③



リボンをホックキスで  
とめもち手にします。  
ホックキスのしほりの  
上にはセロハンテープを  
はります。



あんしゅうせいカード、  
しゃせきカードなど  
いれてみましょう

**〈ねらい〉**

ぼくたち私たちは、イエス様を信じて救われました。それによって罪赦されて、神によって義と認められて、永遠の命をいただきました。それは、自分がどう感じるのか、そんなことにはいっさい関係のない、客観的な事実です。そして、神の子とされたのです。でも、信仰生活はそこで終わってしまうわけではありません。救いはそこで終わってしまうわけではありません。天国に向かって、イエス様の似姿に変えられていく、完成を目指していく、聖化の歩みをしていくのです。今日はその聖化の幸いについて学びたいと思います。

**〈展開例〉**

ある時、ある立派な大学の学園祭に行ったら、「キセルのやり方公開中」というのがありました。私はビックリしました。だって、その大学は、日本でも有数の有名大学、そこを出た人は日本の中心で立派に働く人が多かったので、こんなことで日本の将来は大丈夫なのかな？と思ってしまいました。

私が、イエス様を信じて出来なくなったことがあります。その一つがキセルです。それまでは、皆がやっていることだからと、別に悪いとも思わずに、平気でやっていました。でも、イエス様を信じた途端に、私はキセルが出来なくなりましたのです。

もちろん、イエス様を信じて、罪が完全になくなったわけではありません。まだまだ、私の心の中には悪い思いがたくさんあります。でも、イエス様を信じる前と後では、確かに心の中が変わってきたということが分かります。今まで、私の心の中には悪い思いがたくさんあり、それが、私の

心を導いていました。でも今は、聖霊を通して、イエス様が私の心の中心に住んでくださり、毎日の歩みを支え、守り、導いてくださるのです。そして、毎日をイエス様と一緒に歩むことができます。

「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです」(ガラテヤ2:20)。

私たちは、イエス様を信じたときに、イエス様が心の中にお入りくださり、私たちの心の中心に住んでくださっているのです。そして、日々、天国への完成を目指して、成長させて行ってください。

もちろん、イエス様が心の中に住んでくださっているからといって、罪に対して10戦全勝というわけにはいかないでしょう。時に誘惑に負けることがあるかもしれません。でも、イエス様を信じる前には、10戦全敗だったのが、今は半分位勝てるようになっているかもしれません。そして、天国に行った時に救いが完成して、罪に対して10戦全勝!! 完全な聖化を与えられるのです。

天国での完成を目指して、歩んで行こうではありませんか。

**〈お祈り〉**

イエス様、ぼくたち私たちは、義と認められただけではなくて、聖化の歩みが与えられていることを感謝します。天国での完成を目指して歩めるように導いてください。このお祈りをイエス様の御名によってお祈りします。アーメン。

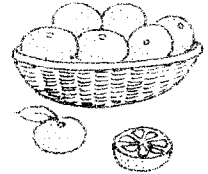


✠ 聖書をひらいて (ガラテヤの信徒への手紙2章19～21節)

み かんぐみは まめに むしを のせ

☆問題：文字をならべかえて、みことばにしてね。

こたえ→ \_\_\_\_\_



✠ 考えてみよう (質問に答えてあげてね！)

☒時々、悪口を言ったり、友達にいじわるをしてしまう時があります。前は、「みんなもしてるし、それがあたりまえ」と思って、なんとも思わなかったけれど、教会学校に行くようになって、それはいけないことだと、思うようになりました。それでも、時々友達といっしょになって、そうしてしまうことがあるけれど、それでもぼくは神さまの子どもですか？ (Oくん・10才)



✠ 言ってみよう

問32  
救われたあなたはど  
うなりますか？

せい  
聖化の歩みを始めます。

問33  
せい  
聖化の歩みとは何で  
すか？

神さまの子どもとして、罪に死に、神さまの御子イエスさまのお姿に○○○○○いくことです。神さまに愛されている喜びのうちに、私たちが神さまを愛して○○○ます。

✠ やってみよう

☆「キリストが、わたしの内に生きておられるのです」(ガラテヤ2：20)

♡ いつ  
♡ どこで

……このみことばは、すごいね！  
どんな時、そう感じたか話してみてね。



✠ 今週の暗唱聖句 (ヨハネの手紙I 1章7節)

しかし、神が光の中におられるように、わたしたちが○○○○の中を歩むなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血によってあらゆる罪から清められます。

## 〈ねらい〉

## 1. 聖なる者に変えられていく。

イエス・キリストは、私たちの罪を赦し、義と認めてくださり、神様の子としてくださった。しかし、それだけがイエス・キリストの救いの御業ではない。さらにイエス・キリストは、私たちの中から実際に罪を取り除き、聖なる者に変えてくださろうとしているのである。イエス・キリストを信じてからの私たちの歩みは、「イエス・キリストによって聖なる者に変えられていく歩み」である。

## 2. イエス・キリストと共に歩む道。

この「聖化の道」は、「イエス・キリストと共に歩む道」である。日々の生活にイエス・キリストが共におられることを認め、この方の恵みと導きの中で生かされる歩みこそ、聖化の歩みである。イエス・キリストとの交わりがないところに、聖化の歩みは存在しない。

## 〈子どもカテキズム〉

問32：救われたあなたはどうなりますか。

答：聖化の歩みを始めます。

問33：聖化の歩みとは何ですか。

答：神様の子どもとして、罪に死に、神様の御子イエス様のお姿に似せられていくことです。

神様に愛されている喜びのうちに、私たちも神様を愛して歩みます。

## 〈展開例〉

## 1. 説教を聞いて教えられたこと・考えたことを分かち合う。

Q. 説教を聞いて新しく教えられたことは？

Q. 分からなかったことは？

## 2. 生徒と一緒に考える。

Q. 「義認の恵み」と「聖化の恵み」の違いはなんだろう？

Q. 「聖化の歩み」は、どのような道だろう？

Q. 何によって聖化されていくのだろうか？



パウロは、偽りの教え(2:4)や生き方(2:18)に惑わされやすい私たちが、神の御心を十分悟ることを願い(1:9)、御子イエス・キリストの素晴らしさを語ります。御子は万物の造り主(1:15-17)、教会のかしら(1:18)。私たちは御子による罪の赦し(1:14)、御子による和解の恵み(1:22)を受け、洗礼によってキリストと共に葬られ、共に復活させられた(2:12)新しい人です。

### 〈キリストにある新しい人の生き方〉(3:1-17)

新しい人はどのように生きるのでしょうか。天にあるもの、上にあるものを追い求める生き方(3:1-4)であり、まず捨てることが求められています(3:5-11)。捨てるのは、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、貪りという古い人の五つの悪徳。最初の四つは性的なことに関係しています。小アジアにあるコロサイはローマ帝国支配下の町で、異教的、世俗的なローマの影響を受けており、以前は、その悪徳の中に埋没し、恥ずべき生き方に平気でした(3:8)。神様に嫌われる悪徳が出てくるのは貪欲(偶像礼拝)からです。ですから、それらを捨てなさい、と命じられます。

そして、神礼拝に生きる者、キリストを崇めて生きる者は、もう全く新しい人です。洗礼を受けた者は、古い人を、その行いと一緒に脱ぎ捨てたのです(3:9)。誰でも、どんな背景の人でも、キリストにあるなら新しい人です(3:11、コリント二5:17)。

### 〈新しい人を着て〉

新しい人は、捨てると同時に、新しい人を着なさい、と積極的に命令されています。その理由は、神に選ばれた者、聖なる者、神に愛されているからです。古い人の五つの悪徳に対して、新しい人の五つの徳目。憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身につけなさい(3:12)。部品交換ではなく、

丸ごと新しい人として生きようとの聖化への招きです。ここにあげられている徳目は、自分自身の力で獲得できるものではありません。聖霊の結ぶ実です(ガラテヤ5:22-23)。御言葉と共に働いてくださる御霊の神様の恵み。聖霊により再生の恵みが与えられ、私たちが恵みの手段(御言葉と礼典とお祈り)を忠実に用いて生きようとする時、神様の恵みとして与えられる約束です。もちろん、お互いがよく知っていることですが、地上に生きる私たちは途上の民ですから、色々な問題が起こります。けれども、その中で、互いに忍び合い、赦し合って生きるのです。赦しが具体的になる所が教会で、無限の赦しが教えられています(マタイ18:21-35)。

### 〈愛の人として生きる〉

そして何といても新しい人の特徴は愛を着ることです(3:14)。パウロは先に五つの徳目を身に着けるように命じたのですが、愛は、先の五つへの追加でなく、愛はすべてを束ね結びつける働きです。五つの徳を実のあるものにするのが愛。愛がなければ一切は無になります(コリント一13章)。愛に生きることができるようになるために、私たちは、十字架と復活のキリストを見上げたい。神様は、滅びて当然な私たちに御子と交換するほどの価値を見いだしてくださいました。御子は命の全てを差し出してくださいました。私たちが、まだ弱かったころ、不信心な者のために死んでください(ローマ5:6)、神と和解、平和を与えられています。そして、そのキリストの言葉が私たちの人生の真ん中に、どっしりと腰を据えて住んでくださるとき(3:16)、どのような状況(パウロは獄中、4:3)にあっても、教会ではもちろん、家庭(3:18-21)、職場(3:22-4:1)でも神様への讚美と喜びが与えられ(3:17)、愛の中を歩めるように主が導いてくださいます。(西堀則男)

## 子どもカテキズム

問32 救われたあなたはどうなりますか。

答 聖化の歩みを始めます。

問33 聖化の歩みとは何ですか。

答 神さまの子どもとして、罪に死に、神さまの御子イエスさまのお姿に似せられていくことです。

神さまに愛されている喜びのうちに、私たちも神さまを愛して歩みます。

参照教理問答 ウェストミンスター大教理問答 問35

先週に続いて聖化を扱う。前週は神による数々の救いの恵みの中で聖化がどう位置づけられるかに焦点をあてた。今週は聖化の歩みそのものが具体的にどういうことなのかに焦点をあてる。

それは表題にもある「愛の歩み」とも言えるもので、次の二点に集約される。一点目は私たちの身に付いた罪をぬぐい取ること、「罪に死ぬ」ことである。神に背を向けた罪の生き方は、自分の身勝手を第一にする生き方であり、エゴとエゴの衝突により自分自身にも他の人々にも痛みと悲慘しかもたらさない。そこからの救いを求めるなら、その元凶たる罪から離れなくてはならない。「罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおも罪の中に生きることができるのでしょうか。」(ローマ6:2) この過程は十字架において罪を負って死なれたキリストと共に葬られること具体化とも言える。

二点目はイエス様のお姿に似せられて、愛に生きる者とされていくことである。罪に勝利されたキリストと共に復活させられること具体化とも言える。イエス様は、「柔和で謙遜」(マタイ11:29)であり、また「仕えられるためではなく、仕えるために……来た」(マタイ20:29) お方であった。

この二点を人間の独力で果たそうとするなら、それは余りに厳しく、決して果たすことのできな

いままで終わるほかない。だがキリストに似る聖化の歩みには、神の深い愛が伴っている。「神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められ」(ローマ8:29) た。そして父なる神様はこの定めを実行される。神様が私たちを愛してくださるからである。神様の愛の後押しのもとで私たちは聖化の歩み、愛の歩みを進めることが許される。コロサイ3:12のみ言葉は勧める。「あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身につけなさい。」

聖化の歩みが始まってしばらくすると、「私は以前よりも罪深く、醜くなっているのでは」と感じ、落胆することがある。だが罪を痛感することも聖化の歩みを進める上で大切な一歩である。それは、以前なら悪いとも思わなかったことを神様の御心に従って悪いと判断できるように神様が私を造り変えてくださったことの現れである。そして神様を愛する思いが私の内に芽生えているからこそ、神様の御心に背いたことを悲しく思うことになったのである。イエス様に似せられていく第一歩として、罪を痛感することも前向きに受け入れていきたい。

(吉田 崇)

テキスト コロサイの信徒への手紙 3章12～17節  
カテキズム 子どもカテキズム 問32、33

### 〔単元のねらい〕

キリスト者の地上の生涯、それは、神に愛された喜びの内に、神を愛し、隣人を愛して生きることです。二つで一つの愛に生きることです。それは、決して自力で実現するものではありません。ただ聖霊の御業です。自力ではありませんが、しかし、聖霊は、私どもの全存在を通して、ご自身のお働きを進められます。そこに私どもの信仰の応答が問われ、出番があります。子どもたちの信仰生活。契約の子、地域の子、それぞれ異なります。年齢によってもまた異なります。また信仰の理解や霊的な感性によっても異なります。分級において、彼らの信仰の歩みを、認め、励まし、導いてください。意地悪な心と戦うこと、愛に生きることが、大人でももちろん厳しい戦いですが、子どもたちも同じ信仰の戦いへと招かれています。慰めが届きますように。

## 「神さまに愛されて歩む」

今日のカテキズムには、「せいか」という言葉が出てきました。「聖」という漢字に、変「化」という漢字でできています。それは、どんなことを言うのでしょうか。それは、イエスさまを信じた人、キリスト者が天国に入るまでの地上での生活、歩みのことです。聖化の「聖」は、神さまの聖さを示しています。つまり、イエスさまを信じて神さまの子どもとされたキリスト者は、神さまの子どもらしく変化して行くということです。聖なる神さま、聖なるイエスさまのお姿、イエスさまが地上を歩まれたような生き方や考え方をし始めて、イエスさまに似せられて行くということです。もちろん、顔や形のことでありません。イエスさまのように歩む新しい生活が始まるということです。しかもそれは、とても自然なこと、当たり前のことです。例えば、人間の赤ちゃんは、必ず人間で、人間になります。猿の赤ちゃんは、猿で、猿になります。神さまの子どもにいただいたキリスト者も、神さまの子どもですから、絶対に、イエスさまに似せられて行くのです。

ウサギとカメのお話を知っていますか。イソップ物語のなかに出てきます。ウサギは、カメがのろまなので、馬鹿にしていました。そこでカメさ

んは、「ウサギさん、競争しましょう」と、提案しました。もちろん、ウサギさんは、勝つに決まっていると自信満々ですから、その話に乗りました。よーいドン。ウサギは、すぐにカメを追い抜いて、姿が見えなくなります。やがて、ウサギさんは、途中で居眠りを始めてしまいます。しかし、カメさんは、ゆっくりゆっくりでしたが、歩き続けて、とうとう、ウサギさんに勝ってしまったというお話です。

先生は、このお話をもとに、イエスさまを信じて歩む聖化の歩みを説明したいと思います。カメさんは、どうして足の速いウサギさんに勝つことができたのでしょうか。反対に、ウサギさんは、どうしてのろまのカメさんに負けてしまったのでしょうか。それは、ウサギさんが、カメさんを見ていたからです。カメさんを見たら、負けるはずないと油断したのです。ところが、カメさんは、ウサギさんを見ていませんでした。カメさんは、ただゴールだけを見つめていました。そして、ゴールに向かって、のろまでも歩き続けたのです。ゴールというのは、どこですか。それは、天国です。イエスさまのおられるところです。先週のお話では、こう言いました。僕たち私たちは今、天国を



目指して歩んでいます。それは、イエスさまが、ゴールが分からなくて、迷子になっている僕たち私たちのところに探して来てくださって、迎えに来てくださったおかげです。だから、今朝も、イエスさまに手を引かれるようにして教会に、礼拝に来ることができたのです。日曜日の礼拝は、聖化の歩みが目指す「一つの、途中の」ゴールです。そのゴールは、毎週毎週、やってきます。近づいてきます。そして僕たち私たちもまた、そこへと向かって、近づいて行くのです。それは、「最後の、永遠の」ゴールであるイエスさまのおられる天国へと近づくことなのです。ここでイエスさまを礼拝している僕たち私たちは、必ず、天国に入れるようにしていただけるのです。

カメは、ウサギを見ません。つまり、ウサギと競争しないのです。カメさんは、神さまから自分に与えられている歩み、人生のゴールを見て歩みます。いったいそれは、どんな歩みになるのでしょうか。それは、自分を愛してくださった神さまに感謝し、そして神さまを愛する歩みです。もしかすると、カメさんは、もともとは、ひとりぼっちで座り込んで、泣いていたのかもしれませんが。いつもウサギさんに馬鹿にされていたからです。こんな風に自分のことを思っていたかもしれませんが。「どうせ、自分なんか、だめだ。ウサギさんのように速く走れっこないさ、どうせだめな人間、だめなカメさ」

ところが、イエスさまを知ったとき、考えが変わってしまったのです。「そうだ、自分は、自分として歩めばいいんだ。自分は、人と比べて歩まなくても、イエスさまがいっしょに歩いてくださるし、イエスさまがおられる場所、天国へ入るために、進めばよいのだ。嬉しいな。楽しいな。感謝だな。こんな自分も、必ず、天国へ入らせてくださるのだ。だって、イエスさまが十字架で死んで、復活して下さって、このわたしを神さまのこどもとしてくださったのだから、だから、走ろう」

そして、このカメさんがゴールを目指して歩むということは、ただ神さまを愛して歩むだけではなくて、なげなげ、天国を目指した聖化の歩みは、イエスさまといっしょに歩く歩みだからです。イエスさまは、いつでも人々を、隣人を愛しておられます。会う人、会う人、イエスさまは、優しくして、親切にして、励ましてあげられるお方です。ですから、もしかするとカメさんは、もったのろまの歩みになってしまうのかもしれませんが。通り過ぎるお友達に、声を掛けてあげるからです。座り込んでいるお友達に、立ち止まって声をかけてあげるからです。イエスさまといっしょに歩くカメさんは、イエスさまがカメさんを愛してくださったように、自分を愛し、自分を好きになって行くのです。そして、自分にできる限りのことをして、イエスさまのお仕事のお手伝いをしたいと思うようになるのです。つまり、お友達を愛することです。もともとからカメさんがよい性格をもっていたからではありません。イエスさまを信じて、イエスさまの愛で包まれてしまったからです。神さまの子どもにされてしまったからです。

イソップ物語では、ウサギさんは眠ったままで、カメさんは横を通りすぎて行きます。けれども、イエスさまといっしょに歩くカメさんならどうするでしょうか。「ウサギさん、ウサギさん、起きて、起きて！あなたも、僕といっしょにゴールを見てください。天国をめざそう！イエスさまといっしょに歩いてください。いっしょに歩きましょう。」起き上がったウサギさんは、ウサギさんらしく、ピョンピョン飛び跳ねながら、ゴールを目指してゆくはずですが。

僕たち私たちもまた、イエスさまに愛され、自分を愛しお友達を愛して生きて行きます。ゴールのイエスさまを見ていると、似せられてしまうのです。それが、聖霊なる神さまのお働き、力です。今、ここで聖書の御言葉、お祈りで豊かに受けているのです。 (相馬伸郎)

---

[今週の暗唱聖句]

ヨハネの手紙 二 6節

愛とは、御父の掟に従って歩むことであり、

この掟とは、あなたがたが初めから聞いていたように、愛に歩むことです。

---

〈ねらい〉

キリスト者の生涯とは、聖霊に導かれ、イエス様をおともだちとして歩む天国に向かう道のりです。それは喜びに満たされ、神を愛し、隣人を愛する力を与えられた、楽しい感謝な道のりです。

〈子ども観〉

幼い子どもたちは、ルールがわかるようになり、トランプなどのゲームができるようになると大変勝ち負けにこだわります。勝つことが絶対で、負けるとかんしゃくを起こしたりするのは普通の姿です。負けることのくやしさを、勝つことの喜びを味わい、学んでいるのです。ですから、競争や勝つことを否定してしまわずに、「人生においては」という想定のお話を進めます。

ここでは、子どもたちがよく知っているイソップ童話「うさぎとかめ」を用いて聖化の道のり、キリスト者が天国を目指して歩む道のりについて

語ります。わたしたちの歩みは他人と勝ち負けを競うものではなく、大切なことはイエス様とともに聖霊に導かれて歩むということを伝えます。

〈展開例〉

今回は、説教展開例が大変参考になります。幼稚科の子どもたちにも理解できる簡便な言葉を用いてお話ししましょう。

〈準備するもの〉

紙芝居「うさぎとかめ」

〈お祈り〉

天の父なる神さま、イエス様がいつもともにいて歩いて行けることに感謝をします。わたしたちが、神様を愛し、おともだちを好きになって楽しんで歩いていくことができますように。アーメン。


〈やってみよう〉

(ひら) かんたん さらまし を やってみよう

よい材料

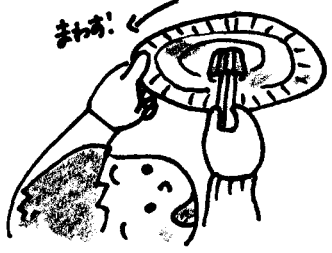
- ・マヨネーズのキャップ
- ・セロハンテープ
- ・かみざら
- ・色えんぴつ
- ・わりばし
- ・または
- ・ながい まち

① かみざらにもようをかきます  
マヨネーズのふたにセロハンテープをうらばりして かみざらにしっかりとつけます



マヨネーズのふた

わりばしを ふたにさいみで まわします



まわす!

出典 たのしい行事と工作 1月のこうぞく  
竹井良郎 小山幸書店

## 〈ねらい〉

ぼくたち私たちは、イエス様を信じて救われました。それによって罪赦されて、神によって義と認められて、永遠の命をいただきました。そして、神の子とされたのです。しかし、信仰生活はそこからが本番なのです。信仰生活は、具体的には神を愛して、さらにその愛によって人を愛していく、そのような歩みなのです。今日は聖化の具体的な側面、神を愛することと人を愛することを学びたいと思います。

## 〈展開例〉

みんな学校や塾でいろいろなお友だちがいると思うけど、どんなお友だちがいるかな？（しばらく聞いてみる……）

大好きなお友だちもいると思うけど、嫌いなお友だちもいると思います。もしかすると、好きでも、嫌いでもない、そんな友だちもいるかもしれません。では、どうしたら、ぼくたち私たちは、嫌いなお友だちを愛することができるのでしょうか。自分の力で愛することができたら、簡単です。でも自分の力ではそれがなかなかできないのです。ではどうすればよいのでしょうか。

「あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたも同じようにしなさい」（コロサイ3:12～13）。

自分の力では、人を愛することも、人を赦すこともできません。大切なことは、イエス様の十字架のご愛を信じることです。ぼくたち私たちのどんなに大きな罪が赦されたのか、そのことを思う

ことです。そのイエス様の大きなご愛が分かれば、分かるほどに、私たちはお友だちを愛して、お友だちを赦して歩むことができるようになります。そして、実はこのような生き方こそが、イエス様がこの地上においてしてくださった生き方なのです。

そして、もう一つ大切なことは、神様を心から愛することです。では、神様を愛するって、どういうことなんでしょうか。

「これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。また、キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです。いつも感謝していなさい」（ver14～15）。

ぼくたち私たちが、もし本当に神様を愛しているならば、それは、お友だちを愛していくことにおいて現れるのです。なぜならば、目に見える兄弟を愛することが出来ないで、目に見えない神様を愛することはできないからです。ぼくたち私たちが本当に神様を愛しているならば、少しずつでもお友だちを愛することができるようになります。でもそれは自分の力ではありません。ぼくたち私たちの心の中に神のご愛が注がれてくるときに、イエス様のように人を愛することができるようになるのです。それが聖化なのです。

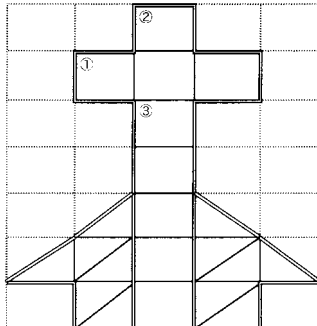
## 〈お祈り〉

イエス様、ぼくたち私たちが、あなたの十字架の愛を心にいただいて、喜んで人を愛していく、そのような歩みをする事が出来るように導いてください。このお祈りをイエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



✦ 聖書をひらいて (コロサイの信徒への手紙3章12節～17節)

☆問題：ことばを入れてください。



ヨコのカギ

①キリストの〇〇〇があなたがたの心を支配するようにしなさい。

タテのカギ

②〇〇を身につけなさい。

〇〇はすべてを完成させるきずなです。

③たがいにしのびあい、せめるべきことがあっても〇〇〇〇〇〇なさい。



✦ 考えてみよう (みんなで、考えてね!)

☒人間の赤ちゃんは人間に、サルの赤ちゃんは(りっぱな!?)サルになります。神さまの子どもはイエスさまに似せられていくというのは本当ですか? どういうところが似るのです? 顔ですか?? (Jちゃん・11才)

✦ 言ってみよう

問32

救われたあなたはど  
うなりますか?

〇〇〇の歩みを始めます

問33

聖化の歩みとは何で  
すか?

神さまの子どもとして、罪に死に、神さまの御子イエスさまのお姿に〇〇〇〇〇〇いくことです。神さまに愛されている喜びのうちに、私たちも神さまを愛して歩みます。



✦ やってみよう 一ワン・ツー・ゲーム—「マネするゲーム」

- ①みんなで丸くなって座ります。ジャンケンで1人を決めて、その人(Aさん)は、外に出て待ちます。その場に残った人は、その間に、リーダー(Bさん)を決めます。
- ②Aさんがもどってきたら、輪のまん中に入ります。初めは手拍子から始めます。リーダーは、Aさんに知られないように、次々と動作を変えていきます。あとの人は、リーダーをよく観察して、遅れないように動作のマネをしてゆきます。Aさんは、動作の変わり目をよく見て、リーダーを当てます。

✦ 今週の暗唱聖句 (IIヨハネの手紙6節)

愛とは、御父の<sup>おきて</sup>掟に従って歩むことであり、この<sup>おきて</sup>掟とは、あなたがたが初めから聞いていたように、〇〇に歩むことです。

〈ねらい〉

1. 「愛の歩み」。

先週学んだ「聖化の歩み」は、その内容から言えば「愛の歩み」と言える。

それは、主イエス・キリストの限りない愛を豊かに受けながらあゆむ歩みである。

また、それは、主イエス・キリストに励まされながら、神と隣人を愛しながら進む歩みである。「愛を受けること」と「愛を与えること」を中心に置いた歩みこそ、聖化の歩みである。

〈子どもカテキズム〉

問32：救われたあなたはどうなりますか。

答：聖化の歩みを始めます。

問33：聖化の歩みとは何ですか。

答：神様の子どもとして、罪に死に、神様の御

子イエス様のお姿に似せられていくことです。

神様に愛されている喜びのうちに、私達も神様を愛して歩みます。

〈展開例〉

1. 説教を聞いて教えられたこと・考えたことを分かち合う。

Q. 説教を聞いて新しく教えられたことは？

Q. 分からなかったことは？

2. 生徒と一緒に考える。

Q. イエス様の愛を受けることなしに、神と隣人を愛することができるだろうか？

Q. イエス様の愛はどのようにして受け取ることができるだろうか？



テキスト マタイによる福音書 28章16～20節

### 〈インマヌエル〉

弟子たちは、主が命じられたとおりガリラヤへと急ぎました。「そこでわたしと会うことになる」と主が言われたからでした。その後、主は弟子たちを祝福されながら（ルカ24:50）、彼らのもとを離れて天へと昇っていかれます（ルカ24:51、使徒1:9）。そこで天へと昇っていかれた主が「雲に覆われて彼らの目から見えなくなった」ととき、この「雲」は空に浮かぶ自然現象の雲ではなくて、かつて幕屋や神殿を覆った神の栄光シェキナーのことでした。ですから主は空高く上方に上がっていったということではなくて、神がおられる天へと昇っていかれたことを意味するのです。まさにこの、弟子たちとの地上での別れに際して、主が弟子たちに語られた言葉こそ、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」という、主の臨在の約束でした。

考えてみればこれは奇妙なことで、ここで主は弟子たちと離れてしまうわけですから、別離の言葉があつてしかるべきですのに、主は「あなたがたと共にいる」と言われるのです。しかも「世の終わりまで、いつも」です。この約束をどう理解したらよいか、理解に苦しむことですが、ルカが福音書と使徒言行録で記すように、それは主が天に戻られることで主によって派遣される聖霊と関係があります。主は、体においては天に行かれ、体においては私たちと別れ別れですが、霊において共にいてくださり、霊によって私たちのもとに今も臨在しておられるのです。主は天に帰られることで、「天と地の一切の権能を授か」りました（エフェソ1:20-21）。しかしその権能は、単なる一般的なものではなくて、「キリストをすべてのものの上にある頭として教会にお与えになり」（同22）とあるように、私たちのために行使され、発揮される権能なのでした。そしてこの力ある主権の神が、私たちと共に、いつまでも永遠にいてく

ださるといふ約束が、この宣言なのです。

マタイ福音書が明らかにする主イエスとは、そのような方でした。マタイは、最初の方でこの方がインマヌエル、つまり「私たちと共におられる神」であることを明らかにします（1:23）。そしてその方が最後に約束されることこそ、「わたしはあなたと共にいる」ということでした。こうしてマタイは、最初と最後をこのインマヌエルで囲み、枠づけることで、ここで語られる主イエスという方がどういう方であることを明らかにしていったのでした。

それは、神が高い天に鎮座ましまし、地上をはいづくばるようにして生きる私たちを上から哀れに見やる方ではなくて、まさにこの地上にまで来てくださり、そうして私たちと共にあろうとして、ご自身の方から私たちのもとにおいでくださり、そうして「共に」いてくださろうとした救い主であるということです。私たちと共にあるために、地上にまで降り来たり、人間にまでなってくださった主が、聖霊によってこれからもずっと、永遠に私たちと共にいてくださるといふのです。

主イエスは、どこまでもご自身をへりくだらせて、私たちのもとにまでおいでくださり、インマヌエルであろうとしてくださる恵みの主です。「わたしはあなたがたと共にいる」と約束される主の臨在は、立派なわたし、信仰深く役に立つわたしではなく、役に立たず、信仰も浅く、どこまでも弱くて罪深い、そのわたしと共にいてくださるといふ約束です。立派になったら、一緒にいるようにしようという約束ではなく、迷い出たままのわたしを、主の方から捜し出し、招き寄せて、共にいてくださるといふことなのです。その恵みの主が、私たちとも「共に」いてくださるのです。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と。  
(三川栄二)

## 子どもカテキズム

問34 だれと歩むのですか。

答 わたしはひとりぼっちではありません。

私たち、神の民の祈りの家、キリストの体なる教会と共に歩みます。

参考教理問答 ウェストミンスター信仰告白25章

**〈キリストはどのように共にいてくださるのか〉**

私たちは救われて後、地上にある間、聖化の歩みを進める。ではこの歩みは一人ぼっちで行なうものなのか。いやそうではない、教会と共に、というのが問34である。ここでは今週の「主イエスと共に」及び次週の「聖徒の交わり」の二回にわたって扱う。

イエス様は復活された時に「わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ28:20）とおっしゃった。だがイエス様はその後もまもなく昇天された。そうなるキリストが今日どのように私たちと共におられるかが問われる。そこで注目したいのが、「二人または三人が私の名によって集まっているところには、わたしもその中にいるのである」（マタイ18:20）というみ言葉である。イエス様はなぜ複数の兄弟姉妹が集うところに共にいる、とおっしゃるのだろうか。それは聖書の信仰が共同体の信仰だからである。旧約時代は神の民イスラエルを形成させて信仰を受け継がせた。新約時代になると「新しい神の民」として教会を形成させ、「神の家族」たる兄弟姉妹としてキリスト者を導かれる。そしてキリストによる救いの完成について、聖書は「あらゆるものが、頭であるキリストのもとに一つにまとめられます。」（エフェソ1:10）と語る。

**〈個人的な信仰ではなく〉**

人がキリストの救いにあずかるまで、人は父なる神様のもとで一つにまとまらず、「自分さえよければ」という自己中心、個人主義の心を起こして墮落した。その結果対立と分裂、それに伴う罪

と悲惨に陥った。救われて聖化の歩みへと踏み出した私たちにも自己中心の誘惑、共同体を軽んじる誘惑は迫ってくる。

今から150年ほど前の江戸時代末期以降に日本に来てプロテスタントの信仰を伝えた宣教師たちは、信仰復興運動（リヴァイヴァリズム）の影響を受けていたと言われる。この運動は「一人ひとりに」聖霊が降されたこと、一人静かに神と交わることを強調した。それによって日本の教会では信仰や救いが神とわたしの対一という個人レベルに傾き、共同体、神の民という観点が弱まったと指摘されている。

聖霊が救われた一人ひとりに降されたことは聖書も語っていることである。だが聖霊はキリストの霊でもある。聖霊について、コリントの信徒への手紙一12章13節は、一人のキリストのもと、私たちを一つの体に結び合わせる一つの霊であると語っている。（この点は次回掘り下げる。）そうなる聖霊に導かれて行なう祈りも神とわたしの対一でだけ行なうものではなくなる。イエス様は祈りについて、教会に集う兄弟姉妹のうち「二人が地上で心をつにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる」（マタイ18:19）とおっしゃっておられる。イエス様はその根拠として18章20節の言葉を語られた。つまり祈りは個人だけで行なうことでなく、祈りの家である教会において、兄弟姉妹と共に、神の家族、教会共同体のために心をつにして祈ることである。そこにキリストは共にいてくださり、天の父なる神様にとりなして下さって、祈りはかなえられる。（吉田 崇）

テキスト            マタイによる福音書 28章16～20節  
 カテキズム        子どもカテキズム 問34

### 〔単元のねらい〕

主題とカテキズムに共通する鍵語は「歩む」である。この日本語表現は、「歩く」という動作の他に、「自分の意志（時の流れ）に従って進路を決定する」という知的営みを含む。この単元で扱うのは、明らかに後者の意味での「歩み」であって、それを「聖化の歩み」として、即ち「洗礼と信仰告白という進路をたどる歩み」として、特に「キリストが共にいてくださる歩み」として、幼児洗礼を受けた子にも、未受洗の子にも、教え導くことが求められる。

## 「イエスさまとあゆみたい」

みなさんにひとつ、聞いてみたいことがあります。お馬のあかちゃんを、見たことがありますか。それも、生まれたばかりの、お馬のあかちゃんです。どんなようすでしょうか。……そうですね。生まれてすぐに、立ち上がろうとしますね。おかあさん馬の見てるまえで、ふらふらしながら、細い足を一生懸命のぼして、何度も何度も失敗しながら、自分の足で立ち上がろうとします。それを見ていて、みなさんは、どんな気持ちになりますか。……そうですね。応援したくなりますか。いつの間にか、手のひらをにぎりこぶしにして、がんばれ、がんばって、大声を出したくなるかもしれませぬね。そこでついに、お馬のあかちゃんが立ち上がったら、どうしたいですか。……やっぱりね。褒めてあげたいですね。やった一、きみはスゴいなあ、本当によくがんばったね。そんなふうに、声をかけてあげたくなりますよね。

おかあさんから生まれて、自分の足で立ち上がろうとする、そんなあかちゃんの姿は、まわりの人の心をひきつける力があります。それは、どうしてでしょうか。……私はこう思うのです。お馬のあかちゃんは、何もしゃべりませんが、気持ちがつたわってくるのです。僕は（私は）、おかあさんの子なんだ。おかあさんのように、自分の足で立ち上がるんだ。おかあさんと一緒に、いっぱい歩きたいんだ。そんな気持ちが、あかちゃん馬のからだ全体から、特にあの大きく丸く見ひら

いた目から、ピンピンつたわってくるのです。あのような強いつよい気持ちを、お馬のあかちゃんに与えてくださった神さまは、なんてすばらしいんだろう。そんなふうに、いつも思うのです。

そこでもうひとつ、聞いてみたいのですが。みなさんは、自分が生まれた日のこと、そして立ち上がった日のこと、おぼえていますか。……無理ですね。では、その日のことを、おぼえてくれる人、誰かいますか。……おかあさん、おとうさん。そう、よかったですね。おねえちゃん、おにいちゃん。そう、うれしいね。おばさん、おじさん。そう、すばらしいな。あかちゃんだったみんなことを話す人たちは、どんな顔をしていますか。……ニコニコなわけではありませんか。そうですね。

自分が生まれた日のことを、まわりの人がおぼえていてくれる。いつもいつも、見つめていてくれる。眠っているときも、守ってくれる。おなか为空いた時は、食べさせてくれる。寝返りうてるようになっただけで、大喜びしてくれる。お座りできるように、手助けしてくれる。つかまり立ちできるように、励ましてくれる。そしてついに、自分の足で立ち上がった時、

いっぱいいっぱい褒めてくれる。そんなふうに、みんなは愛されてきたんだと、思います。

どうしてそんなに、愛されるのでしょうか。……それは、神さまがそうさせておられるから、なの



です。人間は、生まれてすぐに立ち上がることができませんから、どうしてもまわりの人からの愛が必要なのです。それで、まわりの人をそうさせてしまう力を、神さまはあかちゃんに与えてくださるのです。それは、生きようとする力、立ち上がろうとする力、歩みだそうとする力です。そんな強いつよい力が、まわりの人につたわるから、みんなは愛されるのです。その愛があるから、みんなは立ち上がって、歩みだすことができるのです。

今日みなさんに、知ってほしいことがあります。生まれて、立ち上がって、歩みだす。このすばらしいことを、みなさんは、もう一度体験することになる。いや、もう始めている。このことを、知ってほしいのです。おかあさんのおなかの中にもどって、そこから生まれなおす、のではありません。そうではなくて、神さまの子どもとして、新しく生まれる。教会の子どもとして、自分の足で立ち上がる。神さまのひとり子・私たちの主イエスさまのしもべとなって、みんなと一緒に歩みだす。そのように導かれていることを、信じてほしいのです。

私たち人間が、もういちど生まれること、神さまの子どもとして新しく生まれること、このすばらしい出来事を、目で見ることができます。それは「洗礼」です。そして、教会の子どもとして、生きる力をいただいて、勇気をだして立ち上がること、みんなで助けあって歩みだすこと、そのすてきな出来事も、目で見ることができます。それが「信仰告白」なのです。私たちの洗礼と信仰告白のために、イエスさまはこの世においでくださいました。

十字架の死のあと、墓から復活なさったイエスさまは、こうおっしゃいました。「わたしは世のおわりまで、いつもあなたがたとともにいる」と。世界が終わる時まで、私たちから離れないで、一緒に歩いてくださると、約束してくださったのです。このみことばを最初に聴いたのは、あの11

人でした。ひとり死んでしまったので、12人ではなくなっていました。その11人は、人間としては大人でしたが、神さまの子どもとしては生まれたばかりで、立ち上がって歩みだしたものの、躓いて倒れてしまったのです。

11人のひとり、バルヨナ・シモンはかつて、湖で魚をとる漁師でした。ある時、兄弟アンデレの紹介でイエスさまと出会い、「あなたをケファ（ペトロ、すなわち岩）と呼ぼう」と新しい名前をいただき、「人間をとる漁師にしよう」と新しい仕事に召されて、「天の国は近づいた」と宣べ伝える使徒に選ばれました。イエスさまにつき従い、信仰を告白しました。「イエスさま、あなたは生ける神の御子キリストです。」こうして、シモンは神の子どもとして生まれ、使徒ペトロとして立ち上がり、歩みだしたのです。

ところが、イエスさまが逮捕されると、「イエスなど知らない」と言い、イエスさまが十字架につけられると、見捨てて逃げてしまいます。そんなシモン・ペトロを、イエスさまは愛してくださいました。その愛がなくなることを証しするために、死者の中から復活さなうって、声をかけられたのです。「シモンよ、わたしを愛するか、わたしの羊を飼いなさい」。もう一度、使徒ペトロを立ち上がらせ、歩みださせて、約束してくださったのです。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいる」。

みなさんも今、洗礼を受けて信仰を告白する道を、イエスさまと一緒に歩んでいます。途中で、つまずくこともあるでしょう。時には、倒れることもあるでしょう。でも、安心してください。イエスさまの愛は、決してなくなりません。その証しとして、聖霊を注いでくださるでしょう。僕は（私は）、神さまの子どもなんだ。教会の子どもとして、自分の信仰で立ち上がるんだ。主イエスさまの僕として、歩いてゆきたいんだ。その強い気持ちには、必ずかなえられるでしょう。

(二宮 創)

---

[今週の暗唱聖句] 詩編 119編9節

どのようにして若者は歩む道を清めるべきでしょうか。

あなたの御言葉どおりに道を保つことです。

---

## 〈ねらい〉

聖化の道のりは、天国を目指す一人ぼっちの歩みではありません。キリストの体なる教会とともに歩む道のりです。こどもたちにとっては信仰を告白し、洗礼を受ける道のりでもあります。

## 〈こども観〉

主イエス＝キリストを頭とする教会とともに歩むと言っても、こどもたちにはピンとこないかもしれません。神様に愛されて教会に招かれているこどもたちは、「光の子」と言われ、「教会の子」でもあります。自分が「〇〇幼稚園、△△くみさんの、だれだれです」ということは、理解しているこどもたち。「〇〇教会のだれだれです」ということは、もっと感謝なことなのです。小さくても、教会の一員として神様にも教会員にも存在を認められて、教会と共に歩む民です。教会に来るのは日曜日だけではなく、24時間、ずっと教会の民なのです。

こどもたちが「〇〇教会のだれだれです」と教会の群れに加えられていることを、感謝をもって言えるようになりますように。

## 〈展開例〉

先週は「うさぎとかめ」のお話を聞きましたね。

覚えているかな。わたしたちは、イエス様と一緒にうさぎさんやかめさんのように、一步一步天国を目指して歩いて行くことを知りましたね。今日は、もう一度「うさぎとかめ」のお話をします。

(紙芝居「うさぎとかめ」を見せる)

わたしたちは、神様が「こっちがゴールですよ」と招いてくださる道のりを、天国を目指して歩んで行きます。天国までは、一人ぼっちで歩いていくのかな？ イエス様という最高のお友だちと一緒にです。それだけでなく、一緒に励ましあって歩む人たちがいます。イエス様が真ん中に来てくださって、イエス様を信じている人たちが集まっているところって何でしたか？ そう、教会です。神様は教会全体でこの道のりを歩いて、天国にいらっしゃいと招いていてくださるのです。

## 〈準備するもの〉

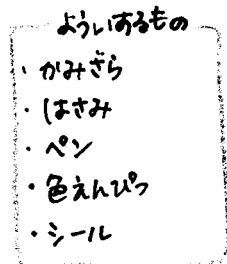
紙芝居「うさぎとかめ」

## 〈お祈り〉

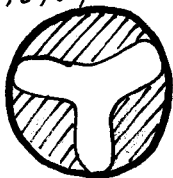
天の父なる神さま、わたしたちがひとりぼっちでなく、教会のみんなと一緒に歩んで行くことを感謝いたします。この道のりの途中で「イエス様を信じます」と言うことができますように。アーメン。

## 〈やってみよう〉

## 紙皿で らくらくゲーム



つくりかた  
① しやせんのぶいぶんを  
きりとります



② もようをかきます



＊なげるときは、立てもち ストップをかきかせてふりおろすようにないます  
外で元気よくとほして みよう！

出典 Piccolo 2003.2 学研

## 〈ねらい〉

ぼくたち私たちは、イエス様を信じて救われました。そして、罪赦されて、永遠の命をいただきました。さらに、神の子とされ、聖化の歩みをこの地上においてしていくのです。そのときに、私たちは一人ぼっちで聖化の歩みをするものではありません。イエス様がいつもともにいてくださり、一緒に歩いてくださり、その聖化を完成させてくださるのです。

## 〈展開例〉

マザー・テレサという、インドのカルカッタで「死を待つ人の家」という施設をつくって、路上で体を弱めてただ死を待っている人に様々な援助を与えた人が、ある時に、こう言いました。「今、世界で一番大きな病気は、癌でもなければエイズでもない、『私は一人ぼっちだ。誰も自分のことを受け入れてはくれない』。このように考えることだ」と言いました。私は一人ぼっちだ、このように考える人はたくさんいるかもしれません。でもイエス様は、ぼくたち私たちがいつもともにいてくださるのです。

「あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(ver20)。

信仰生活は、イエス様を信じて、救われて終わるわけではありません。むしろそこから本当の信仰生活です。イエス様の似姿に変えられていく、天国での完成を目指しての、聖化の歩みを歩いていくのです。そして、その聖化の歩みを、ぼくたち私たちが、一人でしていくのではないのです。

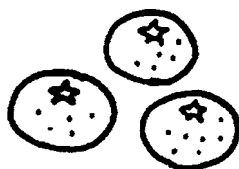
イエス様がいつも共にいてくださって、聖化の歩みを完成させてくださるのです。私たちは一人ぼっちではありません。

もう一つ、大切なことは、聖化の歩みは、教会での交わりの中で、お友だちとの関係の中で進んでいくものなのです。

「イエスは、近寄って来て言われた。『わたしは天と地のいっさいの権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け』」(ver18～19)と、聖書は言っています。聖化の歩みは、教会に行き、礼拝に出て、お祈りをして、賛美をして、説教を聞いて、教会で交わりをする中で、進んでいくものなのです。そういう意味で、ぼくたち私たちが決して一人ではありません。信仰生活は大変で、「もう教会に行くのをやめようかな」、「神様がいるのにどうしてこんなことが起こるのかな?」、いろいろと悩んでしまうことがあります。でも、そんなときに、教会にいるお友だちが、兄弟姉妹が、いつも支えてくれるのです。ぼくたち私たちが一人ぼっちではありません。聖化の歩みは、イエス様と一緒に、教会の交わりの中で進んでいくのです。

## 〈お祈り〉

イエス様、ぼくたち私たちが、聖化の歩みを一人でするわけではありません。イエス様と一緒に教会の交わりの中ですることが出来ることを感謝します。イエス様いつもともにいてください。このお祈りをイエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



### ✠ 聖書をひらいて (マタイによる福音書28章16節～20節)

↓ 題：①弟子(デ・シ)の字を探して、黒く(マスのスミまでキ

デ	イ	ッ	デ	シ	シ
デ	シ	テ	チ	デ	イ
シ	ワ	キ	デ	シ	シ
タ	デ	シ	カ	デ	エ
。	レ	テ	ヨ	シ	デ
デ	シ	デ	シ	ハ	ス

チンと)ぬってください。

→黒く浮き出た文字は？

(うす目をするとうよく見えるヨ。カタカナ3文字)

「いつもあなたがたと〇〇〇いる」

②残った文字を↓の方向に読んでください。

正しいのはどっち？

・イエスは、ちかって いわれた。

・イエスは、ちかよってきていわれた。

### ✠ 考えてみよう (みんなで、考えてね！(\*^\*)v)



☒学校のクラスの中でも、家族の中でも、教会に来ているのは私だけです。だから、教会学校でイエスさまの話を聞いたり、みんなといっしょにお祈りができることがうれしいです。これからもずっと教会に来たいのですが、家族の反対もあります。どうしたらいいですか？(Tちゃん・12才)

### ✠ 言ってみよう

問34

だれと歩むのですか？

わたしは一人ぼっちではありません。

わたしたち、神の民の祈りの家、キリストの体なる教会と〇〇〇歩みます。



### ✠ やってみよう —ワン・ツー・ゲーム—「みんなで歩けば、ゲーム」

①(分級のお友達の数-1)本の、ヒモ(できたら、はち巻きなどの布製)を用意して、全員で、

二人三脚ににんさんきゃくのように、足をしばります。②肩を組んで、「右、左、右、左……」とかけ声をかけて歩い  
みよう。最初はむずかしいかもしれないけれど、かけ声をかけながら、歩ける(走れる)になっ  
たら、みんなと気持ちが一つになってうれしいね。

☆わたしたちも、神さまの応援を受けて、天の国(ゴール)を目指して、教会の仲間と共に歩みます。

### ✠ 今週の暗唱聖句 (詩編119編9節)

どのようにして若者は歩む道を〇〇〇〇たもべきでしょう  
か。あなたの御言葉どおりに道を保つことです。

## 〈ねらい〉

## 1. キリストと共なる歩み。

聖化の歩みは、キリストと共なる歩みである。キリスト者の生活は、キリストと共に生きる生活である。マタイ福音書の最後で語られるイエス様の約束（みよ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる）は、絶対的な慰めと力と勇気を与えてくれる。

## 2. キリスト者の歩む道。

イエス・キリストがこの約束を与えてくださったのはなぜか。それは、キリスト者の歩む道が、イエス・キリストが共にいてくださらなければ一歩たりとも進むことができないような道だからである。キリストが共にいて、慰め・力・勇気を与えてくださらなければ、私たちはたちどころに「罪の道」を再び歩み始めるだろう。

## 〈子どもカテキズム〉

問33：聖化の歩みとは何ですか。

答：神様の子どもとして、罪に死に、

神様の御子イエス様のお姿に似せられていくことです。

神様に愛されている喜びのうちに、私たちも神様を愛して歩みます。

問34：だれと歩むのですか。

答：私はひとりぼっちではありません。

私たち、神の民の祈りの家、キリストの体なる教会と共に歩みます。

## 〈展開例〉

## 1. 説教を聞いて教えられたこと・考えたことを分かち合う。

Q. 説教を聞いて新しく教えられたことは？

Q. 分からなかったことは？

## 2. 生徒と一緒に考える。

Q. 私たちが歩む道は、誰と一緒に歩む道だろうか？

Q. なぜキリストは、「共にいる」という約束を与えてくださったのか？



## 〈からだと部分〉

パウロは、教会を「キリストの体」として（エフェソ1:23）、身体になぞらえますが、それは意味深いです。そこでは、わたしたちが主イエスとどのような関係を持っているか、そしてお互い同士がどのような関係の中にあるかを豊かに表しているからです。「あなたがたはキリストの体であり、また、一人ひとりはその部分です」とあります（27）。「わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです」とも語られます（ローマ12:4,5）。そこで言われることは、「わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っていますから」、その賜物を生かして、互いに仕え合うようにということです（同6-8）。そしてそのための賜物は、「一人ひとりに分け与えられている」というのです。「わたしたち一人ひとりに、キリストの賜物のはかりに従って、恵みが与えられています」（エフェソ4:7）。「霊は望むままに、それを一人ひとりに分け与えてくださるのです」（11）。そこで大切なことは、それらの賜物は、「全体の益となるため」のものであるということです（7）。賜物とは、自分を喜ばせるためのものでも、自己満足のためのものでもなくて、「全体の益」のためであり、「キリストの体である教会」を建て上げていくために用いられるべきものとして、一人ひとりに与えられたものでした。

だから「体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています」とあるように、一つの体は「多くの部分」から成り立っており、そこではそれぞれに固有の務めを担っているものであり、体はそれらの多くの部分を必要とするのです（14-22）。頭だらけの体、手ばかりの体では、体として成り

立ちません。体には、頭だけではなく、手も足も目も様々な部分が必要です。自分は手になりたいとって、手ばかりの体になったのでは困ります。神は、教会が一つの体として建て上げられるように、そこに多様な部分を担う人々を召し出し、役割を与え、それに必要な賜物を与えられました。そこではいろいろな働きが必要とされており、またそういった多様な働きにおいて、教会は一つの体として造りあげられていくのです。そしてその多様な部分は、それぞれに固有の役割を与えられていると共に、そこでは互いが互いを必要とするのです。ひざを擦りむいて痛むのに、手が別の所をさすっても意味ありません。弱っている部分を互いに助け合う、そうして互いに組み合わせられていくのです。その時痛んだひざを足がさすことはなく、鼻がこすこともなく、手がそれをします。そこで手はいつも自分ばかりがそうすると文句を言うべきではありません。それが手に固有の務めだからです。足や鼻には別の役割が任されているのです。

そのことをわたしたちの文脈で考える必要があります。わたしはいつも人助けばかりで、あの人はちっとも助けようとしないと不満を言うべきではありません。たとえば、わたしにはいつもこのような奉仕ばかりが任されて面白くないとか、あの人がばかり良い役目を与えられ、用いられてばかりでおかしいではないかというように考えないことです。わたしには、そのような務めが与えられているとしても、別の人には別の働きが任されているからです。それぞれに固有の務めがあるのです。「神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました」（28）。そうして互いが別々の働きを担い、固有の務めを果たすことで教会が一つの体として形成されていくことになるのであり、そこでは、別の働きをする別の存在を、互いを必要としあっているのです。（三川栄二）

## 子どもカテキズム

問34 だれと歩むのですか。

答 わたしはひとりぼっちではありません。

私たち、神の民の祈りの家、キリストの体なる教会と共に歩みます。

参考教理問答 ウェストミンスター信仰告白25章

ウェストミンスター大教理問答 問64～66

今回は「キリストの体なる教会」という観点から学ぶ。

私たちが救われた時、聖霊によりキリストと結合させられ、救いの恵みをいただくことになった。だがこの結合は教会と離れたところで、個々の信者とバラバラに行なわれるのではない。聖霊は多くの人々に下されるのであるが、一人のキリストから注がれる一つの霊であり、一つの体へとまとめ上げることを目指すものである。(コリントー12:13)

教会には実に多種多様な方々が集いつつ、一つにまとめられる。このことについてパウロは、コリントの信徒の手紙一12章において、人間の体の全体と各部分になぞらえつつ説明した。「体は、一つの部分ではなく、多くの部分からなっています。」(コリントー12:14) 体に手、足、目、口など様々に違った部分があるように、相互に違いのある私たちはキリストの体の各部分として結び合わされて用いられることになる。

ところで自分と違いのある人々と手を携え続けることは決して簡単なことではない。お互いの違いから衝突して心くじけることもある。そこでともすれば自分と波長の合う人とだけ共に生きたいという誘惑に襲われる。それは体の全てを一つの部分だけにしてしまおうとするもので、「すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というものがあるでしょう。」(コリントー12:19) とパウロは戒める。

そして21節以下では、自分では必要ないと思

える部分も、神様はキリストの体を建て上げるために必要な部分としておられることを説く。とりわけ、弱く見える部分、見劣りすると思われる部分こそ体全体にとって必要とされ、いっそう引き立たせて組み立てられている。こうして体の各部分は配慮し合い、一つの部分のために共に苦しみ、共に喜ぶ体となる、とパウロは語る。

そもそも人間は一人でどんなことも万能にできるような存在ではない。神様は賜物の全てを一人の人に集中的にお与えになることはなさない。その結果、個人のレベルでは「わたしにはAがある、でもBやCはない」ということになる。こうした神様の配剤を神様抜きで思いめぐらし、また神様を離れて自分を他人と比べるならば、そこには過度の思い上がりか、過度の自己卑下しか生じない。そして自分に欠けていると見えるところを己の力で埋め合わせようとするのだが、それは果たされることがないからいつまでも苦しむことになりかねない。

だが、キリストの体である教会において、体の各部分として互いを結び合わせてくださる神様のもとに立って考えるとき、わたしに足りない部分、できない部分は他の兄弟姉妹がよく補ってくださる、わたしは神様が現に与えてくださった賜物で満足し、教会において用いて生きていけばよい、というところに至る。このとき、私たちは無理な背伸びをして生きることから解放される。

(吉田 崇)

テキスト            コリントの信徒への手紙 一 12章12～26節  
 カテキズム        子どもカテキズム 問34

### 〔単元のねらい〕

洗礼から信仰告白への進路を主イエスと共に「歩む」ことを扱った前週に続いて、同じカテキズムを掲げる今週は、キリストの体の一部分とされて体全体で「歩く」ことに注目させる。歩く動作は、頭と体の主従関係を前提に調和のとれた運動によって成り立つ。キリスト者は、一つの頭・一つの霊に結ばれた一つの体である教会の一員として、与えられた役割を自覚し、全員一緒に歩いてゆくため、互いに奉仕する。これを「聖徒の交わり」として教え諭したい。

## 「みんなであるいてゆこう」

この朝、目がさめて、顔あらって、ごはんを食べて、身じたくして、家からでかけて、教会に行くまで、あなたはさて、何歩あるいたでしょう。……そんなの憶えてない。そうでしょうね。歩くことのできる人は、そんなのあたりまえのことで、どんなにたくさん歩いたかなんて、憶える必要もないでしょうから。では、もしもあなたが、歩くことのできない人だったら、どうでしょう。元気に歩いていたのに、ある日とつぜん、歩けなくなってしまった人だとしたら。それとも、生まれてから、まだ一度も歩いたことのない人だとしたら、どうでしょう。……そんなのあり得ない。そうかもしれません。いきなり歩けなくなった自分なんて、想像できないかもしれません。もともと歩けない自分なんて、考えたくないかもしれません。そんな時こそ、歩くことの素晴らしさを思う、歩けることの不思議さを考える、またとないチャンスなのかもしれません。

歩くこと、そのためには、何が必要ですか。……それはもちろん、足ですよ。それも、右と左の両足が必要です。それでは、両足さえあれば、歩くことができますか。……できません。腕も必要です。右足をまえに出すときは、右腕をうしろに振る。左足を踏み出すには、左腕をうしろに引く。両足と両腕を、右と左、たがい違いに振り分けることで、バランスよく歩くことができます。しかも、目や耳、かかとやつまさき、そこから伝

わってくる感覚をたよりにして、タイミングよく歩くことができるのです。そんなこと、いちいち考えながら、わたしたちは歩いているのでしょうか。……いいえ、考えなくても、自然にそうしているのです。

これは、考えてみれば、とても不思議ではありませんか。あなたもわたしも、自分は歩くんだと、思っただけで歩いているのですが、両手も両足も、目も耳も、かかともつまさきも、互いに素晴らしいバランスとタイミングで、それぞれの役目を自然に果たしているのです。自分では、いちいちそうしようと思わなくても、「からだ」全体が、調和のとれた運動をしているのは、いったいどうしてでしょうか。何がそうさせているのでしょうか。……そうです「あたま」です。そして「いのち」です。左のむねに、手をあててごらん下さい。心臓がドキドキしてますね。その心臓にむかって、止まれ、とどんなに命令しても、心臓は動きつづけます。胃腸も、そのほかの内臓もそうです。骨や関節や筋肉にも、「からだ」を成り立たせているすべての部分には「いのち」があって、毎日まいにち、栄養が届けられているのです。そして、歩くというひとつの動作をするために、「からだ」のすべての部分は、たがいに支えあい、補いあいながら、素晴らしいバランスを保ち、絶妙なタイミングを計りながら、それぞれの役割をちゃんと果たそうとするのです。そうさせているのは「あ



たま」、すなわち脳と神経です。わたしたちの思いとは別に、「からだ」全体を保つため、脳はすべての「部分」に神経を廻らせ、それぞれの必要に応じているのです。そして、わたしたちの考えに沿って、バランスよく、タイミングよく歩かせるために、「からだ」のすべての「部分」に命令を発しているのです。歩くことは、あたりまえのことでしょうか。……いえいえ、それはとても不思議なこと、ほんとうに素晴らしいこと、神さまのなさることにほかなりません。

みなさんに知ってほしいことがあります。それは、教会学校の、この礼拝の集まりが、ひとつの「からだ」なのだ、ということです。イエスさまを「かしら」とする、調和のとれた「からだ」なのだ、ということです。わたしたち一人ひとり、その「からだ」を成り立たせている、大切な「部分」なのだ、ということです。あなたがいなければ、この「からだ」は成り立ちませんし、元気に歩くこともできないのです。わたしたちは、互いに相手を大切にしながら、それぞれ自分の役目を果たすことで、はじめて一緒に歩くことができる、ということです。

聖書には、こう記されています。「からだはひとつでも、多くの部分から成り、すべての部分は数多くても、からだはひとつであるように、キリストのからだも同じです。わたしたちは、ひとつの霊によって、皆ひとつのからだとなるために洗礼をうけ、皆ひとつの霊をのませてもらったのです。神は、ご自分の望みのままに、からだに、ひとつひとつの部分置かれたのです。それで、からだに分裂が起こらず、各部分が互いに配慮しあっています。ひとつの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、ひとつの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。」(コリント一12章より抜粋)……「ひとつのからだは多くの部分から成っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、わたしたちは、与えら

れた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っています。教える人は教えに、勧める人は勧めに、精を出しなさい。施す人は惜しまず施し、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は快く行いなさい。」(ローマ12章より抜粋)

このみことばを記したのは、パウロという人でした。ユダヤ人として生まれ、ローマ市民として育ち、律法を熱心に学んで、それを忠実に行う人でした。そして、キリスト教という新しく興った宗教を目の敵にして、キリスト信者を徹底的に迫害する人でした。十字架にかかって死んだイエスはよみがえった、この方こそ生ける神の子キリストである。そんなことはとても信じられなかったし、人間を神様と呼ぶような宗教を絶対に許すことができなかったのです。パウロという人は、賢くて正しい人でしたが、人間の愚かさや過ちを赦すことができない人でもありました。

そんな彼が、ある時、天からの光に打ちのめされて、不思議な声を聞いたのです。「サウル、サウル、なぜわたしを迫害するのか。わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」賢さと正しさは打ちくだかれ、彼は自分の愚かさや過ちに気づかされました。こんな罪人を赦し、清め、用いてくださる復活のイエスこそ、わたしの神・主である。そう心を入れかえたパウロは、他人を裁く人から赦す人に、キリスト教の迫害者から伝道者に変えられたのでした。

わたしもあなたも、愚かさや過ちをあわせ持つ罪人です。しかし同時に、イエスさまによって赦され、清められ、用いられるキリスト信者に召されています。赦された罪人として、互いに赦しあう。清められ、用いられる器として、互いに尊び敬う。ここに「キリストを頭にいただく体、聖霊の命にあふれる体」があります。ここから、天国に向かって、わたしたちはみんな一緒に歩いてゆくことができるのです。 (二宮 創)

---

[今週の暗唱聖句] 詩編 89編16節

いかに幸いなことでしょう、勝利の叫びを知る民は。

主よ、御顔の光の中を彼らは歩きます。

---

## 〈ねらい〉

キリスト者は、一つのかしら、一つの霊に結ばれた体の一部分であることを学びます。

## 〈こども観〉

「歩く」ということは子どもたちにとって、日常的なことです。「からだ」についても認識しやすいでしょう。子どもたちにとってよくわかる「からだ」を取り上げてイメージをふくらませます。そして、礼拝の集まり、教会が一つの「からだ」であり、子どもたち一人ひとりがイエス様を「かしら」とする教会の手であり、足であること、教会の歩みに加わっていることを学びます。

## 〈展開例〉

みんなはそれぞれ「からだ」を持っていますね。手はどこにありますか。いくつありますか。じゃあ、足は？（顔、目、耳と楽しみながら子どもたちと確認します）

では、「歩く」とときには、「からだ」のどこを使っているか考えてみよう。まず、足を使いますね。じゃあ、手はいらないのかな？ そう、手をふつ

て歩かないとバランスが悪くて転んでしまいますね。目はいりませんか？ 目がなければどこへ行ったらよいかわからないし、ぶつかってしまいます。そして、大切なことは、「〇〇に向かって歩きなさい」と命令をだす「あたま」がなければ歩くことはできません。

聖書には、「あなたがたはキリストの体であり、また一人ひとりはその部分です」と書いてあります。「あたま」はイエス様です。そして、私たち一人ひとりが手であり、足であり、目であって、それが教会になるのです。

## 〈準備〉

絵カード（人間のからだ、教会）

## 〈お祈り〉

天の父なる神さま、教会がイエス様を「あたま」「かしら」とする「からだ」で、わたしたちはその「手」や「足」であることを知りました。聖霊に導かれて、〇〇ちゃん、〇〇ちゃん、〇〇先生と一緒に、教会全体で、喜んで歩いていくことができますようにしてください。アーメン。

## 〈やってみよう〉

## からだゲームをやってみよう のんたんたんたんをりあがる〜◎

- ① さいしよは「あたま」「みみ」と教師が言いながらその音の位をおさえます。こどもたちもまねします。
- ② じょうずになったら教師は「あたま」と言いつ「かた」をおさえたりします。じゃあ、先生の重の手にまどわされないで自分のからだをさわられるかな〜？!



あたま〜



かた〜

## 〈ねらい〉

ぼくたち私たちは、イエス様を信じて救われました。そして、罪赦されて、永遠の命をいただきました。さらに、神の子とされ、聖化の歩みをこの地上においてしていくのです。そのときに、私たちは一人ぼっちで、聖化の歩みをするではありません。イエス様がいつもともにいてくださるだけでなく、教会のお友だちとも交わりの中で進んでいくものなのです。今日は教会の交わりの大切さについて考えましょう。

## 〈展開例〉

皆、教会にいつ頃から来ていますか？ お父さんお母さんに連れられて、小さい頃から来ているお友だちもいれば、お友だちに誘われて来ている人もいますね。いろいろな人が教会にはいると思います。背の大きい人も、背の小さい人も、太っている人も、痩せている人も、いろいろな人がいます。本当に教会にはいろいろな人がいますね。

パウロはその教会を体にとええました。こう言っています。「体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています」(ver12～14)。

体には、目や口、足や手や様々な部分があります。同じように、ぼくたち私たちは、それぞれにいろいろな人がいますが、イエス様の教会の各部分として、お互いが結びあわされて用いられるこ

とになっていくのです。

もう一つ、大切なことは、神様は教会の中でいろいろな人を用いられるということです。

「体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。足が、『わたしは手ではないから、体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。耳が、『わたしは目ではないから、体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。もし全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでおいをかぎますか。そこで神は、御自分の望みのままに、体の一つひとつの部分を置かれたのです」(ver14～18)。

教会の中で必要のない人は一人もおりません。どんな人でも神様は用いてくださるのです。教会の中には、強い人もいます。弱い人もいます。与えられている賜物もさまざまです。赤ちゃんから始まり、若い人もいれば、お年寄りもいます。障がいを負っている人もいるかもしれません。でも、そのお一人お一人が教会では一人も欠いてはならない、大切な人々なのです。

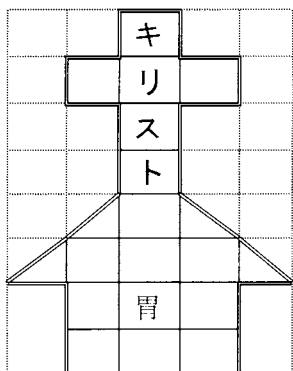
「だから、多くの部分があっても、一つの体なのです」(ver20)と、聖書は言っています。神様はどんな人でも教会の中で用いてくださるのです。

## 〈お祈り〉

イエス様、教会の中で必要のない人は一人もおりません。私たちが教会の中でお互いを助け合いながら歩むことができるようにしてください。このお祈りをイエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



✠ 聖書をひらいて (Iコリントの信徒への手紙12章12節～26節)



☆問題：体には、どんな部分があるでしょうか。  
漢字1文字で空いているマスをうめてください。  
(例：胃)

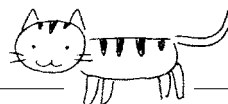
「あなたがたは、キリストの□□□であり、  
また一人ひとりはその部分です。」

✠ 考えてみよう (質問に答えてあげてね！)



☒教会には、おとしよりや、赤ちゃん……いろいろな人がいます。大きな家族のようで楽しいです。  
ボクは、どんなことで、教会のお役にたてますか？ (Tくん：10才)

✠ 言ってみよう



問34  
だれと歩むのですか？

わたしはひとりぼっちではありません。  
私たち、神の民の祈りの家、キリストの体なる○○○○と共にあゆみます。

✠ やってみよう 「分級新聞を作ろう」

- ①担当記事を決める。
- ②それぞれ準備した担当の記事を集めて、大きな画用紙に貼り合わせ、教会の掲示板に貼ってみんなに見てもらおう！



○○教会学校 ✠	□□□クラス	
♡クラスの友達紹介♡	クラス	4
	事件！	コ
*取材記事*		マ
		マン
		ガ

✠ 今週の暗唱聖句 (詩編89編16節)

いかに幸いなことでしょう、勝利しょうりの叫さけびを知る民は。  
主よ、御顔の光の中を彼らは○○○ます。

〈ねらい〉

1. 「教会」の中で養われる。

神様は、救われた者たちを「教会」の中で養い、育てることをよしとされた。

私たちは、一人ひとりがただイエス・キリストと共に歩むのではなく、自分と同じように神の子とされた者たちと共に教会に加わり、教会の交わりの中で歩むのである。

2. 主イエス・キリストにある交わり。

「教会の交わり」は、主イエス・キリストという一つの頭に結ばれた者たちの交わりである。主イエス・キリストから離れた「交わり」は教会の中には存在しない。

〈子どもカテキズム〉

問33：聖化の歩みとは何ですか。

答：神様の子どもとして、罪に死に、神様の御

子イエス様のお姿に似せられていくことです。

神様に愛されている喜びのうちに、私達も神様を愛して歩みます。

問34：だれと歩むのですか。

答：私はひとりぼっちではありません。

私達、神の民の祈りの家、キリストの体なる教会と共に歩みます。

〈展開例〉

1. 説教を聞いて教えられたこと・考えたことを分かち合う。

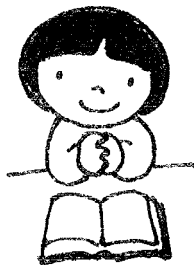
Q. 説教を聞いて新しく教えられたことは？

Q. 分からなかったことは？

2. 生徒と一緒に考える。

Q. 聖化の歩み（キリスト者の歩み）の特徴は？

Q. 教会の交わりの特徴は？



テキスト テサロニケの信徒への手紙 ー 5章1～5節

### 〈背景と文脈〉

テサロニケの信徒たちは、主の再臨を待つ間に死んだ信徒の運命について困惑していたと思われる(4:13)。パウロは4章15～18節で、主を信じて死んだ人々が最初に復活し、その後、生き残っている者が、空中で主と出会うために、彼らと共に引き上げられ、そのようにして、すべての信者は、主と共に永遠に在ることになる、と教え、死者に関して希望をもつよう促した。

パウロは5章で、話題を死んだ信者の復活の問題から、今生きている者の問題に移し、テサロニケの信徒が主の再臨を待つ間、どのように信仰生活を送るべきかを指示している。今日学ぶ5:1-5は、その序論ともいうべきもので、主の再臨の時期に関して言及されている個所である。

### 〈盗人が来るように来る主の日(5:1-3)〉

パウロは、テサロニケで福音を伝えたとき、すでに読者に主の再臨の時と時期について語っていて、ここに改めて書き記す必要はない、と感じた。彼ら自身がそのことについては、よく知っているからである(1-2)。彼らは、パウロからすでに聞いていた再臨の時期に関する知識を、信仰生活に適用し、再臨に備える必要があった。

新共同訳で「時」と訳されている語は時間的、年代的な側面からの時を表し、「時期」と訳されている語は目的が遂行される特別な時、機会という意味合いが強い。主が再臨される時と時期については誰も正確に予言できない。盗人が夜やって来るように主の日は来る(2節)。主イエス自身、たとえ話を通して、ご自身が盗人のように来られることを示唆し、弟子たちに目を覚ましているように、と警告を与えられた(マタイ24:36-44)。

「主の日」は旧約の背景をもっている語であり(例、アモス5:18-20)、主(ヤハウェ)が人々にご自身を顕現され、目的を成し遂げられる日、ま

た裁きの時を指す。新約聖書においては「神の日」(ペトロニ3:12)、「キリスト・イエスの日」(フィリピ1:6)、「主の日」(コリント一5:5)、「主イエス・キリストの日」(コリント一1:8)などの呼びかたで、主イエスが再臨され、みわざを完成される時を指している。

「主の日」は人々が「無事だ、安全だ」と安心しきっている時、即ち破滅が襲うなどとまったく予期していない時に、突然襲う。主イエスは「人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである。洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた」(マタイ24:37-38)、と言われた。みせかけの安全に欺かれ、生活を楽しんでいるときに、主の日は突然襲うのである。妊婦に産みの苦しみがやって来るように、それから逃れられない。それは確実に起こる。ここでパウロは「人々」(3)と一般的な呼び方をしているが、3節の「人々」は、次の4～5節から、主を信じない者たちを指していることは明らかである。

### 〈光の子、昼の子(5:4-5)〉

「しかし」(4)という語によって、「人々」(主を信じない者たち)とテサロニケの信徒たちが鋭く対照されている。主の日がテサロニケの信徒たちを突然襲うことはない。なぜなら彼らは暗闇の中にいないからである。彼らは主を信じたときに、すでに暗闇の中から光の中へと移された。だから信じていない者のように、主の日を恐れる必要はない。大切なことは、再臨を待つ間、彼らが光の子、昼の子としての性質に調和した生活を送ることである。主の再臨を現実起こる出来事として信じる時、光の子としてのふさわしい歩みをとることができる。光の中へ導き出された者が、光の中を歩み続けることこそ、主の再臨を待つ最善の準備である。(後藤公子)

子どもカテキズム

問35 どこを目指して歩むのですか。

答 イエスさまが再び地上に来られる再臨の日、天の国を目指して、歌いつつ歩みます。

ハイデルベルク信仰問答

問52 「生ける者と死ねる者とを審」かれるためのキリストの再臨は、

あなたをどのように慰めるのですか。

答 わたしがあらゆる悲しみや迫害の中でも頭を上げて、  
かつてわたしのために神の裁きに自らを差し出し  
すべての呪いをわたしから取り去ってくださった、  
まさにその裁き主が天から来られることを待ち望むように、です。  
この方は、御自分とわたしの敵をことごとく永遠の刑罰に投げ込まれる一方、  
わたしをすべての選ばれた者たちと共にその御許へ、  
すなわち天の喜びと栄光の中へと迎え入れてくださるのです。

### 〈聖化の歩みの目標としての再臨〉

子どもカテキズムは、問32から聖化の歩みについて扱う。問33で「聖化の歩みとは何か」、問34で「だれと歩むか」を扱った後、この問35で「どこを目指して歩むか」について教える。聖化とはまさに『歩み』であり、それも明確な目標を目指しての『歩み』であることをここで確認したい。そして、その目標とは、「イエスさまが再び地上に来られる」日、すなわち「再臨の日」である。もちろん、その日が『いつか』ということは、私たちには分からない。しかし、それが分からないということは、目標があいまいであるということではないことを正しく理解する必要がある。

### 〈信仰における希望としての再臨〉

この問35を今回と次回の二回に分けて学ぶ。今回は特にキリストの再臨が主の約束に基づく私たちの希望であり、聖化の歩みとはその希望を目指してのものであることに思いを向けたい。聖書は、十字架と復活の後に天に昇られたイエス・キリストが、終わりの日に再び来られると語る。この再臨の約束こそがキリスト者の希望であり、キリスト教信仰の土台である。なぜなら、聖書が語る終わりの日のキリストの再臨は、キリストに結

ばれた者に救いの完成をもたらすためのものだからである。逆に言えば、キリストの再臨が無ければ私たちの救いは完成しない。したがって、キリストの再臨を待ち望むことのない信仰は、救いの完成の希望をもたない信仰になってしまうのである。そのような信仰は真の聖書の信仰ではない。だからこそ、子どもカテキズムが問うように「どこを目指して歩むか」が私たちの信仰にとって決定的に重要なであることを覚えたい。

### 〈現在の慰めとしての再臨〉

私たち自身とキリストの再臨についての関係を教えているものとしてハイデルベルク信仰問答の問52に注目したい。その問いは、「キリストの再臨は、あなたをどのように慰めるか」である。キリストの再臨は、将来的な希望であるだけでなく、今現在の私たち自身に慰めをもたらすものなのである。確かにそこには、最後の審判と呼ばれる審きもあるが、しかし、キリストを信じ、キリストに結び合わされている私たちキリスト者にとっては、キリストが「その御許へ、すなわち天の喜びと栄光の中へと迎え入れてくださる」ことが最大の慰めなのである。 (松田基教)

テキスト            テサロニケの信徒への手紙 ー 5章1～5節  
カテキズム        子どもカテキズム 問35

### 〔単元のねらい〕

この単元では、主イエス・キリストの再臨と、再臨を待ち望む信仰生活を教える問答を取り扱う。今回は、その一回目であり、使徒言行録の御言葉にも触れて、主イエス・キリストの再臨の約束を思い起こすことにした。また、聖書箇所に基づいて、再臨の日がいつであるかということではなく、再臨を待ち望む姿勢が大切であることを取り上げた。

## 「再び来られる主イエス」

みんなは、どこかに旅行に行ったことがありますか。お父さんやお母さんと一緒に旅行に行ったり、学校のお友だちと一緒に行く修学旅行も、とても楽しいものです。大きく成長するにつれて、いろいろなところに旅行するようになるでしょう。そのときに大切なことは、どこに行こうかと計画することです。まだみんなは、お父さんやお母さんが計画して、一緒に行くというだけで、自分で計画したことがないかもしれません。けれども、あそこに行きたいと言っておねだりして連れて行ってもらったことならば、あるかもしれません。旅行に行くときに、目的地を決めて計画を立てることが大切です。ていねいに準備すると、旅行がもっと楽しいものになるはずです。

わたしたちの人生を旅行にたとえることがあります。人生とは旅をしているようなものです。わたしたちの信仰生活、主イエスさまを信じる信仰の歩みも、旅行のようなものだと言うことができます。それは、いったいどこを目指す旅行でしょうか。旅行をするときには目的地を立てて計画することが大切だと言いました。信仰生活の旅行は、いったいどこが目的地なのでしょう。

今日の子どもカテキズムにこうありました。「どこを目指して歩むのですか。」「イエスさまが再び地上に来られる再臨の日、天の国を目指して、歌いつつ歩みます」。ですから、天の国、天国が目的地です。聖書には、「わたしたちの本国は天に

あります」(フィリピ3:20)とあって、そこでも、わたしたちは天の本国を目指して人生を歩む、人生の旅をするのだと教えられています。

そして、今日学びたい大切なことは、天の国、天国とは、いったいどんなところでしょうか。上？ お空？ お空のもっと上？ 宇宙？ いいえ、ただそのような場所として考えるではありません。子どもカテキズムに、「イエスさまが再び地上に来られる再臨の日、天の国を目指して」とありました。わたしたちの目指す天の国、天国とは、主イエスさまが来られる、その日に実現するものです。主イエスさまがおられるところが天の国です。ですから、わたしたちの信仰生活の旅、旅行は、主イエスさまが来られる日を目指して、待ち望んで歩むというものなのです。

主イエスさまは、十字架につけられて死なれました。教会は、主イエスさまが十字架で死んでくださったということを大切に教えています。けれども、主イエスさまは、死んでおしまいではありません。それが、死なれたことと同じようにとても大切なことです。主イエスさまは復活して、その後、天に上げられました。使徒言行録1章に書き留められています。弟子たちが集まっていた、その目の前で、主イエスさまは、天に上げられて、雲に覆われて見えなくなりました。そのときに、主の御使いがあらわれて告げました。「あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、また



おいでになる」(使徒1:11)。主イエスさまは再び来られる。わたしたちには、その約束が与えられています。わたしたちは、主イエスさまが再び来られるという約束を信じて、待ち望みながら、地上の人生を歩み続けるのです。

さて、それでは、主イエスさまはいつ来られるのでしょうか。今日でしょうか、明日でしょうか。キリスト教会は、主イエスさまが天に上げられてからおよそ2000年の間、主イエスさまが来られる日を待ち続けてきました。だから、もうすぐなのでしょう、あるいは、まだまだ先のことでしょうか。それは分かりません。主イエスさまは、そのときがいつであるのか、あなたがたが知る必要はないとおっしゃいました(使徒1:7)。いつであるのか分かったとたん、人間というものは、それまでは自分の好きなことをして生きていこうなどと考えて、傲慢になったり、怠惰になったりしてしまうものだからでしょう。

今日の聖書にありました。「盗人が夜やって来るように、主の日は来るということを、あなたがた自身よく知っているからです」。不思議な言葉ですね。どういうことでしょうか。

盗人が来る。そのことを、ふつうは、だれも知りません。来るということを知られているならば、盗むこと、泥棒することはできないからです。もちろん、主イエスさまが泥棒しに来られるわけではありませんよ。泥棒がいつ来るのか、だれも知りません。そして、泥棒など来るはずがないと、ふつう、思っていることが多いのです。そして、泥棒など来るはずがないと思って、何の準備もしていないことが多いのです。来ると、とたんに大慌てで、警察に連絡することになります。

日本は地震が多いのですが、地震のために何か準備していますか。地震など来ないと思っていると、何の準備もしませんね。地震など来ないと思って準備しておらず、ところが突然地震が来ると、やはり、わたしたちは大慌てしてしまうでしょう。いったいどこに逃げればよいのか、家から何を持

ち出せばよいのか。あらかじめ考えておかなければなりません。いつ来るのかはだれにも分かりませんが、だからこそ、準備しておくことが大切なのです。

そのように、主イエスさまもいつ来られるのかわかりません。けれども、いつ来られるのかと考えるのではなくて、いつ来られてもよいように、準備しておくのです。備えておくことが大切なのです。

「あなたがたは暗闇の中にいるものではありません」、「あなたがたはすべて光の子、昼の子だからです」とありました。たとえ夜、突然、地震が来ても、ちゃんと準備しておけば、テーブルの下に潜り込んだり、あるいは、大切な荷物を持ち出したり、集合場所に集まったりできるでしょう。準備して、あらかじめ訓練しておけば、昼間とあまり変わらず、行動することができます。

主イエスさまを待つということでも、主イエスさまが来られるという約束を信じて、準備しておけばよい、備えておけばよいのです。その、再臨の約束を信じて備える生き方、歩み方をすることが、わたしたちの人生の旅、信仰生活の歩みにとって、とても大切なのです。

どんなふうにして準備するのでしょうか、備えるのでしょうか。みんな、大丈夫です。一番の備えは、神さまの御言葉を聞いて、礼拝をささげることです。礼拝をささげて、神さまをほめたたえ、感謝して歩んでいることです。教会というところは、そのようにして、主イエスさまが来られることを待ち望んで、みんなと一緒に準備をしているところなのです。

「主の日」という言葉があります。「主の日」というのは、毎週の日曜日、神さまを礼拝する日のことですが、同時に、「主イエスさまが再び来られる日」のこともあるのです。わたしたちは、主イエスさまが再び来られる「主の日」を待ち望んで、毎週の「主の日」の礼拝をささげているのです。(望月 信)

---

[今週の暗唱聖句] テサロニケの信徒への手紙 一 5章4節後半

ですから、主の日は、盗人のように突然あなたがたを襲うことはないのです。

---

〈ねらい〉

この地上に生まれ、十字架につけられ、復活され、天に昇られたイエス様。イエス様は再び来られて、救いを完成させてくださいます。「再臨」については二回に分けて学びます。次週に「再臨にそなえて生きる」ことを学びますから、ここでは、「再臨」ということからそのものについて、しっかりと学びます。この「再臨」の約束こそがわたしたちの地上の歩みの希望であるからです。

〈こども観〉

天に上げられ、今ではお会いすることのできないイエス様が再びこの地上に現れる「再臨」とは、まさしくキリスト教信仰の土台、希望です。「再臨」の約束を心から信じることができないのは、もしかしたら、この世的な常識を持った大人のほうかも知れません。素直でやわらかな心を持ったこどもたちに聖霊が豊かに注がれ、「再臨」の信仰が与えられますように。

「再臨」だけでなく、イエス様がこの地上でどんな生涯を送られたかを示すと、さらにこどもたちにとってイエス様の存在が身近になり、「再臨」の理解が深まるでしょう。

〈展開例〉

今日はイエス様のことについて、みなさんと

いっしょに思い出してみたいと思います。絵カードを使って、地上でのイエス様の歩みをたどりませう。さあ、この絵はどんな絵かな？（絵カードを一枚ずつ提示します）

- ア. 馬小屋で生まれたイエス様
- イ. 少年のイエス様
- ウ. 大人になり、教えられるイエス様
- エ. 十字架につけられたイエス様
- オ. 復活され天に昇られたイエスさま

イエス様は天に上げられましたね。今日は、そのつづきのお話です。イエス様はもう一度みんなのところに来てくださると、約束してくださっています。そして、みんなを天国に入れてくださるのです。じゃあ、「イエス様はいつ来るの？」って思うよね。それは、神様が決めることで、わたしたちにはわからないこと。でも、神様は約束したことは必ず守る方です。「イエス様がいつかきてくださる」と信じて歩みましょう。

〈準備するもの〉

絵カード

〈お祈り〉

天の父なる神さま、イエス様が再び、わたしたちのところに来てくださるということを知りました。楽しみにして待っています。アーメン。

〈やってみよう〉

**十字架のペンダント をつくろう！**

ようにするもの

- ・厚紙(まる形)
- ・色紙
- ・はさみ
- ・たこ糸
- ・ストロー
- ・穴あけ用目打ち
- ・のり

作りかた

① 折り紙で十字架をつくり、厚紙にはる

② ストローを2センチくらいにセリたに糸を通す。厚紙のひもを通してかんせい!

## 〈ねらい〉

ぼくたち私たちは、イエス様を信じて救われました。そして、罪赦されて、永遠の命をいただきました。さらに、神の子とされ、聖化の歩みをこの地上においてしていくのです。では、その聖化は何を目指して歩む歩みなのでしょうか。それは、イエス様の再臨です。今日は再臨の素晴らしさについて考えましょう。

## 〈展開例〉

皆、お父さんお母さんに言いつけられて、お留守番をしたことがありますか？（聞いてみる……）

そして、帰って来るまでに～～のことでおいてねと言われたことも、きっとあると思います。でも、さぼってしまって、言われたことをすることを忘れてしまって、お父さんお母さんが帰って来た時に慌てて言いつけられたことをしたこともあるのではないのでしょうか。そんな時には、お父さんお母さんがいつ帰ってくるかわかっていたら良かったと、思っただろうと思います。

ぼくたち私たちは、イエス様を信じて、救われただけではなくて、聖化の歩みをして歩んでいるのです。そして、その聖化の歩みは、イエス様の再臨を目指しての歩みなのです。でも、イエス様がいつこの地上に帰って来られるのか、ぼくたち私たちは誰も知りません。

「兄弟たち、その時と時期についてあなたがたには書き記す必要はありません。盗人が夜やって来るように、主の日は来るということを、あなたがた自身よく知っているからです」（テサロニケ一5:1～2）。

泥棒が、「明日あなたの家に入りますよ」、このように言ったら、誰でも入れないように準備し

て待つでしょう。それと同じように、イエス様の再臨、イエス様がいつこの地上に戻って来られるのか、私たちには分かりません。ですから、ぼくたち私たちは、いつイエス様が帰って来られても良いように備えて、聖化の歩みを日々歩みながら、主イエス様が再び来てくださるのをひたすら待ち望むのです。

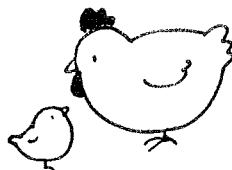
もう一つ大切なことは、イエス様の再臨は、すべての事柄にイエス様が終止符を打ってくださるときなのです。毎日生きていると、きっと、「どうしてこんなことが起こるんだろう？」って考えてしまうようなことがあるでしょう。分からないこともたくさんあります。でも、イエス様の再臨の時に、そのすべてに神様が答えを与えてくださるのです。人生の矛盾に答えを与えてくださるのです。

「しかし、兄弟たち、あなたがたは暗闇の中にいるわけではありません。ですから、主の日が、盗人のように突然あなたがたを襲うことはないのです。あなたがたはすべて光の子、昼の子だからです。わたしたちは、夜にも暗闇にも属していません」（ver4～5）。

ぼくたち私たちは光の子です。闇ではなくて、神様に属する子どもなのです。ですから、安心して、イエス様の再臨を待ち望みたいと思います。そのときに、神様はすべての答えをぼくたち私たちに示してくださいます。

## 〈お祈り〉

イエス様、私たちは、あなたの再臨を日々身を整えて待ち望みます。どうぞ、私たち一人ひとりの信仰生活をお守りください。このお祈りをイエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



✠ 聖書をひらいて (Iテサロニケの信徒への手紙5章1節~5節)

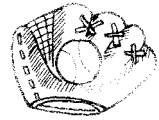
3	4	6	7	9	10	11
12	13	15	16	18	21	24
25	26	27	29	30	31	32
☆	☆	3	4	6	9	12
13	14	☆	15	16	17	☆
☆	☆	18	21	24	27	28
☆	☆	29	30	31	33	34

☆問題：3の倍数を黒くぬってください。

(マスのスミまできちんとぬってね)

黒く浮き出た字はなんと書いてあるでしょう。

(目を細めて見てね (^\_-)-☆)



「あなたがたは、すべて〇〇〇の子、昼の子だからです。」

(Iテサロニケ5:5)

✠ 考えてみよう (質問に答えてあげてね！)

☒お留守番をしている時、お母さんの言いつけを守って、お母さんの帰る時間まで待ちます。

イエスさまがわたしたちのところに、もう一度来てくださると聖書に約束してくださっているけれど、いつ来てくださるのか、どうして教えてくださらないのですか?? (Hちゃん・11才)

✠ 言ってみよう



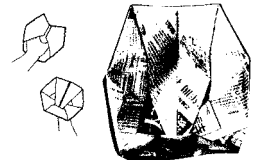
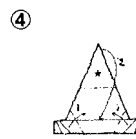
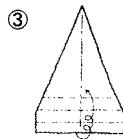
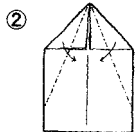
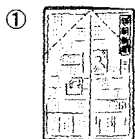
問35

どこを目指して歩む  
のですか？

イエスさまが再び地上にこられる〇〇〇〇の日、天の国を目指して  
歌いつつ歩みます♪

✠ やってみよう —作ってみよう— 「新聞紙のキャッチャー・ミット」(新聞紙1枚)

・春の気配が感じられるようになりました。分級が終わったら、ボールを持ってみんなで外に出てみよう！



上部を三角形に  
折ります。

⇒さらに三角形に  
折ります。

⇒裏返して、  
折りあげます。

⇒番号の順に折ります。  
★の部分には補強紙を貼る。

★お祈りは、神さまとのキャッチボール。神さまの声をしっかり受け止めてね (^\_-)-☆!

✠ 今週の暗唱聖句 (Iテサロニケの信徒への手紙5章4節後半)

ですから、〇〇〇〇が、<sup>ぬすびと</sup>盗人のように突然あなたがたを  
<sup>おそ</sup>襲うことはないのです

## 〈ねらい〉

## 1. 主が来られることを期待して生きる。

主イエス・キリストは、再び私たちのところに来てくださると約束をしてくださった。「もう一度、イエス様が私のところに来てくださる！」という大きな期待をもち、その時を楽しみにしながら生きようと、イエス様は私たちに教えてくださったのである。

## 2. 主が私を迎えに来てくださる。

「主が再び来られる日」とは、一方では「世界の終わりの日」であるが、他方では「私の命の終わりの日」のことである。イエス・キリストは、私たちが地上の生涯の歩みを終えるときに、遠く天で私たちの帰りを待っているのではなく、私たちを迎えに来てくださるのである。「主が私を迎えに来てくださる」という確かな約束こそが、死に対する恐れを取り除く。

## 〈子どもカテキズム〉

問35：どこを目指して歩むのですか。

答：イエス様が再び地上に来られる再臨の日、天の国を目指して、歌いつつ歩みます。

## 〈展開例〉

## 1. 説教を聞いて教えられたこと・考えたことを分かち合う。

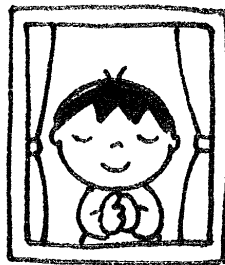
Q. 説教を聞いて新しく教えられたことは？

Q. 分からなかったことは？

## 2. 生徒と一緒に考える。

Q. 再臨を待つキリスト者の歩みはどのような歩みだろうか？

Q. 私たちが地上の命を終えるとき、私たちはたった一人で死んでいくのだろうか？



## 〈背景と文脈〉

先週学んだ5章1～5節は今日学ぶ5章6～11節の序論である。主の日は盗人のようにやって来るので、準備していない者にとっては突然襲う恐るべき破滅の日となる。しかし主の日がテサロニケの信徒たちを突然襲うことはない。彼らはすでに暗闇の中から光の中に導きだされ、光の子、昼の子とされているからである。パウロはこう語り、光の子、昼の子としての立場にふさわしい歩みとは何かを5章6～11節で具体的に語る。

## 〈昼の子としてのふさわしい歩みをしよう (5:6-8)〉

5節の前半まで「あなたがた」という代名詞が使われているが、5節の後半からは「わたしたち」に変わっている。したがって6節と8節では、命令形ではなく、勧誘(英語では let us)の形になっている(新共同訳では「ましよう」と訳されている)。パウロは、テサロニケの信徒たちだけに義務を負わせようとしないで、「わたしたちは暗闇に属していないのだから、共に光の子としてのふさわしい歩みをしていこうではないか」と語りかけている。

ここで「ほかの人々」(6)と「わたしたち」が対照されている。「ほかの人々」は主を信じない人々を指す(4:13)。「ほかの人々」は夜に属する者、それに対して「わたしたち」は昼に属する者として対照されている。

人は夜、酒に酔い、また夜眠る。酔ったり眠ったりすることは、夜に属する者の行為である。「酔う」と「身を慎む」が対照されている。また「眠る」と「目を覚ましている」が対照されている。夜に属する者は不摂生な生活をし、霊的な事柄に関して鈍くまた無頓着である。それに対して昼の子は、何事にも自制し、霊的に目覚めていなければならない。「目を覚ましている」と訳された語は、単に眠っていない、目を開けている、ということの意味しない。意志的に目を覚ましている、心し

て目を覚ましている、という意味である。

8節でパウロはキリスト者を一人の兵士として喻え、わたしたちは昼の子なのだから、信仰と愛を胸当てとしてつけ、救いの希望を兜としてかぶり身を慎んでいよう、と言っている。胸当てと兜は、兵士が身を守るために着ける大切な武具である。再臨を待ち望む者の武具は、「信仰」、「希望」、「愛」であり、パウロは、それらがキリスト者にとって最も大切な徳である、と考えた(コリント一13:13)。

## 〈救いの完成を待ち望みつつ歩もう (5:9-10)〉

救いの希望は、成就するかしないかわからない不確実な希望ではない。パウロは救いの希望を確かに実現する希望と考えていた(例、ローマ5:5、8:24-25)。キリスト者は救いが完成する主の日を待ち望んでいる。救いは未来に属することであり、その意味で希望である(救いには二面性がある。すなわち、すでに救われている、という現在の面と、主の日に救いが完成する、という未来の面である。この個所では未来の面について語られている)。

神は、キリスト者が怒りから逃れ、救いにあずかるように定められた。救いは神の主導と一方的な恵みにより与えられた。その目的は、彼らが目覚めていても(生きている状態を指す)、眠っていても(死んだ状態を指す)、主と共に生きるようになるためである。主のあがないの死は、神と罪人の間に新しい関係をもたらした。そしてその関係は死に影響されない。

しかし救いの希望の確かさは、怠慢を助長しない。むしろ主にある者は、互いに励ましあい、お互いの信仰の向上に心がけるべきである。信仰は静的ではなく動的であり、成長していくのが自然である。だからキリスト者は互いに励ましあい続け、お互いの信仰の向上に心がけ続けなければならない(註一原語では、命令形は継続の意味合いをもつ現在形が使われている)。(後藤公子)

## 子どもカテキズム

問35 どこを目指して歩むのですか。

答 イエスさまが再び地上に来られる再臨の日、天の国を目指して、歌いつつ歩みます。

ウェストミンスター小教理問答

問36 この世で、義認、子とされること、聖化に伴い、

あるいはそれらから流れ出る祝福とはなんですか。

答 この世で、義認、子とされること、聖化に伴い、あるいはそれらから流れ出る祝福とは、神の愛の確信、良心の平和、聖霊における喜び、恵みの増加、終わりまで恵みのうちに堅忍することです。

## 〈再臨の日を目指して歩む〉

子どもカテキズム問35の学びの二回目である。前回、聖化の歩みとは、キリストの再臨の日を目指してのものであることを学んだ。今回は、その目標への途上において私たちがどのように歩むべきかを学ぶ。子どもカテキズムは、それを「歌いつつ歩みます」と簡潔に語る。これは、問29や問33の答え「神さまに愛されている喜びのうちに、私たちも神さまを愛して歩みます」を受けてのものであろう。喜びと感謝、そして神への賛美は、聖化の歩みの重要な要素である。なぜなら聖化の歩みとは、私たちが救われるための歩みではなく、すでに「神さまの恵み」（問28, 29）を受けた者、「主イエス・キリストと一つに結び合わ」された者（問30）、「神の子とされ」た者（問31）としての歩みだからである。したがって、聖化の歩みとは、「神さまの恵み」に対する私たちの応答としての歩みとすることもできるのである。当然そこでは、喜びと感謝、そして神への賛美が大きな要素となる。

## 〈聖化に伴う祝福〉

しかし、聖化の歩みについて私たちが知るべき事柄は、そのような喜びと感謝、賛美だけに留まるものではない。その点で、ウェストミンスター小教理問答の問36が教える事柄にも注目しておく必要がある。そこでは、義認や子とされるこ

とと共に、「聖化に伴う、あるいは聖化から流れ出る祝福」が挙げられている。それらは、「神の愛の確信」、「良心の平和」、「聖霊における喜び」、「恵みの増加」、「終わりまで恵みのうちに堅忍すること」である。これらの中で、特に聖化の歩みにおいては最後の「終わりまで恵みのうちに堅忍すること」が重要であることを覚えたい。

## 〈恵みのうちに堅忍する〉

主イエス・キリストは、「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」と教えられた（マタイ24:13）。確かに、キリストを信じ、救いの約束に与ったからといって、ただちに私たちの人生から悲しみや苦難がまったく無くなるわけではない。むしろ、私たちに信仰を持つことによる戦い、誘惑や迫害との戦いが待っている。また、時には信仰の確信が弱まることもあれば、罪を犯してしまうこともありうる。そのような中では、喜びや感謝といった要素よりも、信仰に基づく忍耐こそが必要である。しかし、そこでの忍耐という営みもまた神の恵みによって支えられるものなのである。信仰における忍耐とは、神の選びの恵みの確かさを土台とした救いの確信から来るものなのである。したがって、「終わりまで」すなわち、主イエス・キリストが再び来られる再臨の日まで、私たちが神の選びの恵みを確信しつつ忍耐し、喜びを持って、日々を歩むのである。（松田基教）

テキスト            テサロニケの信徒への手紙 一 5章6～11節  
カテキズム        子どもカテキズム 問35

### 〔単元のねらい〕

主イエス・キリストの再臨を待ち望む信仰生活を教える問答の二回目である。わたしたちは、恵みと憐れみにより、主イエスの再臨を知る者とされている。それが、昼に属す者、光の子である。その再臨を知る者として、身を慎んで生きることが、わたしたちに求められている。

## 「再臨に備えて生きる」

みんな、ちょっと、想像してみてください。お父さんとお母さんが言いました。「明日、とっても大切なお客様をお迎えます」「お客様」ですって。いったいどんなお客様なのでしょう。そのお客様をお迎えするために、どうすればよいのでしょうか。そうです。お客様をお迎えするためには、準備が必要です。家のお部屋のことを思い出しましょう。ああ、絵本とオモチャが出しっぱなしでした。机の上も散らかったままです。それでは、お父さんお母さんと一緒に、みんなでお部屋を片付けましょう。お部屋をきれいにして、準備をして、お客様をお迎えしましょうね。何かおいしいお飲み物とお食事を用意して、楽しい時を過ごせるようにしたいですね。

そんなふうには、お客様が来られることが分かっていたら、あらかじめ準備しておくでしょう。主イエスさまは再び来られます。主イエスさまは、わたしたちのとびっきりのお客様です。大好きな大好きな主イエスさまが来られる。そのために、わたしたちは、どんな準備をするのでしょうか。

お部屋の片付けをする。いいえ。もちろん、お部屋の片付けは大切なことです。それは、いつも片付けをするようにしておきましょう。けれども、それが、主イエスさまをお迎えする準備ということではありません。

お飲み物とお食事を用意しておく。いいえ。それも、ふつうのお客様であるならば、大切なことでしょう。けれども、マルタとマリアの物語を思

い出しましょう（ルカ10:38-42）。マルタは、主イエスさまをお迎えして、お飲み物やお食事のおもてなしに慌ただしくしていました。けれども、主イエスさまはマルタをたしなめて、「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない」とおっしゃったのです。

主イエスさまをお迎えする。そのための準備とは、いったいどのようなことなのでしょう。それは、マルタとマリアの物語で言うならば、主イエスさまの足もとにひざまずいて、主イエスさまの御言葉に聞き入ることでした。それは、主イエスのもとにとどまり、主イエス・キリストを仰いで神を礼拝することであるとと言えるでしょう。主なる神の御言葉に養われて生きる、心を整えられて生きる、キリスト者の霊的なあり方が教えられているのです。

今日の御言葉にはこうありました。「ほかの人々のように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいましょう。眠る者は夜眠り、酒に酔う者は夜酔います。しかし、わたしたちは昼に属していますから、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの希望を兜としてかぶり、身を慎んでいましょう」。これも、わたしたちの霊的な姿勢が教えられている御言葉です。「眠っていないで」とありますが、具体的な睡眠として「眠ってはいけない」ということではありません。「酒に酔う者は」とありますが、これも具体的な意味で「お酒を飲んではい



けない」ということではありません。もちろん、みんなは子どもだから、飲んではいけませんよ。おとなの人は節度を保って飲むならよいでしょう。けれども、これらは、わたしたちの霊的な姿勢、信仰生活の態度を教えている御言葉です。

眠ることもお酒に酔うことも、それは夜することです。昼日中、光に照らされているときにすることではありません。そして、聖書は言うのです。わたしたちは、昼に属する者、光の子であるのだから、昼に属する者、光の子として歩みましょう、と。それは、わたしたちは、主イエスさまが再び来られることを知る者とされています。主イエスさまが再び来られることを信じています。そうであるならば、まるで主イエスさまが来られないかのような態度で生きるのではなくて、明日にも主イエスさまが来られる！という生き方をすべきであるということです。いつでも、昼を生きる者として歩むのです。

そのために、わたしたちは、身を慎んで歩みます。節制して歩みます。お客様が来られるならば、部屋を片付けて、整理整頓してお迎えします。そのように、わたしたちは、心の中を片付けて、主イエスさまをお迎えするのです。何かほかのことが心の真ん中を占領しているというのではなく、主イエスさまに中心に来ていただいて、そのようにして、主イエスさまが来られることを待ち望んで、主イエスさまと共に歩むのです。主イエスさまを賛美しながら歩むのです。

使徒パウロは、こう言いました。「しかし、わたしたちは昼に属していますから、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの希望を兜としてかぶり、身を慎んでいきましょう」。信仰者が身に着けるべきは、信仰と愛の二つであると言います。

主イエスさまを信じる信仰ということを大切に、いつでも信仰を忘れないようにしています。夜は眠ってしまう、酒に酔ってしまうとあ

りましたが、夜になったら、信仰は忘れてしまうということではないのです。あるいは、日曜日は教会に来て、主イエスさまのことを信じているけれども、月曜日から土曜日までは、主イエスさまのことはどこかに飛んでいってしまっている、というでもないのです。主イエスさまが共にいてくださる、そして、やがて再び来てくださる。そのことを信じて、いつも信じて、身に着けているべきなのです。愛ということも同じです。神を愛することと人を愛すること、二つで一つの愛に生きるということ。これも、今日は愛して、明日は愛さない、というではありません。今日はお友だちと仲良くして、けれども明日は知らないというのではないのです。わたしたちは、信仰と愛ということをいつも身に付けて歩む。

そして、救いの希望を兜としてかぶる。兜は頭にかぶるものです。希望が兜であるとは大切なことでしょう。救いの約束、主イエスさまの再臨の約束を信じて、希望を持って歩むところにこそ、信仰生活のかなめがあるのです。救いの希望の中でこそ、わたしたちは、昼に属する者、光の子として歩み続けることができます。

主イエスさまを待ち望んで生きるとは、実のところ、主イエスさまはすでに来ておられる、共におられると信じて生きるということです。キリスト者の家庭の習慣の一つに、食卓の席を家族の分だけではなく、もう一つ設けて、主イエスさまの席とするということがあります。主イエスさまは、御霊においてすでに共におられ、わたしたちの交わりに加わっておられます。そのようにして、主イエスさまの臨在を信じて歩み、身を慎んで歩むところに、再び来られる主イエスさまを待ち望む歩みがあるのです。主イエスさまの御言葉を聞き、礼拝をささげて、今ここにおられ、やがて来られる主イエスさまを待ち望んで、歩み続けて参りましょう。(望月 信)

---

[今週の暗唱聖句] テサロニケの信徒への手紙 一 5章8節

しかし、わたしたちは昼に属していますから、

信仰と愛を胸当てとして着け、救いの希望を兜としてかぶり、身を慎んでいきましょう。

---

## 〈ねらい〉

私たちキリスト者は、イエス様が再びこの地上に来られる「再臨」を信じています。では、イエス様をお迎えするために、どんな準備をしておいたらよいのでしょうか？ こどもたちと一緒に考えてみたいと思います。

## 〈こども観〉

「再臨に備えて生きる」ことを、こどもたちとともに考えるとき、イエス様＝大切な待ちに待ったお客様を迎える、自分の家に来ていただくというたとえば、身近でわかりやすいかもしれません。

イエス様は、いつであるかはわからないけれど、「もう一度地上に来る」という約束を必ず守ってくださる方で、その約束を疑わずに信じることで、喜んで待っていることが一番の準備であるという再臨の信仰に導きます。

## 〈展開例〉

みんなには、幼稚園や保育園に仲のよいお友だちがいますか？

(○○ちゃん、△△ちゃんという答えが返ってくる)

ある日、そのお友だちがお母さんと一緒にあなたのおうちに遊びにきてくれることになりました。大好きな○○ちゃん、△△ちゃんがうちに来る……さあ、どんな用意をしましょうか？

(おもちゃをかしてあげる。お菓子やジュースを買っておく)

ちゃんと準備しておいたら、お友だちはあなたのおうちできっと楽しく遊べるでしょう。

さて、イエス様はあなたたちにとって、一番大切なお友だちですね。イエス様は、天に昇られ、もう一度わたしたちのところに現れてくださると約束してくださっています。先週、勉強しましたね。

(「再臨」の絵カードを見せる)

さあ、何を準備しておきましょうか？ それは、美味しいお菓子やジュース、楽しく遊べるおもちゃではないのです。

イエス様が喜んでくださる準備は、心の準備なのです。イエス様は目には見えないけれど、いつもわたしたちと一緒にいてくださって、いつかはわからないけれど、必ずもう一度来てくださるということを信じることで、そして、よく御言葉を聞いて、毎週礼拝をささげて、「イエス様、いつでも来てください」という気持ちで待っていることを、イエス様が一番喜んでくださるのです。

## 〈お祈り〉

天の父なる神さま、イエス様がいつ来られてもよいように、わたしたちがイエス様を救い主と信じて、心の準備をしておくことができますように。アーメン。


## 〈やってみよう〉

**ペットボトルのマラカス**

よいあるもの


- ペットボトル (500ml) 1人2本
- カラービーズ 少々
- きれいな小石 少々
- シェイプテープ
- シール

①



ペットボトルにシールやテープを貼ってかざりつけ

②



キャップをしまえてぶら下げてみましょう。マラカス、かんせい♪

**〈ねらい〉**

ぼくたち私たちの信仰生活は、イエス様の再臨を待ち望む信仰生活です。では、私たちは、どのような姿勢でイエス様の再臨を待ち望めば良いのでしょうか。今日はイエス様の再臨を待ち望む、その信仰の姿勢について一緒に考えたいと思います。

**〈展開例〉**

ある家に、泥棒が入ろうとしています。泥棒は、その家をよく調べて、いつその家の人がいなくなるのか、何時に帰ってくるのか、全部調べて、そして誰もいなくなったところを見計らって、泥棒に入ります。でも、もし、いつ泥棒が来るかわかっていたらどうでしょうか。しっかりと戸締りをして、内側からカギを掛けて、その日は外出しないようにして、もしかすると、お巡りさんを読んで、泥棒が入って来るのを待つかもしれません。ですから、いつ泥棒が来るか分かれば、十分に準備をすることができます。

しかし、イエス様の再臨は、いつ来るのかわかりません。じゃあ準備することが出来ないじゃないか、そう言う人もいるかもしれません。しかし、聖書は次のように言っています。

「従って、ほかの人々のように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいきましょう。眠る者は夜眠り、酒に酔う者は夜酔います」(ver6~7)。

イエス様がいつこの地上に戻って来られるのかわからないからこそ、ぼくたち私たちは、目を覚まして、身を慎んで、イエス様の再臨を待ち望むのです。もちろん、目を覚ますというのは、心の

目を覚まして、イエス様の再臨を待ち望むということです。

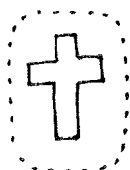
そして、もう一つ大切なことは、私たちの、イエス様の再臨を待ち望む、聖化の歩みは、歯を食い縛って、肩に力を入れて、自分の力で待ち望むというようなものではなくて、神様のご愛の中に安らぎながら待ち望むということなのです。

「しかし、わたしたちは昼に属していますから、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの希望を兜としてかぶり、身を慎んでいきましょう。神は、わたしたちを怒りに定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによる救いにあずからせるように定められたのです」(ver8~9)。

ぼくたち私たちは、永遠の初めから神様によって救いに選ばれているという確信、神様と共に歩む時に与えられる心の平安、聖霊が心の中に住んでくださる喜び、そして日々体験する様々な恵み、これらを心の内にいただきながら、神様の御手によって守られて聖化の歩みを歩み、イエス様の再臨を待ち望んでいくのです。また私たちが神様を愛するだけではなくて、神様が私たちを愛してくださるという神様の愛によって押し出されて、今度はぼくたち私たちが周りのお友だちを愛しながら、聖化の歩みを歩んでいくのです。そして、イエス様の再臨を待ち望むです。

**〈お祈り〉**

イエス様、私たちは、あなたの再臨を、毎日身を慎んで、あなたの愛に生かされながら、お友だちを愛して、待ち望みます。このお祈りをイエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



✦ 聖書をひらいて (Iテサロニケの信徒への手紙5章6節～11節)



さし身をつつんで、目をしまいましょう

☆問題：文字をならべかえて、みことばにしてね。

こたえ→



✦ 考えてみよう (質問に答えてあげてね！)

☒「眠っていないで、目をさまし、身をつつんでいましょう」とはどういう意味ですか？ 夜、眠ってはいけないのですか？ (Yくん：10才)



✦ 言ってみよう

問35

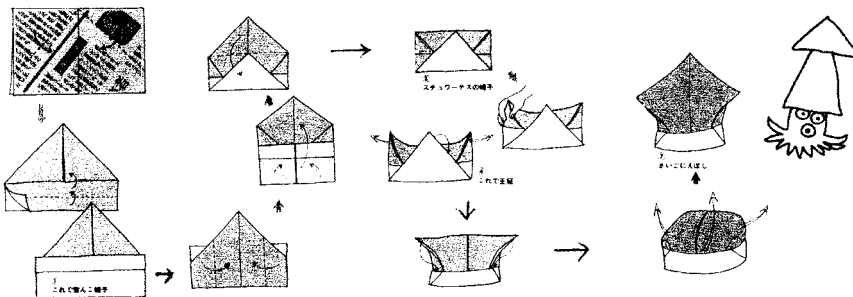
どこを目指して歩むのですか？

イエスさまが再び地上にこられる再臨の日、〇〇の〇〇を目指して歌いつつ歩みます。

✦ やってみよう —レッツ・工作—「新聞紙でかぶと？」(材料：新聞紙 一人一枚)

「とっても簡単だからぜひ作ってみて！」……できたら、好きな帽子に「救いの希望」と書こう！

・新聞紙2面分を折って使います。上が輪になるようにおきます。



✦ 今週の暗唱聖句 (Iテサロニケの信徒への手紙5章8節)

しかし、わたしたちは〇〇に属していますから信仰と愛を胸当てとして着け、救いの希望をかぶととしてかぶり、身を〇〇〇〇〇〇いましょう。

## 〈ねらい〉

## 1. 再臨の備えの必要。

先週、主が再び来られること、主が死の時に私たちを迎えにきてくださることを学んだ。しかし、イエス・キリストはその時がいつになるか、あなたがたには分からないと語られた。いつ再臨がおこるのか、いつ私は天に召されるのか、それは、誰にも分からない。だからこそ、いつその時が来ても良いように「備え」をしておくようにと教えられたのである。

## 2. 再臨の備え。

再臨の備えは、特別に何かをすることではなく、今すでに与えられている神の恵みの中で歩み続けるということである。イエス・キリストによって与えられた救いを喜び、主なる神との交わりの中で豊かな恵みを受けながら、神と人を愛して生きることこそ、なすべき再臨の備えである。

## 〈子どもカテキズム〉

問35：どこを目指して歩むのですか。

答：イエス様が再び地上に来られる再臨の日、天の国を目指して、歌いつつ歩みます。

## 〈展開例〉

## 1. 説教を聞いて教えられたこと・考えたことを分かち合う。

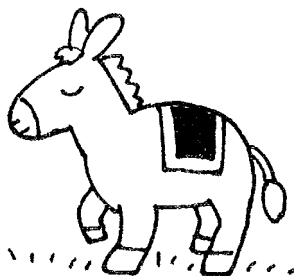
Q. 説教を聞いて新しく教えられたことは？

Q. 分からなかったことは？

## 2. 生徒と一緒に考える。

Q. 再臨がいつになるとイエス様は教えただろうか？

Q. 再臨のためにどのような備えが必要なのだろうか？



**〈背景と文脈〉**

ルカは、23章32～43節で十字架にかけられたイエスについて記しているが、その中でも人々の嘲りの言葉を詳細に記録している。まず議員たち（ユダヤ人の宗教的指導者）が、「もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい」（35）と嘲った。続けてローマの兵士たちも「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ」（37）と嘲った。最後に一緒に十字架にかけられた犯罪人が「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ」（39）と嘲った。

嘲った人々は、イエスがメシアなら十字架から降りて自分の命を救うはずだ、と考えた。実際にはこのとき、人間の思いをはるかに超えた方法で、メシアによる真の救いが実現しようとしていたのである。イエスの十字架上の贖いの死は、まさに神のご計画からでたものであり、そのために主イエスは地上に来られた。最後の瞬間に悔い改めてイエスを信じた十字架上の犯罪人の記事を通して、十字架上で死なれたイエスこそ楽園の鍵をもたれ、信じる者に永遠の命を与えることのできる、まことの救い主であることを、ルカは読者に伝えようとしている。

**〈犯罪人の悔い改めと信仰（23:39-42）〉**

イエスと共に二人の犯罪人が十字架にかけられた。一人は「自分自身と我々を救ってみろ」とイエスは嘲ったのに対して、もう一人の犯罪人は、十字架上で死を直前にしてイエスを信じた。二人の犯罪人が十字架にかけられたことはマタイ福音書（27:44）とマルコ福音書（15:32）にも記されている。しかし両福音書は、一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった、とだけ記して、ルカ福音書の記事とは異なっている。そのことから、犯罪人は二人とも最初は罵っていたが、そのうちの一人は、その後、十字架上で回心した、と推測される。彼の言葉を通して、彼が深い認罪感に打たれていたこと、またイエスがメシアであ

り、再び来られる王である、と信じていたことは明白である。彼は、十字架上でイエスを罵っているもう一人の犯罪人を、神を恐れないのか、とたしなめた。また、自分たちが十字架刑を受けるのは当然だが、イエスには罪がない、と言った。犯罪人である彼らとは対照的に、イエスこそ罪のない聖なる方、また御国の王である、と十字架上で信じたのである。そして「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と嘆願した。彼は、イエスが再び来られ、御国を支配されるそのときに、彼のことを思い出してほしい、と願ったのである。多くの人が、十字架から降りて自分を救わなければメシアではない、と言っているとき、対照的に、彼は、十字架上で息を引き取ろうとしているイエスこそ、まことの救い主であり、やがて来るべき御国の王である、と信じたのである。

**〈イエスの約束（23:43）〉**

イエスは彼の信仰に答えて、彼が願う以上のことを約束された。「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる。」「楽園」（パラダイス）は、主にあって死んだ者の魂が存在する場所であり、天を象徴する語として用いられている（旧約聖書のギリシャ語訳ではエデンの園を指す）。死者の復活が起こる再臨のとき、わたしを思い出してほしい、と願った犯罪人に、その時を待たないで、今日ただちにわたしと共に楽園にいる、と約束された。主にあって死んだ者は、死と同時に主と共にいる、という至福の状態に入れられる。イエスは十字架上で罪人のための贖いの死を遂げることによって、彼を信じる者が、死後ただちに楽園でイエスとの交わりに入れられる道を開いてくださった。私たちもイエスを救い主と信じることによって、彼と同じ約束を与えられ、死の恐れから解放され、希望をもって歩むことができる。（後藤公子）

子どもカテキズム

問36 死んだあとはどうなりますか。

答 死んで終わりではありません。

私たちの魂は完全に聖められ、天の国に入れられます。

私たちの体はイエスさまと共にあり、イエスさまがよみがえられたように

再臨の日に朽ちない体によみがえり、魂と一つにされます。

死ぬまで、そして死んでからも、イエスさまと私たちは一つです。

救われた私たちは、永遠に神さまを喜ぶことができます。

参考教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問37

### 〈キリスト者にとっての死〉

子どもカテキズムは、問32から問35まで「聖化の歩み」について扱ってきた。それに続く形で、問36では「死」の問題が扱われる。「死」もまた、私たちの救いと信仰、そして聖化の歩みにとって重要な問題であることを覚えたい。この問36を今回と次回に分けて学ぶ。今回の主題は「死のときの祝福」であり、次回は「復活のときの祝福」である。これは、ウ小教理問答の問37と問38における扱いに従ったものである。ただし、「死のときの祝福」と「復活のときの祝福」を全く別々の事柄と捉えてしまうことは誤りである。むしろ子どもカテキズム問36が扱っているように、一つに結びついている事柄として理解することが重要であろう。「死」と「復活」の関係性を意識しつつ、それぞれについて学ぶことが大切なのである。例えば、ウ小教理問答の扱いにおいても、両者は「祝福」ということによって結び付けられていると理解することもできる。聖書によれば、人の死は罪の報いであり、そのままでは祝福とは結びつかないものである。しかし、十字架と復活の主イエス・キリストによって罪の贖いが果たされ、死に対する勝利がもたらされた時、そのキリストに結び合わされた者にとっては「死」もまた祝福を受ける時となるのである。なぜなら、子どもカテキズムが教えるように、「死ぬまで、そして死んでからも、イエスさまと私たちは一つ」だからである。

### 〈死んで終わりではない〉

世の中では、死がすべての終わりであるかのような考えや、生まれ変わりといった思想、また安易な想像に基づく死後の世界といったものが横行しているが、聖書はそれらを教えていない。したがって、私たちも安易な想像を抱くことには慎重でなければならない。大切なことは、私たちが死について、聖書から何を教えられ、また何を知らなければならないかである。

子どもカテキズムもウ小教理も、死後の「魂」と「体」の状態について扱う。それぞれ異なる状態に置かれるが、どちらも死んで終わりではない。まず魂は、「全くきよくされ、直ちに栄光にはいる」（ウ小教理問37）。これは死後の魂についての聖書の教えが、ローマ・カトリックの煉獄思想のように死後の中間的な場所をもうけることや、仏教の輪廻転生思想のように生まれ変わりを繰り返すものではないことの言明である。体は対照的に「復活まで墓の中で休む」。しかし、どちらも依然としてキリストに結びつけられたままなのである。

こうして、キリストによる救いとは魂と体の双方の救いである。だからこそ、私たちは死においても慰めを得ることができる。「体も魂も、生きるにも死ぬにも」、「わたしがわたし自身のものではなく」、「イエス・キリストのものであること」が私たちに「ただ一つの慰め」である（ハイデルベルク信仰問答問1）。（松田基教）

テキスト            ルカによる福音書 23章39～43節  
 カテキズム        子どもカテキズム 問36

### 〔単元のねらい〕

ルカによる福音書23章39節以下の「悔い改めた犯罪人」の箇所から、イエス・キリストにある罪の赦しと永遠の命の祝福をともに覚えたい。神の国の祝福は死を超えて揺らぐことはないのだということ、信仰のまなざしをもって確かめたい。「子どもカテキズム」問36とともに、ウェストミンスター小教理問答の問37をも参照して、死のときの祝福を正しく理解しておきたい。

## 「天国の幸い」

イエスさまが十字架につえられたとき、イエスさまとともにふたりの犯罪人も十字架につけられました。ゴルゴタの丘に、イエスさまの十字架を真ん中にして、三本の十字架が立ちました。そこにはイエスさまがほんとうに罪人たちの中に入ってきてくださり、罪人たちのために死んでくださったのだということが、目で見ることができしかたで示されています。

イエスさまの右と左に釘づけられた犯罪人のうちのひとり、十字架の刑罰を受けて死んでいこうとするそのときに、なおイエスさまをののしりました。けれどももうひとりの犯罪人は、その人をたしなめて言いました。お前は神をも恐れぬのか。わたしたちは自分のしたことの報いを受けているのだから当然だ。しかしこのお方は何も悪いことをしていないではないか(41節)。そして、イエスさまにこうお願いしました。あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください(42節)。

この人は死刑囚ですから、自分の犯した大きな罪の価を、自分の命をもって支払って死んでいこうとしています。それは当然のことだ、とこの人は言うのです。

けれどもこの人は、今自分といっしょに息絶えようとしておられる「何も悪いことをしていない」お方を見上げるのです。何も悪いことをしておられないのに、罪人である自分とともに十字架の刑罰を受けて苦しんでおられるお方を見つめるので

す。そして、このお方こそ罪人を救う神さま、救い主イエスさまだということを知るのです。この人にはもう地上の命、地上での時間は残されていません。けれどもこの人は今、罪を悔い改めてイエス様を仰いだのです。イエスさまの赦しをいただいて、イエスさまのみ国で覚えられたいと願ったのです。

イエスさまはこの人に、このように仰せになりました。「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」(43節)

あなたは今日、今、もうすでにわたしと一緒にいるのですよ、天国にいるのですよーそうイエスさまはおっしゃったのです。

死刑囚として、十字架につけられて死んでいくというのは、人としていちばんみじめな人生、みじめな最期かもしれません。でも見てください。そのように最もみじめな人が、自分のかたわらで一緒に十字架につけられているイエスさまこそ救い主であられることを理解したのです。このときにはユダヤの偉い政治家、宗教家たちも、そして群衆もこぞって十字架の上のイエスさまをはずかしめ、ののしったのです。

けれどもこの人はイエスさまを信じたのです。そして、わたしたちは覚えておりたいのです。イエスさまを信じるなら、わたしたちはそのとき天国にいるのです。どんなに大きな罪をもイエスさまは赦してくださいます。そして、それが死ぬ直



前であるかどうかということも関係はありません。人生に残された時間が長いか、短いかということも関係はありません。罪を悔い改めてイエスさまを信じるなら、だれでもそのとき罪の赦しと永遠の命の恵みに入れられているのです。

わたしたち人間の幸せは、神さまとともにあることです。最初に造られた人アダムは、樂園において神さまとともにあり、幸せでしたが、罪によって樂園を失いました。アダムの子孫である全人類も、わたしたちも、樂園の幸せを失いました。そのわたしたちのために、イエスさまは十字架に死んでくださいました。そしてわたしたちを罪と死

の支配からときはなってくださいましたのです。イエスさまがわたしたちのために、ふたたび樂園を取り戻しててくださいましたのです。

わたしたちがこの地上でイエスさまとともにあるなら、すでにその場所が天国です。さらにわたしたちは、死のときにただちにイエスさまのみもとに召されます。最後の息を引き取ると同時に、わたしたちはまったくきよめられて、イエスさまのおられる天のみ国に迎え入れられ、父なる神さまとイエスさまに、顔と顔を合わせてお会いします。そのときにこそ天国の幸いはきわまるのです。ですからイエスさまを信じる人は、死を恐れなくてもよいのです。 (木下裕也)

---

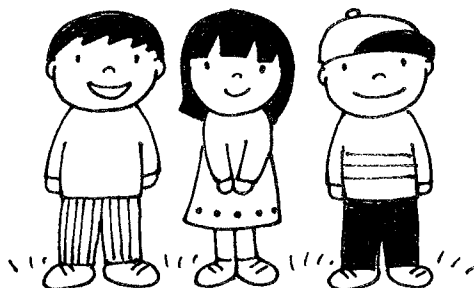
[今週の暗唱聖句] ルカによる福音書 23章43節

するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」と言われた。

---

神さまは

私たちの味方



## 〈ねらい〉

「死ぬこと」は、怖いことでしょうか。いいえ、キリスト者にとって「死」は天国への入り口、死んでただちに清くされ、栄光の中に入れられる祝福のときであることを学びます。

## 〈こども観〉

「死」について取り上げ、考えることは、まだ幼いこどもたちの理解を超えることがらでしょう。生きているものに生命があって、花や虫、動物には生命が与えられており、やがて散り、動かなくなります。それが、生命の終わり＝死であるということ、生活のおりにふれて体験し、「死」についてのイメージを獲得するプロセスにあるこどもたちです。「死ぬのが怖い、一人ぼっちになってしまうのは怖い」という気持ちを抱くのも、もう少し先、学齢期になってからでしょう。このようにまだ、「死」の概念がぼんやりしているこどもたちです。しかし、世の中には「死」についてさまざまな考え方が満ちあふれています。

- ① 「死」は全ての終わりであるという考え。
- ② 死んでも人は生まれ変わるという考え。
- ③ 死んだ後、「霊界」といわれるような世界が待っているという考え、など。

この世的なさまざまな「死」の考え方にふれて惑わされる前に、聖書が教える「祝福のうちにある死」、つづいて「祝福のうちにある復活」について教えたいと思います。

## 〈展開例〉

この絵を見てください。ゴルゴダの丘に、イエス様が真ん中、悪いことをした人が両側に、十字

架につけられています。イエス様は何も悪いことをしていないのに、わたしたちの罪のためにしんでくださったのです。この両側にいた人の一人は、十字架の上で悪い言葉を言いました。けれど、もう一人の人は、イエス様を救い主とい信じて「わたしを救ってください」と言いました。この人は、死んでから天国へ行きました。

さて、みんなは今、何オ？ 何オまで生きるのかな？ それは、神様だけが知っていることですね。

(絵カードを提示する)

みんな、生まれてきたときは、赤ちゃんでした。大きくなってお兄さん、お姉さんになって、おじさんおばさんになって、おじいさん、おばあさんになって、そして……死にます。死なない人はいません。死ぬことはちっともこわいことではないのです。イエス様を信じる人は、死んだらすぐにイエス様のもと、天国へ迎えられるからです。天国はすばらしいところ。それは、イエス様に会えるからです。

## 〈準備するもの〉

ゴルゴダの丘の十字架の絵  
赤ちゃんから老人までの絵

## 〈お祈り〉

天の父なる神さま、わたしたちは赤ちゃんのすがたで生まれ、ずっーと成長していつかは死にます。でも、死ぬことは少しも怖いことでも、心配なことでもなく、イエス様が天国で待っていてくださることを知りました。感謝します。アーメン。

## 〈やってみよう〉

うたってみましょう!! ①  
こどもさんひかしの「38 わたしたちのつみのため」を  
みんながうたいましょ♪  
(じぶんてつくったマウカスもほいてもいいよ～)



## 〈ねらい〉

今日は、ルカによる福音書23章39節以下の「悔い改めた犯罪人」の箇所から、イエス様にある罪の赦しと永遠の命の祝福について、一緒に考えたいと思います。

## 〈展開例〉

今はやりのスピリチュアルカウンセラーというものがあります。その人の顔を見て、その人の抱えている問題や、その人の過去を言い当てるのです。そして、果ては、あなたは何の生まれ変わりだ、前世は何々だった、これから、あなたは輪廻転生で、何々に生まれ変わるでしょう、などともっともらしいことを言うのです。

しかし、聖書はそのようなことを何も教えてはいません。死とは無になることであるとも、聖書は言っておりますが、ましてや前世も輪廻転生も聖書は明確に否定しています。

では、聖書は死について、何を教えているのでしょうか。聖書は二つのことを教えています。一つは人間は死で終わってしまうのではないということです。死後に続く永遠の命があるということです。これは次回学びますが、イエス様の復活によって証明されたことなのです。

さて、今日の御言葉は、イエス様が二人の犯罪人と共に十字架につけられた箇所です。イエス様は二人の犯罪人と共に十字架につけられました。イエス様が真ん中、二人の犯罪人が左右に並びました。これによって、イエス様は目に見える形で罪人となってくださったことが分かります。そして犯罪人の一人がこう言うのです。「十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしっ

た。『お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ』(ver39)。どんなに罰を受けても、最後まで自分の罪を認めない人です。しかし、これは頑固に自分の罪を否定する、ぼくたち私たち、一人ひとりの姿ではないでしょうか。

しかし、素直に自分の罪を認めてイエス様に従おうとする人もいます。「すると、もう一人の方がたしなめた。『お前は神をも恐れぬのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください』と云った」(ver40～42)。

自分の罪を悔い改めて、喜んでイエス様に従う人もいます。そのような人にイエス様は言われました。「するとイエスは、『はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる』と言われた」(ver43)。

イエス様を信じたら、どんな罪も赦されて、「明日」ではない、「今日」、永遠の命が与えられるのです。人生は死で終わってしまうではありません。イエス様を信じる者には、楽園が待っているのです。永遠の命が与えられるのです。イエス様を信じて、永遠の命をいただきましょう。

## 〈お祈り〉

イエス様、私たちは、あなたを信じます。死に打ち勝つ永遠の命を与えてください。このお祈りをイエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



✠ 聖書をひらいて (ルカによる福音書23章39節～43節)

⇒

↓	た	は	に	い
→	→	↓	→	↓
あ	な	き	ん	る
→	↑	↓	↑	↓
わ	う	よ	え	
↓	←	←	↑	⇒
た	い	っ	く	ら
↓	→	↓	↑	←
し	と	し	よ	に
→	↑	→	→	↑

問題①：⇒の方向にスタートして、矢印の示す方向に文字を読んでいってください。

⇒



✠ 考えてみよう (質問に答えてあげてね！)

☒わたしは、「死ぬ」ということを考えると、とてもこわいです。おじいちゃんのおそうしき葬式も見たからです。学校でも、「死ぬ」ことについて、教えてもらわないし、「死ぬ」ってどんなことですか？

(Fちゃん・11才)

✠ 言ってみよう

問36

死んだあとはどうなりますか？

死んで終わりではありません。私たちの魂は完全に聖められ、○○○○に入れられます。私たちの体はイエスさまと共にあり、イエスさまがよみがえられたように再臨の日に朽ちない体によみがえり、魂と一つにされます。死ぬまで、そして死んでからも、イエスさまと私たちは一つです。救われた私たちは、永遠に神さまを喜ぶことができるのです。

✠ やってみよう

・「死」をテーマにした絵本は、「葉っぱのフレディ」「わすれられないおくりもの」などいろいろあります。しかし死んだあとのことがはっきり書いてあるものは聖書しかありません。

聖書に書いてあるイエスさまの約束をみんなで、読みましょう。



✠ 今週の暗唱聖句 (ルカによる福音書23章43節)

するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に○○○○にいる」と言われた。

〈ねらい〉

### 1. 死のときの祝福。

「死のときに確かな祝福がある」、これが死についてイエス様が教えてくださったことである。

死のときの最大の祝福は、今とは違う形で、主イエス・キリストと共にいるということである。今も主イエス・キリストは私たちと共にいてくださるが、死のときにこそ私たちの罪は完全に聖められて、完全な形で主イエス・キリストと共にいることができるのである。したがって、主イエス・キリストを信じる者は、死を恐れなくてもよいのである。

〈子どもカテキズム〉

問36：死んだあとはどうなりますか。

答：死んで終わりではありません。

私たちの魂は完全に聖められ、天の国に入られます。

私たちの体はイエス様と共にあり、イエス

様がよみがえられたように再臨の日に朽ちない体によみがえり、魂と一つにされます。死ぬまで、そして死んでからも、イエス様と私たちは一つです。救われた私たちは、永遠に神様を喜ぶことができるのです。

〈展開例〉

### 1. 説教を聞いて教えられたこと・考えたことを分かち合う。

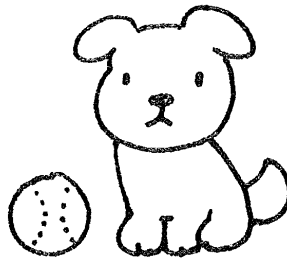
Q. 説教を聞いて新しく教えられたことは？

Q. 分からなかったことは？

### 2. 生徒と一緒に考える。

Q. 「死」によって親しい人と別れることは悲しいことであるが、聖書は「死」をただ悲しいこととして教えているだろうか？

Q. 死の時に与えられる祝福とはなんだろうか？



**〈背景〉**

黙示録は、1章1～2節によると、神がキリストと天使を通して、ご自分のしもべたちに、未来に起こる出来事を明らかにされたものである。その内容は、使徒ヨハネを通して、黙示（幻）という形で示された。黙示録には、終末におけるサタンの活動についての予言がある。それに対して、歴史を支配される神の主権、小羊（キリスト）による贖いの完全さ、そしてキリスト者の最終的な勝利が描かれていて、苦難の中にある読者に、大きな希望と慰めと勇気を与えてくれる。パウロは迫害にあっていられるキリスト者に「わたしたちが神の国へ入るには、多くの苦しみを経なくてはならない」（使徒14:22）と言ったが、この個所には、苦難に勝利した聖徒たちが、将来神の国で受ける祝福が描写されている。

**〈白い衣を着た大群衆（7:9-14）〉**

数え切れないほどの大群衆は、あらゆる国民、種族、民族、言語の違う民から集められた者であり、神のアブラハムに対する約束の成就である。神は「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。あなたの子孫はこのようになる」（創15:5）とかつて言われた。アブラハムの信仰の子孫である数え切れない大群衆が、時代と民族と言語を超えてひとつとされ、神の国で共に玉座の前に出て、神と小羊を礼拝する至福に入れられる。彼らの着ている白い衣（14）はキリストの義を象徴し、キリストの血により罪を赦され、義とされた者に与えられる衣である。彼らは「大きな苦難を通過してきた者で」（14）、信仰の勝利者でもある。手に持っているなつめやしの枝は、祝いの喜びを表現するのに使われた（ヨハネ12:13）。彼らは大きな喜びをもって、神と小羊の前に出て、「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊とのものである」（10）と叫んだ。彼らは、彼らの救いが全面的に神の主権とキリストの贖いによることを知っていて、神と小

羊に栄光を帰した。

また天使たちはみな玉座の前にひれ伏し、「アーメン。賛美、栄光、知恵、感謝、誉れ、力、威力が、世々限りなく私たちの神にありますように。アーメン」（12）と賛美した。主イエスはかつて「一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある」（ルカ15:10）と言われた。天使たちは、すべての贖われた民が神のみ前に立つのを見て、言い尽くすことのできない喜びに満たされた。そして、知恵をもって救いのみ業を計画され、また成就された神に感謝、賛美、栄光があるように、と言った。

（この場面に出てくる長老たちと四つの生き物が何を表しているか、については多くの説があり、紙面の都合上、ここでは説明を割愛させていただく。）

**〈神の国の祭司（7:15-17）〉**

大群衆は「大きな苦難を通過してきた者で、その衣を小羊の血で洗って白くした」（14）者たちであり、「それゆえ、彼らは神の玉座の前において、昼も夜もその神殿で仕える」（15）。聖徒たちは神の国の神殿の祭司として仕える。この場合の神殿は建物ではない。天そのものが神の臨在に満ちた神殿である。彼らは神の国の祭司として、霊的な礼拝をし、賛美を捧げる。神は彼らの上に幕屋を張られる。この幕屋は、荒野の幕屋が神の臨在と栄光のとどまるところを象徴していたように、神がご自分の民のただなかに臨在されることの象徴と考えられる。そこでは、彼らはもはや飢えることも渴くこともない（マタイ5:6、ヨハネ6:35）。霊的で完全な充足感を与えられる。キリストは彼らの良き牧者であり、羊を命の水の泉へ導いてくださる。すなわち、彼らを神の臨在のただなかへ導かれる。そこで神は彼らを慰め、涙をぬぐってくださる。ここにキリスト者の希望がある。

（後藤公子）

子どもカテキズム

問36 死んだあとはどうなりますか。

答 死んで終わりではありません。

私たちの魂は完全に聖められ、天の国に入れられます。

私たちの体はイエスさまと共にあり、イエスさまがよみがえられたように

再臨の日に朽ちない体によみがえり、魂と一つにされます。

死ぬまで、そして死んでからも、イエスさまと私たちは一つです。

救われた私たちは、永遠に神さまを喜ぶことができます。

ウェストミンスター小教理問答

問38 信者は、復活の時、キリストからどんな祝福を受けますか。

答 信者は、復活の時、栄光あるものによみがえらせられて、

審判の日に、公に受け入れられ無罪と宣告され、

永遠に、全く神を喜ぶことにおいて完全に祝福された状態にされます。

### 〈キリスト者にとっての復活〉

ウ小教理問答は「死のときの祝福」と問答を分けているが、子どもカテキズムのように、キリスト者の死と復活は一つに結びついた事柄として理解することが大切である。その理解に立ちつつ、「復活のときの祝福」を学びたい。聖書は、終わりの日、キリストの再臨の日の人間の復活について語っている。すべての人はその時、魂と体とが再び結び合わされて、復活する。そして、再臨の主イエス・キリストの審判を受けるために、その前に立つ。キリストの再臨の日は、審判の日でもあるのである。しかし、キリストに結び合わされた私たちキリスト者にとってその審判は、裁きを受ける恐怖の時ではなく、喜びの時なのである。なぜなら、キリストがその十字架と復活の御業において成し遂げてくださった救いがこのとき完全なかたちで私たちにもたらされるからである。

### 〈公に受け入れられ無罪と宣告される〉

子どもカテキズムは、再臨の日における審判の要素を強調していない。しかし、使徒信条においても「かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん」と告白するように、私たちの復活と再臨のキリストによる審判は切り離すことのできない関係にある。全ての人間は、神の前に罪人であり、最後の審判においてもはっきりと有

罪を宣告されるべき存在である。しかし、キリストの十字架による罪の贖いによって、キリストへの信仰を与えられた者、キリストに結び合わされた者には、罪の赦しが与えられる。罪の赦しとは、罪が無くなることではなく、有罪であるはずの者が無罪を宣告されるということである。これによって、私たちは神の前に義とされ、完全な祝福に入れられるのである。

### 〈永遠に神さまを喜ぶ〉

復活のとき、私たちキリスト者に与えられる体は、朽ちない体、新しい体であり、完全に聖化された栄光の体である。そのように「栄光あるもの」によみがえらせられたキリスト者は「永遠に、全く神を喜ぶことにおいて完全に祝福された状態にされる」。ウ小教理問答の問1を思い起こす。「人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです」。この目的が完全に遂げられるのである。私たちの聖化の歩みは、キリストの再臨の日を目指してのものであった（子どもカテキズム問35）。それは言い換えれば、私たちの人としての目的が完全に成し遂げられる時を目指してのものであるということである。キリストの再臨の日、私たちの復活のとき、私たちの聖化の歩みは完成する。それこそが私たちにとっての希望であり、慰めなのである。（松田基教）

テキスト ヨハネの黙示録 7章9～17節  
カテキズム 子どもカテキズム 問36

### 〔単元のねらい〕

黙示録7章9節以下は天上の勝利の教会の礼拝を描写している。ヨハネの教会はローマによる迫害の中で、この幻に大いに励まされたであろう。天上の勝利の教会の礼拝が、地上のたたかいの教会を励ますことを覚えない。後半で、天上の勝利の教会につらなる聖徒たちもお終わりの日の希望の中にあることに触れた。なおここでも「子どもカテキズム」問36とともにウェストミンスター小教理問答問38を参照しておきたい。

## 「天国の礼拝」

今日は神さまがヨハネさんに見せてくださった、天国の教会の礼拝の幻についてお話ししたいと思います。聖書を見ると、神さまが時々イエスさまを信じて生きる人々に天国の幻を見せてくださったことがわかります。それは地上での信仰のたたかいを励ましてくださるためです。

このとき、ヨハネさんと、それから同じ信仰に生きる教会の仲間たちも、迫害の苦しみと試練の中にありました。そのきびしいたたかいの日々であってもイエスさまを信じる信仰にかたく立つことができるように、神さまは天国でささげられている礼拝のようすを見せてくださったのです。そのすばらしい礼拝の幻を、ヨハネさんは喜びに満たされて書き記したのです。

その礼拝には、数え切れないほどにおおぜいの人々が集っていました。地上の生涯を忠実な信仰に生き抜いて、そして天国に招き入れられた人々です。

その人々は天の王座に座しておられる父なる神さまとイエスさまの前に立ち、手になつめやしの枝をもって、大声で神さまをほめたたえていました。そのひとりひとりには、神さまによってしるしがつけられていました。この人は走るべき道のりを走り終えて信仰を守りとおしたという証明のしるしです。

そしてこの人々は、白い衣を着ていました。聖

書では白は勝利をあらわす色です。地上の歩みを歩んでいたときには、さまざまな苦しみもあったことでしょう。きびしい試みもあったことでしょう。けれどもひとりひとり、その信仰のたたかいに勝利をしたのです。苦しみや試練はこの人々を打ち負かすことも、イエスさまから引き離すこともできませんでした。苦しみや試練にあうことでかえってイエスさまへの信頼は増し加わり、さらに深くイエスさまと結びつけられることになったからです。今は悲しみも嘆きも労苦もなく、ただ喜びがあるだけです。イエスさまがともにいてくださる、天国の喜びがあるだけです。

この人々は数え切れない大群衆です。すなわち、天国とはある選ばれた人たちだけしか入れない、ごくひとにぎりのすぐれた人々や英雄だけが集まっている、そういう場所ではないのです。地上の日々をそれぞれにイエスさまを信じ、イエスさまの十字架を見上げ、イエスさまを喜び、イエスさまに従って生きた人ならば、だれでも入ることができるのです。どんなに弱く、貧しい人も天国に招き入れられるのです。そこはわたしたちのひとりひとりも、やがて迎えられる場所なのです。この地上の日々にあっては、わたしたちは地上の教会につらなって神さまを礼拝します。苦しみや試練を耐え忍びながらイエスさまをほめたたえます。けれどもやがてわたしたちも、この勝利の教会、天国の礼拝に招き入れられるのです。



そしてわたしたちは、主の日には地上の礼拝だけがささげられているのではないことを覚えましょう。天国でも礼拝がささげられています。おびたしい人々が、勝利を得て白い衣をまとった人々が、地上にあるわたしたちと声を合わせて神さまをほめたたえているのです。

それはわたしたちにとって、大きな励ましです。天国にいる聖徒たちが、わたしたちの信仰のたたかいを勇気づけてくれるのです。天で響きわたる讚美の声に、わたしたちも声を合わせるとき、わたしたちはどのような試練や苦しみにもうちかつことができるのです。どのようなときにも希望をもって歩むことができるのです。

ひとつのことを付け加えます。天国にいて神さまを礼拝している人々も、そこで礼拝の喜びがきわまるというのではなく、なお希望の中にあります。終わりの日の希望、イエスさまの再臨の日の

希望です。天にある人々もまたその日を待ち望んでいます。その日にこそイエスさまを信じて生きたすべての人々は、イエスさまが墓を破ってよみがえられたように、栄光ある者によみがえらせられます。復活の新しい体、朽ちることのない体を与えられます。そして最後の審判において無罪を宣告され、公に神さまに受け入れられ、神さまを喜ぶことにおいてまったき祝福を得るのです。

「子どもカテキズム」の最初の問答には、わたしたちが生きているのは神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光をあらわすためであると、そしてこれがわたしたちの喜びであると記されています。すなわち、神さまを礼拝することこそわたしたちの喜びです。終わりの日の復活のときにこそ、わたしたちの礼拝はまったきものとなります。そこにわたしたちの希望があり、喜びがあります。

(木下裕也)

---

[今週の暗唱聖句]

コリントの信徒への手紙 一 15章55節

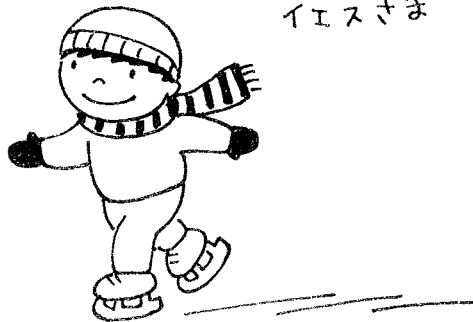
死よ、お前の勝利はどこにあるのか。

死よ、お前のとげはどこにあるのか。

---

ありがとう

イエスさま



## 〈ねらい〉

終わりの日、イエス様の再臨とともに、イエス様を信じて死んだすべての人は、魂と体結び合わされて復活します。そして、栄光ある者としてよみがえらされ、復活の新しい体で神様を礼拝する者とされることを学びます。

## 〈こども観〉

死んで墓に葬られた人の体が、「再臨」の日には、よみがえり、体と魂は結び合わされるという「復活」について大胆に語りましょう。

こどもたちは、この神秘的とも言える恵みをどんなふうを受け止めてくれるでしょうか。

聖霊が豊かに注いでくださって、こどもたちに「復活の信仰」が与えられますように。

## 〈展開例〉

先週のお話をふりかえってみましょうね。

(絵カードを見せます)

わたしたち、イエス様を信じる人たちは、死んだら、ただちに天国にいれられて顔と顔を見合わせてイエス様に会うことができます、ということ

を知りましたね。今日は「復活」ということについてお話します。

人が死ぬと「魂」は天国に入れられますけど、「体」はどうなるのでしょうか。死ぬと「体」はお墓に入ります。イエス様がもう一度、この地上に来てくださるそのとき、天国にある「魂」とお墓の中にある「体」は一つにされるのです。そして、今までしてきた悪いことも完全にゆるされて、完全な心と体で神様を礼拝することができるようになります。

神様はわたしたちに、こんなすばらしい祝福を用意してくださるのです。

## 〈準備するもの〉

十字架と復活の絵カード

## 〈お祈り〉

天の父なる神さま、わたしたちが死んだあとにも、復活というすばらしい恵みを用意してくださいありがとうございます。このイエス様の父なる神様をこれからも心から信じていきますように。アーメン。

## 〈やってみよう〉

うたってみましょう!! ②

こどもさんびかしの「4」すくいぬしは ハレルヤを  
みんなで うたきましょう♪♪



(じぶんでつくった マウカスを ぶいてもいいよ〜)

**〈ねらい〉**

今日は、ヨハネの黙示録の御言葉から、天上の礼拝の素晴らしさと復活の祝福について一緒に考えたいと思います。

**〈展開例〉**

世界には、二種類の教会があります。一つは、この地上で礼拝を持っている、「たたかいの教会」、「目に見える教会」です。改革派教会は、北は北海道、南は九州沖縄まで、150ほどの教会がありますが、この一つひとつの教会は、皆、「たたかいの教会」、「目に見える教会」です。

しかし、もう一つの教会があります。それは、「目に見えない教会」とか「勝利の教会」と言われている教会です。この「目に見えない教会」には、歴史が始まって以来、全世界の国家、民族、あらゆる人種、老若男女を問わず、イエス様を信じているクリスチャンが全員集められているのです。そして、天上において、神様に礼拝をささげているのです。「この後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、大声でこう叫んだ。「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊とのものである」（黙示録7:9～10）。

イエス様を信じて、ぼくたち私たちに、復活の体をいただく約束、天国に行く約束が与えられています。そうであれば、ぼくたち私たちは、この地上の教会の会員であると共に、天上の教会のメンバーでもあるのです。この天上の礼拝の大群衆の一人として神様を礼拝することができるのです。

ですから、イエス様を信じて、洗礼を受けることが大切です。イエスさまを信じているぼくたち私たちは、もうすでに天上の教会のメンバーとして、神さまをほめたたえて礼拝しているのです。地上の目に見える教会の礼拝は、天上の勝利の教会の礼拝につながっています。そして、私たちは、審判の時に、まさにすべての罪を赦されて、無罪を宣告されて、「復活の体」「朽ちない体」をいただいて、祝福の内に永遠に神様をほめたたえて生きていくことができるのです。

ぼくたち私たちは、この復活の喜びをただ漠然と信じているのではありません。この歴史の中で、イエス様が死に打ち勝って、確かにおよみがえりくださり、永遠の命への道を開いてくださったのです。

だから、イエス様を信じるぼくたち私たちも復活をすることが出来るのです。この世界には、いろいろな悩みや苦しみがあります。しかし、天国では、「彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく、太陽も、どのような暑さも、彼らを襲うことはない。玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、命の水の泉へ導き、神が彼らの目から涙をことごとくぬぐわれるからである」(ver16～17)と語られるとおりに、あらゆる苦しみから解放されて、神様の御前に安らぐことができるのです。イエス様が復活して下さったのですから、ぼくたち、私たちもこの復活の希望を固く握りしめて歩んでいこうではありませんか。

**〈お祈り〉**

イエス様、私たち一人一人が復活の希望を固く信じて生きることができるよう導いてください。イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



✠ 聖書をひらいて (ヨハネの黙示録7章9節～17節)

⇒	カ →	レ ↓	ミ →	ダ ↓	ア →
	ノ ↓	ラ ←	ナ ↑	ヲ ↓	デ ↑
	メ →	カ →	ラ ↑	コ ↓	ラ ↑
	ク ↓	ト ←	ゴ ←	ト ←	カ ↑
	ヌ →	グ →	ワ →	レ →	ル ↑



☆問題①：⇒の方向にスタートして、矢印の示す方向に文字を読んでいってください。



か  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_る



✠ 考えてみよう (質問に答えてあげてね！)

☒「死んだ後もイエスさまといっしょ」ということを聞いて安心したよ。でも生きていても、死んでもイエスさまといっしょだったら、生きていて苦しいことがたくさんある人は、天の国に行ったほうがいいですか？ (Nくん・12才)

✠ 言ってみよう

問36

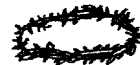
死んだあとはどうなりますか？

死んで終わりではありません。私たちの魂は完全に聖められ、天の国に入れられます。私たちの体はイエスさまと共にあり、イエスさまがよみがえられたように再臨の日に朽ちない体に〇〇〇〇〇、魂と一つにされます。死ぬまで、そして死んでもからも、イエスさまと私たちは一つです。救われた私たちは、永遠に神さまを喜ぶことができます。

✠ やってみよう

・来週は、受難週です。受難週のためのみことばと、祈りのカレンダーを作しましょう。

✠ 今週の暗唱聖句 (I コリントの信徒への手紙 15章55節)



〇よ、お前の勝利はどこにあるのか。〇よ、お前のとげはどこにあるのか。

〈ねらい〉

### 1. 復活のときの祝福。

再臨のときに、すべての人が魂と体がもう一度結び合わされ、復活するということを聖書は語っている。そして、キリストを信じなかった者は裁きを受けるが、キリストを信じて地上の生涯を歩んだ者は、そのとき、天の国の完成に加えられるのである。まさにそのときに、私たちに完全な罪の赦しが与えられ、私たちの喜びと希望が完成するのである。

### 2. ゴールを目指して。

このような完成（ゴール）が、私たちが今歩んでいる道の先に確かに用意されていることを覚えながら、日々の生活を歩む者でありたい。

〈子どもカテキズム〉

問36：死んだあとはどうなりますか。

答：死んで終わりではありません。

私たちの魂は完全に聖められ、天の国に入

れます。

私たちの体はイエス様と共にあり、イエス様がよみがえられたように再臨の日に朽ちない体によみがえり、魂と一つにされます。死ぬまで、そして死んでからも、イエス様と私たちは一つです。

救われた私たちは、永遠に神様を喜ぶことができますのです。

〈展開例〉

### 1. 説教を聞いて教えられたこと・考えたことを分かち合う。

Q. 説教を聞いて新しく教えられたことは？

Q. 分からなかったことは？

### 2. 生徒と一緒に考える。

Q. 聖書は、世の終わりのときについてどのように教えているだろうか？

Q. 私たちが復活するとき、どのような喜びが用意されているだろうか？



## 〈小学科上級の答えの参考〉

- 1/4 〈聖書をひらいて〉 ①あるけ②げんき③とこ④しんこう⑤びょうにん⑥ゆるされる⑦けんい  
**さ ん び**  
〈考えてみよう〉 エペソ2:5、8~9＝「自らの力によるのではなく、神の賜物です。」わたしたちが神の子にさせていただけるのは、ただ神の恵みによるのです。
- 1/11 〈聖書をひらいて〉 ①マタイ②したがった③つみびと④あわれみ⑤いけにえ  
**レ ビ**  
〈やってみよう〉 ルカ6:12＝ペトロ（漁師：教会の基としての岩）・アンデレ（漁師）・年長のヤコブ（漁師）・ヨハネ（漁師）・フィリポ・トマス・年少のヤコブ・タダイ・熱心党のシモン・ユダ・バルトロマイ  
〈考えてみよう〉 ルカ19:10＝「人の子は失われたものを捜してすくうために来たのである」、ルカ18:9~14
- 1/18 〈聖書をひらいて〉 ①みをむすぶ②まこと③ていれ④つながる⑤ぶどうのき⑥おきて⑦とどまる  
**む す こ**
- 1/25 〈聖書をひらいて〉 「いきなさい」  
〈考えてみよう〉 ヨハネ8:15＝「わたしは、だれをも裁かない」
- 2/1 〈聖書をひらいて〉 ①コ②もはやどれいではなくこです  
〈考えてみよう〉 ガラテヤ4:6＝「アッパ、父よ」と呼ぶ、聖霊を私たちの心に送ってくださったから
- 2/8 〈聖書をひらいて〉 かみのめぐみをむにはしません  
〈考えてみよう〉 フィリピ3:12＝「すでに完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリストイエスに捕らえられているからです。」
- 2/15 〈聖書をひらいて〉 ①へいわ②あい③ゆるしい  
〈考えてみよう〉 ロマ8:29＝「……御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。」顔!?ではなくて、愛・聖さ……神さまのご性質において。
- 2/22 〈聖書をひらいて〉 ①トモニ②イエスは、ちかよって いわれた  
〈考えてみよう〉 使徒16:31＝「主イエスを信じなさい。そうすればあなたもあなたの家族も救われます。」
- 3/1 〈聖書をひらいて〉 腸、足、鼻、口、耳、手、目、歯、顔、毛、肺、爪、腕……など、  
**か ら だ**  
〈考えてみよう〉 ガラテヤ5:10＝「信仰によって家族になった人々に対して善を行いましょう」など。
- 3/8 〈聖書をひらいて〉 ヒカリ 〈考えてみよう〉 Iテサロニケ5: I、マタイ24:36
- 3/15 〈聖書をひらいて〉 目をさまし、身をつつしんでいましょう  
〈考えてみよう〉 マタイ24:44＝「……用意していなさい」 マタイ24:46  
＝「主人が帰って来た時、言われたとおりにしているのを見られる僕は幸いである」
- 3/22 〈聖書をひらいて〉 あなたはきょうわたしといっしょにらくえんにいる  
〈考えてみよう〉 ヨハネ1 1:25＝「わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者は誰も決して死ぬことはない。」
- 3/29 〈聖書をひらいて〉 カレラノメカラナミダヲコトゴトクヌグワレルカラデア  
〈考えてみよう〉 ロマ14:7~8「主のために生き……」

# 2009年4～6月カリキュラム（第33号）

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第2年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
4月5日 受難週 進級式	キリストの受難	—	—
		ヨハネ19:28-37	ヨハネー4:9
十字架において神の小羊としてささげられた主イエスを仰ごう			
12日 復活祭	復活のキリスト	—	—
		ヨハネ20:24-29	ヨハネ20:27
復活の主イエスが疑い深いトマスにも現れた。復活の主イエスを信じて歩もう			
19日	第三部 生活の道	問37	ハイデ2、86、90、ウ大97
	感謝の生活	ヨハネ12:1-8	コリント二5:14前半
主が救いの道を与えてくださった。主の恵みに感謝して生きる道を歩もう			
26日	感謝としての服従	問38	ハイデ91、ウ大97、ウ小39
		ローマ6:12-23	コリント一15:55
罪から解き放たれたことを喜び、感謝して、神のしもべとして歩もう			
5月3日	十戒 —感謝の道標	問39	ウ大95、97、98、ウ小40、41
		申命記6:16-25	申命記6:17、18
十戒は神から神の民への愛の贈り物、神の愛の言葉。神の愛にこたえて歩もう			
10日 母の日	神と人への愛	問40	ウ小42、ハイデ93
		マルコ12:28-34	マルコ12:30、31より
神の愛にこたえて、わたしたちも愛することに生きる。神と人を愛する愛に			
17日	贖いのみわざ —過越	問41、42	ウ小43、44
		出エジプト12:21-27	出エジプト20:2
十戒の根拠である神のみわざ—過越—を学び、神のくすしきみわざを仰ごう			
24日	過越の成就 —キリスト	問41、42	ウ小43、44、ハイデ1
		ローマ6:1-11	ローマ6:11後半
十字架のキリストにおいて贖いのみわざが成就した。キリストに結ばれて歩もう			
31日 聖霊降臨祭	聖霊降臨・教会の誕生	—	—
		使徒言行録2:1-13	使徒言行録2:4
聖霊によって新約の教会が生み出された。聖霊に生かされる教会として歩もう			
6月7日	第一戒 神を神とする	問43、44	ウ小45、46、47
		マタイ4:1-11	出エジプト20:3
神を神とする戦いに勝利された主イエスに結ばれて、神を神とあがめて歩もう			
14日 花の日	第二戒 刻んだ像の禁止	問45、46	ウ小49、50、51
		イザヤ46:1-13	出エジプト20:4前半、5前半
主なる神は生きておられる。偽りの神々しりぞけ、まことの神をあがめよう			
21日 父の日	第三戒 神の御名	問47、48	ウ小53、54、55
		マタイ7:21-23	出エジプト20:7前半
神の御名を唱えることで過ちをおかさない。神を正しくたたえ、神に祈ろう			
28日	第四戒 主の日の安息	問49、50	ウ小57、58、59
		申命記5:12-15	出エジプト20:8
主イエス・キリストを礼拝する主の日の喜びとその安息を分かち合おう			

## 2008年度 年間カリキュラム

二年サイクル第1年（子どもカテキズム問1～36）

	月 日	教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム
2009年 第33号	4月5日	受難週 進級式	キリストの受難	—
	4月12日	復活祭	復活のキリスト	—
	4月19日		第三部 生活の道 感謝の生活	問37
	4月26日		感謝としての服従	問38
	5月3日		十戒—感謝の道標	問39
	5月10日	母の日	神と人への愛	問40
	5月17日		贖いのみわざ—過越	問41、42
	5月24日		過越の成就—キリスト	問41、42
	5月31日	聖霊降臨祭	聖霊降臨・教会の誕生	—
	6月7日		第一戒 神を神とする	問43、44
	6月14日	花の日	第二戒 刻んだ像の禁止	問45、46
	6月22日	父の日	第三戒 神の御名	問47、48
	6月28日		第四戒 主の日の安息	問49、50
	第34号	7月5日		第五戒 父母を敬う
7月12日			第六戒 殺してはならない	問53、54
7月19日			第七戒 姦淫してはならない	問55、56
7月26日			第八戒 盗んではならない	問57、58
8月2日			第九戒 偽証してはならない	問59、60
8月9日		(平和)	平和を創り出す	—
8月16日			第十戒 むさぼりの禁止	問61、62
8月23日			神のおきてを喜ぶ生活	問63
8月30日			十戒の完成者キリスト	問64
9月6日			教会に生きる (一)	問65
9月13日			教会に生きる (二)	問66
9月20日		(敬老の日)	信仰と悔い改め	問67
9月27日			恵みの手段	問68



年・号	月 日	教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム
第35号	10月4日		生ける神の御言葉	問69
	10月11日		御言葉への聴従	問70
	10月18日		礼典	問71
	10月25日	宗教改革記念	宗教改革	—
	11月1日		洗礼	問72、73
	11月8日		聖餐	問74、75
	11月15日		祈りとは何か（一）	問76
	11月22日		祈りとは何か（二）	問76
	11月29日	アドベント	待降節	—
	12月6日	アドベント	待降節	—
	12月13日	アドベント	待降節	—
	12月20日	降誕祭	待降祭	—
	12月27日	年末	一年の感謝	—
2010年 第32号	1月3日	新年	新しい一年に向けて	—
	1月10日		祈りのお手本	問77
	1月17日		天の父よ	問78
	1月24日		御名をあげさせたまえ	問79
	1月31日		御国を来たさせたまえ	問80
	2月7日	(信教の自由)	御心の天になるごとく	問81
	2月14日		日用の糧を与えたまえ	問82
	2月21日	レント	我らの罪を赦したまえ	問83
	2月28日	レント	悪より救い出したまえ	問84
	3月7日	レント	頌栄	問85
	3月14日	レント	アーメン	問85
	3月21日	レント	受難節	—
	3月28日	受難週主日	受難週	—

# 副読本のご案内

## 『主は羊飼―中高生のための教理入門―』

価 格 800円

著 者 木下裕也

(名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集員・神戸改革派神学校講師)

再刷発行いたしました。ぜひお買い求めください。ご注文は教案誌編集部まで。

### ● 人生の目的―神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に連れ始められた方と聖書の学びをしていたときのことです。そのときたまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の問1を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつぶやくようにおっしゃいました。一わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということを考えたこともありませんでした、と。

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのだ、知らずにいるのとは、やはり生きかたが大きくことになってくるのではないのでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は一瞬にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちでそのすべてを棒にふることもあります。熱烈な恋もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなものです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の眞の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きることができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の問1を見ましょう。

問 人のおもな目的は何であるか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手にするジュネーブ教会信仰問答の問1はこうです。

問 人生の目的は何ですか。

答 神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の眞の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身にはありません。私たち自身の何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなみと私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

# 「いのちのパン」のぞ案内

（「子どもカテキズム」による聖書日課）

価格 800円

著者 相馬伸郎

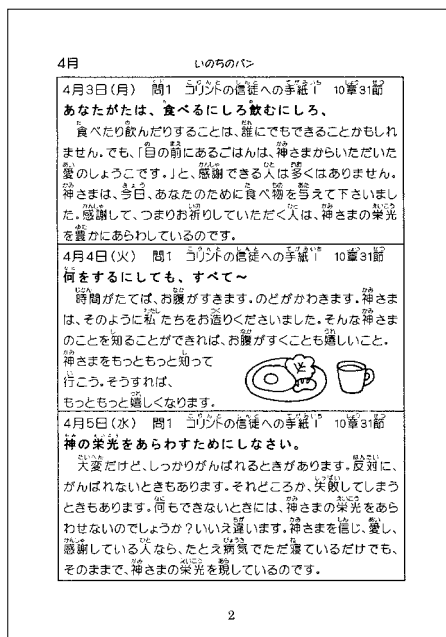
（名古屋岩の上传道所宣教教師・教会学校教案誌編集長）

本誌に掲載された「いのちのパン」が一冊の書物として改訂出版されました。

カテキズムに基づくものとして類のないものです。ご注文は名古屋岩の上传道所まで。



表紙



2ページ

### 〈執筆者よりひとこと〉

- 正直に言って甘く考えていました。いつも幼稚科の分級は楽しくやっていますから、その調子で書けばいいやと思っていたのですが、書き始めるとしどろもどろになってしまいました。勉強させていただきました。解放されて心底ほっとしています（中島雅子）。
- 天国に続く、長い、長い、信仰生活を一緒に歩んでいきましょう。イエス様がいつも共にいて下さいます（小堀 昇）。
- プロテスタント宣教150年、中部中会50年、（岩の上宣教開始15年）……2009年は節目の年です。教会学校伝道135年、なお励みましょう（相馬直子）。
- 一人でも多くの子どもたちが、若いときに主イエス・キリストと出会うことができますようにお祈りしています（立石 彰）。
- 過ぎし一年の恵みを数えつつ、新しい年に向けて信仰を整えて歩みたいと願います（木下裕也）。
- 「いのちのパン」が大会機関誌リジョイスに移行しました。教案誌の中のみでなく、大会的に用いられることに感謝しつつ……（辻 幸宏）。

### 〈あとがき〉

- 第31号までで、「いのちのパン」の掲載を休止しました。2009年から、日本キリスト改革派教会による教育機関誌『リジョイス』（聖書日課）が発行されることになっており（2009年1月号が2008年12月に発行される予定）、その『リジョイス』誌上に「いのちのパン」が掲載されます。ぜひ『リジョイス』でも、「いのちのパン」をお用いください。おとなも子どもも、御言葉に親しむ生活を整えて参りましょう。
- 「教会学校・日曜学校訪問」として、東北中会・中部中会合同高校生キャンプ“Summer Days 2008”の報告を掲載しました。2009年には、大会教育委員会の主催により開催されます。高校生の信仰の成長のために、良い機会となるよう、期待しています。
- 今号は、「諸教派の教会教育事情」はお休みにいたしました。
- 今号まで、表紙イラストを引間裕子姉が担当してくださいました。暖かみのあるイラストをどうもありがとうございました。
- 副読本『主は羊飼ひ』（木下裕也著）を販売しています。ぜひ各教会の学びのテキストとしてお用いください。
- 本紙に掲載された相馬伸郎牧師執筆の「いのちのパン」が改訂され、一冊の書物として発行されました。ぜひお用いください。

### 〈購読の申し込み〉

- 『教会学校教案誌』をぜひご購読ください。また、別冊『子どもカテキズム』（300円）をぜひお買い求めください。バックナンバーもあります。第24号までは一部500円で販売しています（品切れの号もあり）。お求めは下記まで。
- 副読本『主は羊飼ひ』と『いのちのパン』（相馬伸郎）のお買い求めも下記までご連絡ください。

名古屋岩の上伝道所 相馬伸郎まで  
〒458-0021 名古屋市緑区滝の水2-2012  
Tel/Fax. 052-895-6701

---

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき	小野静雄 (多治見教会牧師)
牧野信成 (神戸改革派神学校専任教授)	赤石純也 (西神伝道所協力牧師)
巻頭説教	相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)
長谷川潤 (四日市教会牧師)	二宮 創 (中部中会無任所教師)
教会学校・日曜学校訪問	望月 信 (高蔵寺教会牧師)
吉岡契典 (仙台カナン教会牧師)	木下裕也 (名古屋教会牧師)
聖書研究	分級展開例
岡本 告 (前秩父教会牧師)	幼稚科
吉岡契典 (仙台カナン教会牧師)	中島雅子 (高蔵寺教会教会学校教師)
西堀則男 (関キリスト教会牧師)	小学科下級
三川栄二 (稲毛海岸教会牧師)	小堀 昇 (いずみ伝道所協力教師)
後藤公子 (前インドネシア派遣女性宣教師)	小学科上級
カテキズム研究	相馬直子 (名古屋岩の上伝道所日曜学校校長)
梶浦和城 (豊明教会牧師)	中学科
吉田 崇 (坂出飯山教会牧師)	立石 彰 (東仙台教会牧師)
松田基教 (高松教会牧師)	イラスト作画
説教展開例	表紙 引間裕子 (秩父教会)
坂井孝宏 (熊本伝道所宣教教師)	本文 岡野美佳 (青葉台教会)

---

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上伝道所宣教教師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻 幸宏	大垣伝道所協力牧師
長谷川潤	四日市教会牧師
望月 信	高蔵寺教会牧師

---

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』  
2009年1・2・3月号 (季刊)  
第32号  
2008年11月30日発行

---

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上伝道所 宣教教師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ
頒価	900円 (本体価格)

---